

# 明治学院史資料集

第12集

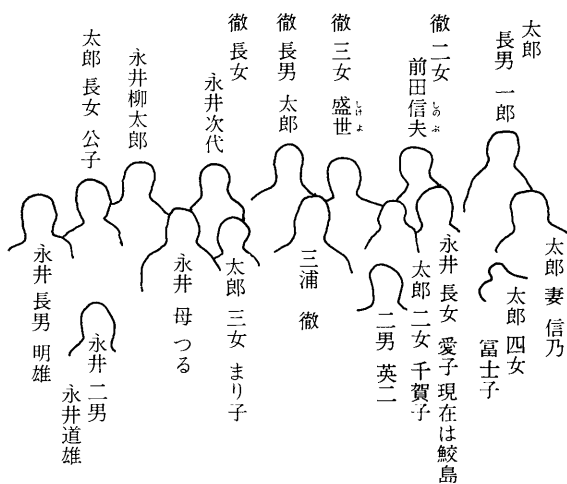
明治学院大学図書館

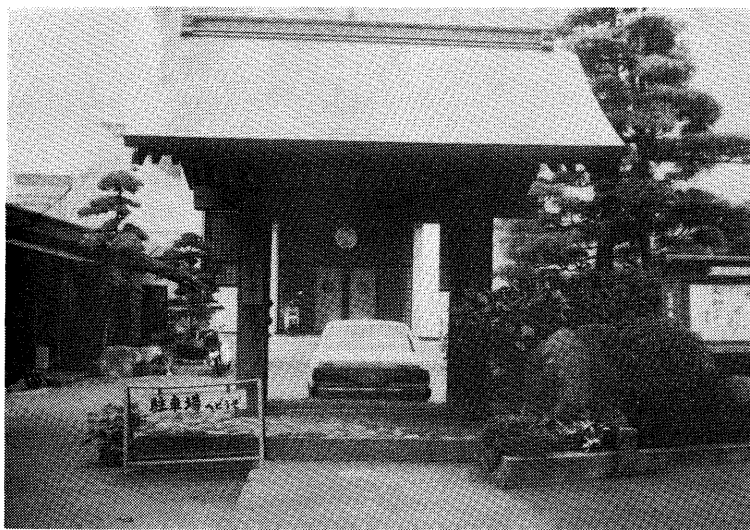
明治学院史資料集  
(12)

明治学院大学図書館



大正14年 5 月 自宅にて





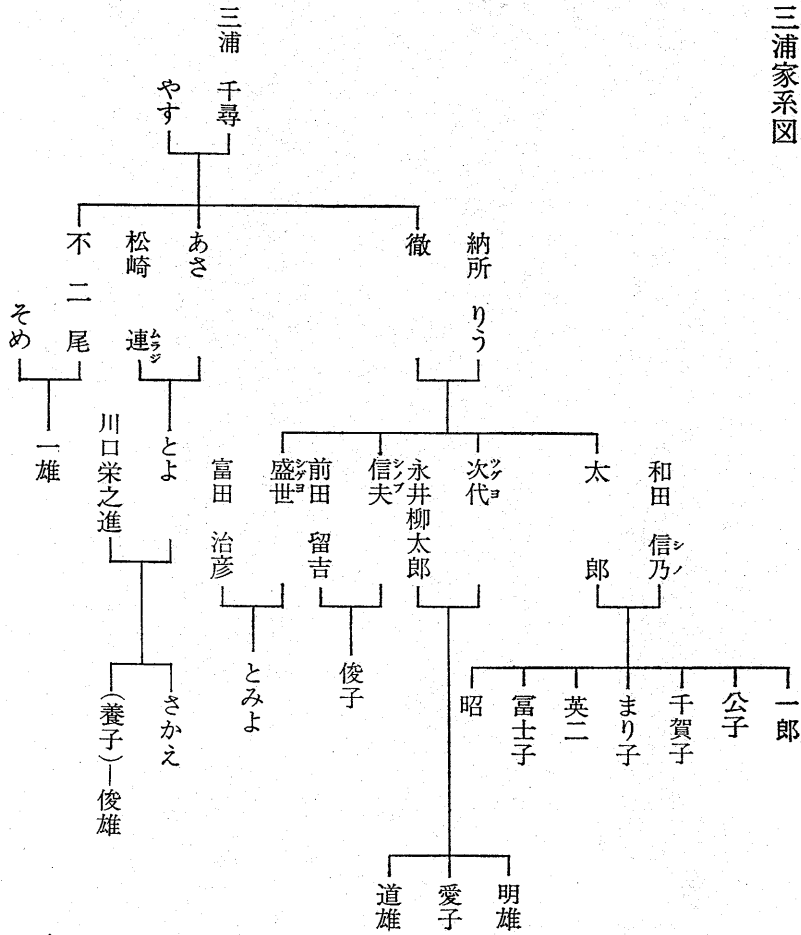
沼津市東熊堂  
松澤山大泉寺



三浦家墓



三浦家系図



# 目次

## 凡例

祖父、三浦徹のこと……………	永井道雄……………	1
三浦徹夫人・りうについて……………	工藤英一……………	7
三浦徹手記続統恥か記……………		
第九卷（第百三十一章～第百四十五章）……………		13
第十卷（第百四十六章～第百五十六章）……………		39
第十一卷（第百五十七章～第百七十章）……………		65
資料　グリフィス・コレクションの明治学院資料……………	山下英一……………	97
資料　韓国近代文学史上にみる明治学院……………		
——金　東仁——……………	金　春美……………	120

## 凡 例

一、翻刻に際しては、できる限り原型に近い形で翻刻した。

二、漢字は原則として新字体を用いたが、「當」と「当」のように書き分けている場合、また「摸」のように当時慣用されていた文字は、そのまま残した。

三、仮名づかい、平仮名、片仮名は原稿通りとしたが、変体仮名は通行の文字に改めた。

四、誤字、脱字、また当時の用法から見ても一般的でないと思われる文字は、「ハ」で補訂したが、補訂したい場合は「ママ」とした。なお、筆者は「己」と「巳」を共に「巳」と表記しているが、これは筆者の癖でもあり、また一々補訂すると読みづらくもなるので、この文字については文意により「己」か「巳」とした。

五、抹消文字は「」で示し、抹消文字の横に記されている訂正文字は、そのまま「」の横に示した。

## 祖父、三浦徹のこと

国連大学学長特別顧問  
朝日新聞客員論説委員

永井道雄

大正十四年、祖父徹は病歿して居りますので、誠に残念なことに、直接私たちの目や耳に残っている祖父の思い出は、とりたてて申すほどありません。

今回、明治学院の出版による日記を読み、はじめて祖父から沢山の話を聞かせてもらったような思いでした。また生前の母、永井次代の折々の姿や、母が自分の思い出をつづった「いっしょうけんめい生きましよう」（講談社）などを思い出し、それと祖父自身の日記とを重ねてみました。

祖父、三浦徹のこと

祖母リウは胸を患って臥っていることが多かったのですが、祖父が母親代りに、子供の教育などにも力を注いでいたと、私たちは母から聞かされて居りました。

明治二十一年春から、祖父達は盛岡に住んで居りましたが、母と二人の叔母達は、長ずると病気の母親から離れ、東京麴町にある女子学院の寄宿舎に入りました。祖父の計らいであったと聞いています。キリスト教の家に生まれ育った母達は、こゝで更に、キリスト教を基とした教育を受けた訳です。祖父の日記に明ら

## 祖父、三浦徹のこと

かなように、祖父の生き方が「神を透して人を観、人を通して神のみ言葉を玩味する」ということに貫かれていることを考えれば、祖父が、神の教えに溢れている女子学院へ、病弱の母親を持つ三人の娘を托したことは容易に理解出来ます。

この祖父の祈りに応えるかのように、母達は間もなく、学校の中にある「キングスドーター」と称する会の会員となり、「自分達は神の娘だ」という誇りと自覚を持つようになりました。家が貧しくても、着物が他の人より粗末でも、そんなことは少しも気にせず、誇り高い理想を持って神の娘らしく振舞う努力をしたということです。それを知った時には、祖父も、病床の祖母もどんなにか喜び、安堵したことでしょう。

私たちは母も、また、やはりキリスト教の信者であった父、柳太郎も、くよくよと考え込んだり、めそめそとしているのを見たことはありません。何時も前向きで、どちらかと云えば自信に充ちた生活態度であったように思います。とはいっても、母について思いお

こすと、幾十年の間には何回か、枕の中に顔を埋めて、涙を流しながら神に祈っている姿を見たことがあります。そんな時でも、朝には、さっぱりとした態度で家族の誰彼に接していました。

祖父は、神のみ言葉の網目を透して、沢山の人の心や、諸々の事柄を、丁寧に自分の心に映し留め、この日記を記しています。

母も祖父と同様に、生活の一部始終を、神の教えの網目を透して、心の中で反芻していたのでしょう。悲しい出来事や、失意に会うと、自分の足りなかったところを神に謝罪し、正しい道を、又、第一歩から歩き直す力を神から与えられていたようです。自分に対して、よくない思いを抱く人があると思う時でも、その人の罪を共に悔い、寛い心で恕すことの出来るよう神に祈る。そうしたことの繰り返しの中で、母は一見、男々しげに、自信ありげに生き続けていたのだと、今、私たちは祖父の日記にはつきりと教えられ、母への敬愛と理解を、より一層深めることが出来て、感謝して



居ります。

長い年月の間に、私たちは、沼津の水野藩に生まれた祖父が、東京へ出て勉学の後、牧師になり、どういう経緯で盛岡に住むことになったのか時々不思議に思っていました。母にあらためて聞くこともなく今日に至って居りましたが、最近になって、上星川教会の牧師太田愛人氏から贈られたフェリス女学院資料室発行の「あゆみ」(第十四号)を読み、ゆくりなくも、その当時の祖父のことを詳しく知ることが出来ました。

それによりますと、明治二十年に、日本一致教会の地方伝道拡張計画を持っていた米国リフォーム・ミッションが、宣教師エフ・アール、ミロル氏夫妻と、二名の日本人とで、盛岡伝道を開始することを決めたそうです。翌年の一月、下準備の為に盛岡へ出かけたミロル氏と祖父は、一旦帰京の後、三月二十八日から家族ぐるみ盛岡に住み始めたことが解りました。

盛岡では先着の伝道師、林竹太郎氏の熱心な働きもあり、ミロル氏着任の時は、既に数名の求道者があり

ましたが、四月十五日には七人の青年男女の受洗者があったと記されています。そのよき日には、一大福音を宣伝する為にキリスト教大演説会も開催され、聴集が二千人も集まり、開闢以来、空前の盛会であったとも書かれています。その演説会で、ミロル氏は「信仰を論ず」、祖父は「宗教を論ず」という題で、共に演説を行っています。

かねてから、祖父の若い頃の話といえば、家老の家に生まれた眉目秀麗な御曹子であったという類が多く、何となく物足りない思いでした。今回祖父の日記に加えて、「あゆみ」に掲載された盛岡伝道の記事も読ませて頂き、意気旺んな若々しい祖父の、伝道者としての姿も知ることが出来、嬉しく思いました。

祖父は、明治十五年、盛岡伝道以前から、ミロル夫人に力を併せ「喜の音」という新聞を発行しています。仕事を始めて以来、お別れをする日まで、祖父は、ミロル夫人の真面目で、綿密で、周到な仕事ぶりに深い感動を抱き続けています。身を処するにも、職務に

### 祖父、三浦徹のこと

任ずるにも、キリストに対する忠誠心が漲っていて、聖書で教えられている「忠義にして智き僕」「かくの如く勤むる」の活きた模範であると、祖父はミロル夫人を尊敬しています。神から命じられたことであれば、何事でも全力を注いで尽されたミロル夫人の姿を、聖書の活きた註釈でもあったと、祖父は、明治四十三年に召天されたミロル夫人の追悼文の中で讃えています。又、ミロル夫人と共に「喜の音」の発行に力を注いでいた祖父は、夫人から「いやになった」「面白くない」「飽々した」というような言葉を聞くことはおろか、そんな素振さえ、一度も見ることが無いと追悼文の中に記しています。

一生を通して、真面目であり、キリストに忠実であり度いと願う心からでしょうか、何事にもマイトを尽して生き抜いた私たちの伯父、二人の叔母、そして母も、今は皆天に召されました。

「いやになった」「面白くない」「飽々した」。これらの言葉は母、次代も決して申しませんでした。が、子

供らに対しても、そうした言葉を口にする心を厳しく責めました。今、私たちはその叱責のルーツをさぐり当てた思いで、盛岡での祖父の生活を一段と懐しいものに感じています。

ミロル夫妻の影響は精神的なことだけに止まらず、祖父は、食事についても西洋風を好み、自分で鳥の丸焼などを作ったそうです。オウンの前に椅子を据え、襷がけでそこに坐り、焼き加減を注意深く見守っていたという話が、前述した母の遺著にも記されています。ほほえましい光景です。

七歳年上の姉、鮫島愛子は、亡兄の明雄と共に、何回か祖父の家に泊まり、直接、祖父と話をして居ります。「明ちゃん、愛ちゃん」と必ず兄と姉の名前をセツトして呼びかけては日常のことなどを聞いてくれたそうです。惣領である兄と、末っ子である私との間に生まれ、たった一人の娘であることを、何となく分が悪いと感じていた姉にとって、「明ちゃん、愛ちゃん」というセツトの呼びかけは嬉しく、未だに快い音

楽のように、耳の奥に響いて来るといいます。

姉は又、祖父の家の食事時の様子が忘れられないと申して居ります。当時末子の昭さんは未だ生まれておらず、四女の富士子さんは乳児だったので家族八人に兄と姉二人が加わって、十人分の食事を用意する伯母を手伝い子供も総動員です。台所から食器や料理を次々と茶の間のテーブルへ運びます。整った所へ、ピンと背筋を伸ばして、もの静かに祖父が二階から降りて来て、茶簞笥の前の席につくのです。ネル地で出来た真赤な前掛を膝にかけ、皆に箸を配ります。聖書を読み、食前の感謝の祈りを終えるやいなや、間髪を入れず子供らは「アーメン。いただきまーす」と一齐に箸をとります。カレーなどの時は、祖父が茶簞笥からスプーンを出し、膝にかけた赤い前掛で、一本一本を丁寧に拭いて渡してくれます。イエス様から一片づつパンを渡して頂くのにも似たその雰囲気が好きで、姉は今でもその思い出を、暖くにこやかな祖父の面影と共に、大切に胸の奥深く藏っています。

#### 祖父、三浦徹のこと

大正十四年、九月三十日に、祖父は上顎癌で歿しました。

日記の中に、祖父が、自分自身の祖父の沈着で安らかな死について記した章があります。その他にも、キリスト教の信者が、死を新しい生の門出と考えて、幸せと感謝の心で死んでゆく様子を書いたものが数篇あります。祖父も亦、耳の下に大きな腫物を持ちながら、少しも変らず、真摯に、にこやかに日常を過ごしたと聞いています。従兄の三浦一郎の「祖父徹の思い出」にも、死を前にした祖父が「略註旧約聖書」改訂の細かい仕事を完成したと記されています。

「生くるも死ぬるも、神のみ旨のまゝ」と口にする人は居りますが、そうした心境に到達することは至難のことでしょう。

祖父の残した日記を前にして思うことは、キリスト教の中の戒律的な考え方と、神の国に遊ぶ仔羊としての牧歌的な精神的ゆとりとが、祖父の血を受け継いだ三人の伯父・叔母と母の中にはっきりと見られること

#### 祖父、三浦徹のこと

です。この祖父の生き方は、必ずしもキリスト教と否とにかかわりなく、私たち子孫にも大きな影響を与えて、今日にいたっていると思います。

（付記Ⅱこの文章は、私にとって七歳上の姉、鮫島愛子が直接、祖父に接する機会もあったので、下書きし、それをもとに、私も手を加えました。）

## 三浦徹夫人・りうについて

明治学院大学教授

工 藤 英 一

三浦徹は、一八八〇（明治一三）年一月一日、納所重兵衛の長女・りうと結婚した。ふたりの結婚は、いわゆる見合結婚であった。その頃の日本では、親が結婚相手を決めることが多く、見合は単なる顔合せにすぎなかった。結婚は、男女の自由意志によるものであるよりも、家と家との結びつきにほかならなかった。三浦・納所の両家は、士族であっただけに、伝統的な結婚の形式がとられて当然であったが、実際はそうではなかった。

二十代の半ばをすぎて、当時としては結婚適齢期に達していた徹は、母親からしきりと結婚をすすめられていた。しかし、特定の女性との結婚を親から強いら

三浦徹夫人・りうについて

れることはなかった。徹とりうのふたりの間を取り持ったのは、築地病院でフォールズの助手をしていた新栄橋教会員の櫛部漸（旧姓進村）であった。一八七六（明治九）年の八月、櫛部宅で櫛部夫人がふたりを引合させた。初めての見合であっただけに、徹はこちにかたくなかった。小さな扇子を手にして坐っているりうに向って、徹は「お暑いですね」と声をかけるのが精いっぱいであったという。その時の模様を、徹は後年『恥か記』のなかに書き記している（五巻九二章）。りうは若い頃からひ弱であった。徹がスコットランド一致長老教会派遣のデビソン宣教師に、りうとの結婚を予告した時、デビソンは、りうの体が弱そうだと



### 三浦徹夫人・りうについて

いう理由で徹に再考を促したということである。しかし徹は自分の決心を変えることはなかった。りうの人の柄に、徹の心は強く動かされていたからであらう。

徹と見合をした頃のりうは、アメリカ長老教会の婦人宣教師ケート・M・ヤングマンのB六番女学校（グラハム・セミナリーとも呼ばれた）に学ぶ生徒であった。もっともその女学校は、一八七六年の十月に、先に廃校になったA六番女学校を統合して新栄女学校となった。女学校時代のりうは、ミス・ヤングマンからきわめて厳格な信仰の訓練を受けた。この婦人宣教師は、一八四一年一月一七日アメリカ・ニューヨーク州のキングストンに生れ、南北戦争で婚約者を失い、学校教師としての体験を積んだ後、一八六三（明治六）年日本における女子教育に奉仕することをめざして、宣教師として来日したのである。かの女が日本をめざしたのは、師範学校時代に聖書を教えられたメリー・プラインの影響からであったと考えられる。プライン夫人は、一八七一（明治四）年アメリカ婦人連合外国

伝道協会から日本に派遣され、横浜に「アメリカ・ミッション・ホーム」（横浜共立学園の前身）を設立した。

ミス・ヤングマンは、日本で女子教育に携わるなかで、特に「キリストの精神をいかに社会的に実践するか」という課題に熱心に取り組んだ。従って、りうたち新栄女学校の生徒たちに、知的教育以上にきびしい信仰上の実践的訓練をおこなった。一八七七（明治十年）一月一九日、すでに洗礼を受けていた生徒十名をもって、ミス・ヤングマンは信仰的社会実践のグループをつくった。このグループは、やがて好善社と名づけられた。その十名のなかに、りうもいた。

好善社では、教会員としての義務を忠実に果たし、常に正しい生活を守ることが求められたが、そればかりではなく、東京の各地域における安息日学校や啓蒙小学校での奉仕活動をおこなった。さらに、好善社のメンバーたちは、ミス・ヤングマンの指導のもとに、ひとつの注目すべき奉仕の業をおこない続けた。当時

ヤングマンが親許からひきとっていたひとりの貧しい少女を、好善社のメンバー全員が協力して養育した。養育にとって必要な労力はもちろん、その費用の一部をもかれらが分担した。このことは、りうが卒業した後も、後輩たちによってひきつがれ、その少女は立派に成人し、後年伝道者の妻となった。りうは、ヤングマンのきびしい指導を受けつつ、好善社の仲間との連帯をつうじて、実践的信仰の人となっていた。

なおこの好善社は、その後ハンセン氏病の療養所である慰廢園を経営するなど、キリスト教社会福祉団体として、現在に至るまで一〇〇年余の歩みを続けていく。その歴史は、『ある群像―好善社一〇〇年の歩み―』（日本基督教団出版局、一九七八年）によって知りうるが、その初期の時代の記述のなかに、納所りうの名がしばしば見いだされる。りうの妹すえもまた、好善社の一員であった。

好善社で鍛えられたキリスト者としてのりうにおける社会的実践性は、結婚後も変らなかった。伝道者の

三浦徹夫人・りうについて

妻として、内助の功に徹したりうの生涯のなかに、日本の婦人運動の先駆をなした婦人矯風会の設立にかの女が重要な役割を果たした時期があったのである。

婦人矯風会は、一八八六（明治一九）年の東京婦人矯風会の設立をその歴史的起源とする。この会が設立された契機は、世界キリスト教婦人禁酒会の書記レビット夫人の来日によって与えられた。日本各地での夫人の演説会をきっかけに、神戸・大阪・長崎に婦人禁酒会が結成され、東京でもそのことが協議され、一八八六年一月九日虎之門教会で設立準備会が開かれた。その際呼びかけ人としてリーダーシップをとったのは、大儀見よねと三浦りうであった。よねは大儀見元一郎牧師の夫人であり、大儀見牧師は当時禁酒会の会頭であった。りうの夫はその頃両国教会の牧師であった。

この設立準備会では、新しく創設する婦人団体を単に禁酒を目的とするものにとどめず、広く婦人社会の弊風をなくすことをめざして、東京婦人矯風会と呼ぶこととされた。りうはその席で設立発起人のひとり

### 三浦徹夫人・りうについて

になった。設立発起人は次のような顔触れであった。

矢嶋樗子、海老名みや、湯浅はつ、佐々木豊寿、大儀見よね、三浦りう、青木まさ、島田まさ、本田じゅん、森島いそ、潮田千勢、真木さつ、江藤まさ、鈴木やす、切代みね、清水りか、茨木たへ、竹内たけ、加藤ひさ、丸山なほ、草野ひさ、中山てる。

この二二名のなかから、矢嶋、海老名、湯浅、佐々木、青木、三浦、本田の七名が、会則・規約の草案作成委員に選ばれた。

以上のようにして、同年一月六日、会員五一名、特別会員二名によって、東京婦人矯風会は日本橋教会において正式に発足した。そこでは、投票によって一七名の議員が選出され、そのなかから、会頭に矢嶋樗子、書記に佐々木豊寿と服部千代、会計に海老名みやと三浦りうが就任した。これらのことから、りうが東京婦人矯風会設立の過程でいかに重要な存在であったかが知られる。もし、りうがそのまま東京に在住し続けていたとしたならば、その後の婦人矯風運動におけ

る重要な働き手のひとりとなったに違いない。

しかしながら、りうは翌年夫とともに盛岡に移り、そこで一三年間をすごした。かねて健康に恵まれなかったりうは、盛岡の地で肺結核に罹った。一九〇〇（明治三三）年の徹の盛岡への転任は、病妻の療養に適した土地を求めたことであった。さらに徹は、一九〇二年三島教会に転じた。三島時代のりうは、病床に臥しがちとなった。その頃の思い出として、長女次代（永井柳太郎夫人）は、次のように述べている。

「三島の家では二階を教会の集会所として使い、階下を母の病室にしてあった。日曜日ごとの礼拝のとき、父は病床の母にも聞こえるように大きな声を出してお説教をした。父は神の愛を感謝し、母は『夫の労り』を通して神の恵みを感謝していた。

遠く父母には及ばないが、こうした父の姿、母の姿が心の底に生きて、私の妻として、母としての生活も支えられてきた。」（永井次代著、永井道雄編『いっしょうけんめい生きましよう』講談社、一九

八二年四月。九四—九五ページ。)

病床の妻を徹がやさしく世話をし、魚屋のもつて来た新鮮な魚を井戸端で徹みずからたすきがけで刺身にしたという話は、長男太郎の信乃夫人が、『明治学院史資料集・第八集』掲載の「古武士の悌そのままの人」のなかに書き綴っている。

夫の看護の甲斐もなく、りうは一九〇八(明治四一)年十一月の末に天に召された。徹は、先にあげたりうとの見合について記した文章を、次のように結んでいる。

「余は艷麗の婦人を娶らんとは思はざりき、余は唯生涯の豊作を考へたりき。余が既婚の後失望したることも多く予期に反したるものもありき。然れども余は納所嬢と婚したることを一回も悔いたることはあらざりき。余は神の耦はせたまひしもの、たまもの 吾恩賜として満足し居るなり。」

この文章は、信仰に支えられた妻への深い愛情とキリスト教的結婚観の表白として、読む者の心を強くう

三浦徹夫人・りうについて

たずにはおかぬ。徹をしてかく語らしめたものは、りうの人格そのものであったというべきであろう。

#### 追記

本稿執筆後、三浦信乃さんからの書簡によって、りうの生年月日が「安政五年七月八日」であることと、召天の日が「明治四十一年十一月二十一日」であることを教えられた。墓は、沼津市東熊堂一〇四の松澤山大泉寺(浄土真宗大谷派・住職十八公慶亮師)にある。





## 統 統 恥 か 記

自 第百三十一章  
至 第百四十五章

## 第 九 卷

### 第百三十一章 天皇陛下の謙卑、仁慈

保羅腓立比人に教へて曰はく「爾曹基督耶穌の意を以て意とすべし彼は神の體にて居りしかども自ら其の神と匹しくある所のことを棄難きことゝ意はす反つて己を虚し僕の貌をとりて人の如くなれり」(二。五、七)

それ基督の人となりて世に降りたまふや任意にして請はれて然りしにあらず、強ひられて然りしにあらず、基督の仁慈、人の悪を見るに忍びず、其の卑下、世に来るを禁する能はざるものありしなり、然れども世人既に罪惡あり、神に逆けり、よし一毫の恩恵なしといへども人は訴ふる所あらざるなり、あゝ、基督の其の栄光を棄てゝ降世したまひしもの謙卑、仁慈の極にあらずや、

明治十六年岩倉具視公馬場先内の邸にありて病頗る篤し、其の死前一日侍臣は公の病篤く、其の生命旦夕にあるよしを奏す、皇帝陛下は斯くと聞きたまふや、いたく驚かれたるものゝ如く

統 統 恥 か 記 第九卷

「朕岩倉邸に行かん、直く用意せよ」と宣ひ、侍臣は敬承りて供奉当直の者に通達せんとせしに陛下は已に御佩刀をとり、御帽をいたゝかせて侍臣の後より續きていでたまはんが如く見えたり、侍臣は驚きて「いまだ宮内大臣、侍従長等も知らず、当直の兵士も知らず、用意の整ふまで暫く待たせらるべきか」と奏上せしに「否、後より来らんもよし、爾のみ従へ」と仰せてはや御玄關に立ちたまふて「馬、馬」とのたまへり、御殿より御馬の来るを見そなはずや、数歩馬の側に近きて乗りたまふと見る間に一鞭を加へて赤阪離宮を乗出たたまひ、いまだ騎兵は一人も間にあはず、僅に騎兵士官一名此の体を見まつりたれば驚きて近き来り、自ら天皇旗を捧げて従ひまつれり、平日の行幸には然まで御馬を走らせたまふことなきが常なるに此の日は出来得る限り追ひたまひしかば従ひまつりしは侍従一人と騎兵士官一人のみ、桜田門を入りたまふ頃に二三の騎兵漸く追まつりて供奉したりといふ、岩倉邸に於てはかゝるべしと露思はず、天皇御親臨ときゝて驚けるのみ、いまた何等の考案さへ

なき間にはや天皇陛下はツカ／＼と公の病臥せる室に入りて病褥の側に立ちたまへり、公は其の病の危篤なる殆ど人事不省の境にありしが是くと見奉るや、褥中に起上り、言葉は無くて唯瀧なす涙の漣々と下るのみ、陛下は公の手を取りたまふて親しく慰諭の御言を賜ひ、病状を問ひ、深く自愛せよとて立去りたまひしといふ、今上皇帝の御聖徳は今更うすも長きことなから此の御仁慈、御謙卑に徴するも推知しまつるに難からざるなり。

因に記しまつらんも恐多きことながら確聞したることあれば左に一事を記さんに目下の皇居御造営の前なるが掛官は種々取調の末舞踏室を作るべきや否やにつき其の議一定せず、遂に聖旨を伺うことゝなれり、其の次第を尋ぬるに欧州の皇居には舞踏室あり、然れど舞踏室を造らんに又数万金を要すべし、去りとして此の室を設けざれば宴會の時舞踏なきがに料理に特別費す所あらざるべからず、掛官の議は是に二個に今日の数万金は後日長き節約となり、今日の節約は後の冗費となるべし、是れ掛官が決する能はすして聖旨のある所を伺ひし所以なり、陛下は雙方の説をきゝたまひしが打案したまふ御気色もなく、其の可否をば裁したまはず「舞踏などなすは亡國の徴なり」と宣はせ、他をいひたまはず、掛官等は長縮

して、御前を退き、其のまゝ舞踏室の議は止みたりといふ、是れにつきても御聖徳の程感佩するに餘りあることなり。

卅二年二月四日稿

### 第三百三十二章 遂に靴を脱ぎました

出埃及記に曰はく「畏るゝ勿れ神汝等を試みん為、又其の畏怖を汝等の面の前におきて汝等に罪を犯さゝらしめん為に臨みたまへりなり」(廿)。

詩に曰はく「なんぢら慎み、をのゝきて罪を犯すなかれ」

(四)。

基督教徒は道德上無二の理想あり、完全なる模範あり、此れ基督教徒の道德的動機たるべし(統々恥か記第百章を見よ)といへども彼等は又神を認ること偶像教徒の偶像に於るが如くならず、神を一個の嚴然たる有心者と信じて之に對する眞畏の念を有するなり、故に「神を祭る時神在すか如し」にあらずして造次、顚沛如何なる場合にも此の有心者の前にあるを思ふなり、彼等は此の眞畏の念を有するが故に為に罪惡を免るゝこと其の幾千なるを知らざるなり、

函館教會の信徒に武部彦麿といふ人あり、氏は本組合教會の人

なりしが函館に移住して学務に奉職したりしが明治十七八年の頃基督教徒なるが故にとて二三の信徒と共に職を免ぜられ、生計の道を求めんとて東京にいで某氏に就きて北海道のある所に職を奉ずることとなりき、氏は最早出立の期も近きしが氏の父は三条公爵其の他六郷が九州に落ちたる頃公等の為に尽くす所あり、三条公は筑紫を去らんとする時短尺に和歌を筆し、二三乗を氏の父に与へたまひき、然し其の一身上の境遇を思ひてなるべし、短尺には皆落款あるなし、氏は氏は久しき前より之を遺憾とし、機あらば乞ひたきものなりと思ひ居たれば長岡子爵(護美)に添書を乞ひて一日三条公の邸に伺候したり、氏は案内に引かれて次第に奥まりたる室に導かれしが初めの程は然まどと思はざりしに進めは進むに従ひて其の室の美しきこと未だ曾て見たることなき程にて、進むに従ひて己が靴の泥だらけなる、其の色合の腐りかゝりし鯨の如く、見悪しとは思ひしが案内の最もあれば「此の辺にて可ならん」を何ヶ度も繰返して遂に最後の謁見室に導かれ、案内者は一脚の椅子によらしめて去りぬ、氏は密に室内の裝飾、敷物とわが靴と見比べて如何にも靴のきたなき、とてもはき居るに堪へず、止を得ず急ぎ室外にいで靴をぬぎて再び室に入りしに洋服着て靴をはかざるは失

禮にもならんか、如何にせんか、氏ははや策に窮し、急ぎ椅子をかきやりて敷物の上にビタと座りぬ、此の時奥の方より聲音聞えて出来りしは三条公なり、氏は何も云はず、唯俯伏したるに公はせはしく椅子によれ、首をあげよと屢々繰返したまひしが氏はたゞ平伏したるのみ、公は遂に座する方便利とならばそれにてもよし、氏ははや背の汗のタラ／＼と背筋伝ふるを知り、前額よりはボト／＼と汗落つるに至る、漸く首をあげて武部某の息彦磨なりとまうしたるに先年はいたく父の世話になりにて、死したるよしは聞きたれども其の子孫の如何になり居るかを知らず、かくこそ尋ねたれ、近頃の身上は如何なと問はれ、大凡に答へて偕父に賜ひし御短尺三枚今は我が手にあれども落款なければ真偽の程も知るによしなく、一度御覧に入れて實物ならば落款を願ひ、長く家宝といたしたく偕は推参したるなりとまうしたるに公は短尺を手に取りて「如何にも余が書きあたへたるものに相違なし、然し若年の頃の筆、余が筆として他に示さるゝは恥かしく思へり、他のものと書改めてつかはさんがいかゞ」と問ひたまへり、武部氏は「否、恐入りたれども九州に落ちたまひし時のものなれば弥々貴きおもひたし、他と御取換くださらぬ方願望なり」とまうしたるに然らば二三日中に落款

をしてつかはさん、さるにても其の方の父は勤王家にてありつれば其の功勞に對しても其の方に報う所あるべし、何れにか職を奉ぜん望もあらば世話しつかはさんが如何と、氏は已に北海道の某地に職を奉することとなりたれば今は望もなしとまうして、旧を語りて辭したり、氏はいふ「余の靴も然まできたなしとは思はざりしが公の家に入りにて周囲の美しきを見た時はわが靴のきたなかりしと言語同断なりき」と氏は余に語れり、神の前にあるもの誰か罪の泥靴を脱がざらんや、神ホレブにモ一セに示して曰はく「汝の足より履を脱ぐべし」(出三。五)と、吾人神の前にありて罪惡を脱せざるべからざるなり。

### 第三百三十三章 我知らず洒落てしまふ

保羅曰はく「凡て勝を競ふ者は何事をも節へ謹むなり」

(哥前九。  
廿五)

一の大目的ある時之を妨くるものあらば其の何たるを問はず皆悉く排除せざるべからず、希臘國の競技をなすもの苟も勝を得んとせば其の勝利なる大目的の爲に一切の妨害を排除し、飲食運動の類、皆其の不節を謹み、以て勝利を期したりといふ、蓋しパウロが此の競技を引きてコリント人を教へたるものは凡そ

天を得んとする信徒は其の目的を妨ぐるものあらば其の何たるを問はず排除せざるべからざるをいふなり、然れば吾人主の約束を信じ、主の聖旨にかなひて自己の救拯を全うせんとするものは罪惡の避くべきは云ふを待たず、苟も吾人の心情を浮き立たしめ、敵愾、真面目を害するものは悉く之を排除せざるべからず、基督教徒は悲痛、憂鬱なるものにあらざるは論なしといへども信念に害ある諧謔、串戯、冗談、洒落の類は大に謹むべきなり、諧謔、洒落其の物は罪惡にあらずといへども屢々之が爲に敵愾なる思想を滅却し去ること少しとせず、

余が兩國教會に居る明治十六年の頃なりき、淺草教會にて信徒となりし詫間茂右衛門氏はわが會に転入せんことを乞ひ、遂に同年中兩國教會に入りたり、氏は山梨縣の人にして幼少の頃より掘留の奈良屋といふ鉄物店に奉公し、丁稚より、手代、手代より番頭、番頭より支配人となり、遂に同店主人の見後人となりて同店には頗る勢力あり、以上述ぶるが如く幼少の頃より次第に経昇りたるが故に所謂世故に長け、酸いも辛いもよく嚙分け、普通の商人たる知識と才略とを有し、後、不幸にして其の店は全きを得ざりしが奈良屋の爲には一個の白鼠たりしなり、氏は是く東京の真中に成長したるが故に又氏は一個の通人、粹

士にして山に千年、河に千年の功勞歴たる人なりき、且つ氏は純粹の商人——通客——として長き間面白可笑しく——罪惡の中に——生活したる爲に俗にいふ洒落の名人にして時々真面目なる談話の間に突然氏の嘴を入るゝ爲に滿座哄笑することあり、氏のいふ所を聞けば東京には洒落の先生ともいふべきものあり、就いて学ぶ人あり、氏も亦一旦は入門したることあり、少しく其の呼吸を知らば誰にもできることにて敢てむづかしきことにあらざと、然し氏は信徒となりてよりはかゝることを樂しむは信念の害なりと認めたれば平生の俗談にも成たけ謹み居れりといへり、されど氏が常に憂ひていふ所を聞くに「長くかゝることは爲すは實に徳の害なり、余は例の洒落学をや、洒落をいふ生涯となりたれば他の談話など聞き居る時に思はず、念頭に浮みいでゝ独り可笑しきことあり、他との談話中は兎に角、時々は禮拜の間、又は説教聴聞の時、聖禮典執行中、我にもあらず例の洒落口先に逆らいでんとし、驚きて嚙みつぶし、吞下むはよけれどそれが爲に独り可笑しく、今までもちたる嚴肅なる心は全く影もなく、感謝の念、神を愛するの念など一時破壊せらるゝが如く感ずることあり、茲に至りて余は長き間かゝる馬鹿々々しき生活を爲したる其の惡結果なるを思ひ、くれゝ

國もかゝる冗談、諧謔などは謹むべきものなるを思へり」と、氏は屢々かゝる歎聲を發して余に語りしことありしが実に真正の勝利を競ふものは何事をも節へ謹むべきものなり。

### 第三百三十四章 善きも惡きも神の摂理

箴言に曰はく「人の心には多くの計畫かんがへありされど惟エホバの旨のみ立つべし」(十九。)(廿九。)

約百曰はく「彼は一に居るものにまします誰か能く彼をして意おもひを変へしめん彼は其の心に欲する所を必ず爲したまふ」(十三。)

詩篇に曰はく「エホバはもろゝの國のはかりごとを虚しくしもろゝの民のおもひを徒勞いたづらにしたまふエホバのはかりことは永遠にたち其のみこゝろのおもひは世々にたつ」(十三。)(十三。)

箴言に曰はく「心に謀るところは人にあり、舌の答はエホバより出づ」(十六。)(十六。)

又曰はく「人は心に己が道を考へはかる、されど其の步履おもひを導くものはエホバなり」(十六。)(十六。)

以賽亞曰はく「これは全地のことにつきて定めたる謀略はかりごとなり



是はもろくの國の上に伸ばしたる手なり、萬軍のエホバさだめたまへり誰かこれを破ることを得んや、其の手を伸ばしたまへり誰かこれを押返すことを得んや」(十四。廿七)。

又曰はく「われは終のことを始より告げ、いまだ成らざることを昔よりつげ、わが謀略はかならず立つといひ、すべて我がよろこぶことを成さんといへり」(四十六)。

馬拉基曰はく「汝等はいへらく神に服事ふることは徒然なりわれら其の命令をもりかつ萬軍のエホバの前に悲しみて歩みたりとて何の益あらんや……其の時エホバをおそるゝもの互に相かたりエホバ耳をかたむけて之を聴きたまへり」

(三。十四、十六)

基督曰はく「凡て父の我に賜へし者は我に就らん我に就る者は我かならず之を棄てず」(約六。三十七)。

又祈禱の絶つべからざるを教へんと譬喩を設けて曰はく「神は晝夜祈る所の選ひたる者を久く忍ぶとも終に救はさらんや」(路十八。七)。

神徒の神の聖徳を信し、之に依頼するの念若し中庸を得たらんには固より可なりといへども吾人は屢々神の聖徳の一部を特信し、深く此の一部を思ふが故に吾人の徳に過不及あるを免れざ

るなり、ある人神の全能を餘りに深く思ひ、強く論じて「神は罪をも犯し得べし」といへり、彼は全能の一部局に拘泥して一時神の聖を忘れたるなり、ある人は神の救拯の自由なると平等(普及)なるを餘りに深く思ひて「神は悪人の地獄に入りしをも遂に救ひたまふべし」と説けり、彼は普及の一を重んじて「神の何程罪を惡みたまふか」を忘れたるなり、吾人は中庸を得ること中々に難し、是を以て神の愛を思ふ時は義を忘れ、義を思ふ時は善を忘れ、神の預定を見る時は人の自由意思を忘れ、自由意思を思ふ時は預定を見ざるの弊あるなり、神の愛と義、全能と聖、預定と自由意思の如き吾人の屢々其の調和に苦む所なり、神の摂理と祈禱の如き時として人の其の調和を誤解する所たるなり、

某地に一人の信徒あり、其の平生によりて余は彼人が祈禱に興味を有せざるを知れり、余一日使徒行伝十二章に見ゆるペテロ助命のことを以て祈禱會の利益を説きたり、余が此の説教を初めたる時彼の祈禱に興味を有せざる兄弟は會堂に入りたり、余は彼の近頃の事情によりて此の説教は彼の感觸を害することあらんかと思ひしが、否、彼の人の為にいふにあらず、又平くいば彼の人は余の一回の説教にて善くも悪くも動く人にあらず

と思ひかへして其の俚に進行したり、後に考ふるに此の説教は多く人を益したりと余は信じたりしが美露氏の夫人は余に云へり「彼の説教は○氏の為にせしか」と、余は「否」と答へて其の事情を語りしに夫人は云へり「彼の人が祈禱会に興味を有せざるは他の人々も常に知り居る所ならん、然るに彼の人の居る席にかゝる説教を為しては人多く彼の人の為の説教と思ひしならん、果して然らばよし他の人に益するも彼の人の為に悪かりしならん」と其の週の祈禱会は余の説教のきゝめならん、平生の教より二三人多かりしが彼の人は来らざりき、是に於て余は少しく心配なきにあらず、往きて問はゞやと次の日の夜、余は彼の人の家を訪ひしに幸ひ面會して余の説教の為に感觸を損じたることにはなきやと問ひしに彼の人は平然、冷然として云へり、「否、余は貴君の説教にて感觸を害したること無し、余は元來貴君とは余の信仰を異にせり、貴君は教會が祈りたる故にペテロは天使に救はれたりと信じたまふならんが余は然らず、ペテロの如き後來教會の柱石となるべきものなれば神の摂理は彼をヘロデの手に死なしめず、疾くより助けん聖旨なりしなり、教會が何程祈りたりとて神の聖旨は動くべきにあらず、神の摂理の進行は人の行為の如何にかゝはらず、聖旨通り悉細かまは

ず、サツサと遂行せらるゝなり、ヨハネ、ヤコブの爲にも祈りし人ありしならん、然れど神の摂理は彼等の毒刃に斃るゝを善しとしたまひしなり、然れば祈禱するは無益なりやといふに然にあらず、祈禱によりて神の聖旨を動かし、神の摂理を変ぜしむる能はざるは無論なれども祈禱せる時は祈禱せる者神聴きたまふと感ずるが故に氣休めとなるのみ、鯛の頭に通力なきは明なれども力ありと思ひて拝む者は応驗ありと感ずるの類なり、それ神は天地のいまだ成らざる前より二羽一錢の雀の死して地に隕るも、毛髮一本抜けて落つるも神の摂理の中にありて、一定不変、万古に通じて異ることなし、如何に祈禱は有益なりと信ずるものにも神の聖旨を動かし、摂理を変ずるとは信ぜざるべし、然れば彼等の熱心に祈禱するは道理あるにあらずして唯一個の感覺のみ」と彼の人は事もなげに云ひてのけたり、余は其の意外なるに驚けり、氏が祈禱に興味を有せざるは余既に知れり、然れども是くまでならんとは思はざりき、余は氏に説けり、果して是く信じたまふならばそは誤信たるを免れず、第一貴君は神の摂理に餘り重きを置きたる一の偏見なり、固より神の摂理は一定不易、万古を通じて変ずることなきは論なしといへども雀の地に隕ち、髪は抜けるさへ神の摂理の中にあるも

のなれば何故に吾人の祈禱も同じ摂理の中にありとせざるや、一方には皆摂理の中にありとして一方には吾人の祈禱を除外とす、是れ貴君の偏見、誤信たるなり、神ペテロを救ひたまはんとなれば目のヘロデありとて手を下すに所なく、神ペテロを死なしめんとしたまひしならば教會何程祈りたりとて救はるゝことあるべきや、然れども一方より見れば吾人が祈禱すべきことは神の命じたまふ所、基督の熱心に教へたまふ所、又使徒等の屢々教へたる所なり、若し神の摂理は變ぜずと定まりしならば祈禱を教へられたるは無益の義務を吾人に負はせたまふことゝなるべし、神豈吾人に無益の勞を負はせたまふの理あらんや、若し無益ならずとせば如何にして神の不易の摂理と調和すべきや、敢て心思を勞するを要せず、神がペテロを救はんとするの摂理の中には天使の來りて彼を救ひ出たすと同じく教會の祈禱をも含有したるにあらずや、惡人が刃を振つて善人を殺害するは摂理の中にあるなり、然れども同時に惡人の憤怒をも含みたるなり、惡人憤怒は彼の自由意思より出でたる彼の感情なり、彼は神の摂理なるが故にとて自己の意思にあらずとも已を得ず「とて」怒りしにあらず、彼の自由意思によりて怒り、怒りしが故に殺したること神の摂理なりしならば吾人の神を信頼する

の感情より出づる祈禱のみ、独り除外なりとするの理あらんや、祈禱も亦神の摂理の中にある進路の一なるにあらずや、第二貴君の如く摂理を信じたらんには遂には一種の運命説となりて結局無知の勢力に支配せらるゝことゝなり、其の弊や何事をも為さざるに至るべし、運命を過重して、万事皆運命に由れりの信念強きに至らば其の極、食きも勞せざるに至り、堅子の井に入らんとするを見るも冷然として之を救はざるに至り、強賊白刃を閃かして我が首に「望」臨むも敢て防衛せざるに至り、敵國兵を挙げて我を襲ふも曾て意とせざるに至る、曰はく食尽きたりといへども死さゝる運命我にあらば食物何れより來るべし、運命彼の兒を支配せるが故に助かるべきものなれば井に落ちざるべし、強賊の白刃、敵國の襲兵若し我救はるゝの運命にあれば救はるべしと何事をも冷視し、熱誠、慈善、忠孝の如き遂に廢滅に歸すべし、あゝ、豈危からずや、神の人に食を与へたまふや棚より落つる牡丹餅の方法を以てしたまふにあらず、寝て待つ果報的手段にあらずして手足心思を勞して食を得るの方法によりたまふなり、神は井に落ちんとする兒を救ふに奇跡を以てしたまはず、見るものに生ずる惻隱の心を用ゐて救ひたまふなり、兇賊、敵兵を防ぐは当事者の智慧と腕力とを用ゐて防禦

せしめたまふなり、吾人の祈祷に於てのみ独り除外例を以て断すべきにあらず、一例を挙げて云はんにパウロは伝道せんが爲に小亜細亜の諸國を周遊して後、エペソのテモテを得たり、若し貴君の論法を以てせばテモテは其の祖母と母とよき信徒たりき、彼救はるべきものたりしならばパウロ彼の地に伝道せざるも信者となるを得たるならん、若し基督教徒の信仰皆此の如くなりとしたらんには何故に金と時と人とを用ゐて伝道のことを為すや、若し人数はるべきものならば一言の福音を述ぶるものあらざるも摂理必ず彼を救ふべしといふに至らん、あゝ、信運説の危険なること是の如し、氏は余の説をきゝて幾分か悟りたる所あるが如くなりしが氏は白状すらく「実に余の目下の信仰は貴説の如し、既に貴君の説教をきゝて帰る途中余は貴君の説教を評して「祈祷によりてペテロ救はれたるにあらず、神ペテロを救ひたまひしが故に祈祷聴かれたるが如く見えしのみ」と、又余は某氏に云へり「此の寒天に食なく衣なくして飢餓に迫りし者来るを見れば君は衣服を脱して彼を救はんと思ふべし、然れども余は毫末も其の念なし、彼が飢餓に迫るは迫るべき原因あり、運命なるなり、敢て彼を救ふの要なし」と、某氏の驚きたるものゝ如しと、余は此のことを聞きて「視よ、貴君は已に

運命説の弊、——否、寧ろ適當の結果中に一步を踏入れたるなり、今にして之を救はざれば遂に冷血動物となり了らん、氏はいまだ自己の危きを見ざるが如くなりしが世にかゝる説を抱くもの唯氏一人にあらざるべし、聞くアレキサンドリヤのヒロ―にマイモンといふ徒弟あり、彼よき人物なりしが祈祷を為さず、ヒロ―之を憂ひて屢々教へたれども彼ははいく神は人の願望によりて心を動かすものにあらず、神は恩まんとするものを恩み、頑にせんとするものを頑にせりと、ヒロ―一日彼と語りて憂色あり、マイモン問ふて曰はく「先生、何となく憂色あり、何ぞや」と、ヒロ―曰はく「我一人の農夫を知る、彼は学あり才あり、頗る有望なる若者なれども彼苗を植ゑて更に耕耘することなし、余屢々其の不可なるを教ふれども彼は敢て耕耘せず、曰はく苗の長ずると長せざるとは一に地味、晴雨による、地疲せて水なくば我耕すも長せず、地肥えて水あらば耕さざるも実るべし、長ずると長せざるとは我が耕耘を俟つにあらず、たゞ地味によるのみ」と余之を論せども彼頑として悟らず、此れ余の大に憂ひてやまざる所なり」と、マイモン此の言をきくや大に怒りて曰はく「あゝ、彼愚なり、先生何ぞ耕耘も亦成長の一要素なるを教へたまはざるや」と、ヒロ―マイモンを制して曰

はく「汝いふを止めよ、農夫とは即ち汝なるを如何にせん」と、マイモン甚く驚き、感じ此れより熱心なる祈禱家となれりといふ、実に祈禱は信仰の耕耘にして吾人の祈禱は神の摂理中の一  
部たるなり。

### 第三百三十五章 狐四頭サ

基督曰はく「爾曹天空の鳥を見よ稼ぐことなく穫ることを為す倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひたまへり爾曹之より大に優るゝ者ならずや」(太六、)。

基督は山上の垂訓に於て吾人の世事に過慮なるを戒めたまへり、吾人が一身一家を支へんが為に大に勞すべきは固よりなりといへども吾人は屢々世事の為に靈事を忘るゝ危険あり、靈の為に世を忘るゝは世の為に靈を忘るゝに比して其の害少し、苟も道を信するもの之を知らざるにあらずといへども靈事に軽くして世事に重きは人情の通弊、世俗の弱点なれば吾人の世にある間大に慎む所あらざるべからず、

此の頃(卅二年二月十六日)狐森に住せる本多保氏來り談話の際氏は語りて曰へり世には人の力を以て為し得べきことゝ為し得べからざる事あり、何れまでが人力の領分にして何れよりが神の力

に一任すべきや其の区別は中々に難し、是を以て余は力の及ぶかぎり働きて其の上の為し得ざる所を神の力の領分として安心せんことを力め居れり、此の頃のことなるが余はある人に五六圓の返金すべきことありしに如何なる都合なりしか何程苦心するも其の五六圓を得るに道なく、全く策尽きたるを以て此は我が力の及ぶ所にあらず、得べきものなれば神は与へたまふべしと觀念し、先方へはたゞ少しく待ちくれよと通じて其の夜休み、未だ床中にありて眠らざる時なるが珍しくも園中に狐の声をきゝたり、頓て床よりいでゝ少しく窓戸を開き見れば雪中の一黒斑は紛ふかたなき狐なり、シメタと室中より一発すれば其の尻に倒れたり、余はいたく喜びて眠りしが翌夜も亦同じ時刻に同じく声を聞きたれば同じく見しに同じく一頭の狐なり、又一発せしに又斃し、其の翌夜は昨夜よりも少しく早く声をきゝたり、又一発したりしに又斃し、例の如く眠らんとせしに又一声をきゝたれば又一発せしに又一頭を獲、三夜にして四頭を得、其の毛皮を売りしに金六圓を得たり、余が家の近傍にて狐を獲たりとのことは近頃聞かざりし所なるに不思議にも此のことあり、豈天父の特に余に与へて余が一時の急を救ひたまひしにあらざらんや、余はくれ／＼も度に過ぎたる苦慮の益なきを

知りて神を頼むの味を知りたりといふ。

## 第百三十六章 贗札は見させん

箴言に曰はく「汝其の言に加ふることなかれ、恐くは彼なんちをせめ又汝を誑るものとなしたまはん」(三二・六)。

保羅提摩太に教へて曰はく「もし異なる教を伝へて我儕の主耶穌基督の善言と神を敬ふことに合ふ教を肯はざるものあらば…… 爭論おこるなり、爾曹此の如き人に遠かるべし」

(提前六・三、五)。

又曰はく「爾基督、耶穌にある信と愛とを以て先に我に聞きし所の眞の言の模楷を保つべし」(提後一・十三)。

基督の教へたまふ所は天の眞理にして一毫の誤謬あることなし、然れば基督の教を学び、之を信ぜんとする者は一心不乱、専念、一意其の聖言を学びて他意あるべからず、ある人は敵を知るは敵に勝つの道なり、吾人も神佛の如き他教に通じ、善く其の弱点を認めて之を突かば勞少くして功多かるべしといふ、然り戦に於ては敵を知るを以て勝利の道となすべしと虽も我が兵極めて強くば敢て敵を知るの用なし、敵を知るの要は我の不利を以て彼の利を撃ち、我の弱を以て彼の強を攻め、我の少を以て彼

の多を襲ひ、若くは五角の兵力を以て敵に克たんとするが故なり、故に敵を知るの要を説くは偶々以て我の足らざるものあるを表するものにあらざらんや、我が教最も眞なり、最も強勢なりといはゞ他の我に劣る勿論なり、我が眞理を知りたらんには他を知るの要なし、眞理は最後の勝利者なり、我が眞に曉通したらんには其の眞を以て彼に對せば彼の眞偽、立に判明すべし、眞理を学ぶものは決して偽物を参考とするの要あらざるなり、聞く、三井呉服店、三井銀行等に於て店員の貨幣の眞偽を判知するは極めて必要なことなり、然れば同店に於ては店員の店に入りていまだ事務に熟せざる間は餘暇あれば必ず楮幣の勘定と眞偽の見分を學ばしむるといふ、然れども彼の店の見分を學ばしむる方法は他と異りて其の初期に於て決して贗札を示さず、常に正眞の札のみを示し、之のみを考察せしめ、全く眞札に熟したるを以て眞偽見分を為さしむるなり、故に彼等は正眞のものゝ外手に触れたることなきが故に一回も贗物を見たることなきも贗物にあへば直に其の贗なるを知りて決して誤らること無しといふ、人或は贗物を示して其の贗たるを知らしめたらんには可ならんといふ、然れども全く眞に熟したらんには贗物を知るの要なきなり、他山の石など稱して他を知らんとするは

「なぐさみ」なりとせば兎に角、我が教の伝播に要あるにあらずして我の足らざるを白状するなり。

### 第三百三十七章 忘れてくれんなや

丑摩土曰はく「我（神）かならず彼等の一切の行為を何時までも忘れじ」（七八、）

基督曰はく「備はれたる者牧者にあらざる者は羊おのれのにあらずれば豺狼の来るを見るや羊を棄てゝ逃く……備はれたる者は……羊の為に憂へざるが故に逃るのみ」（約十。十）

以賽亞曰はく「婦其の乳児を……忘るゝことありとも我は汝を忘るゝことなし」（四十九。十五）

吾人は吾人の救拯、平和、幸福の為に常に我が神に呼號せり、然るに吾人の呼號する間に於て大に吾人の力となり、慰藉となるものは神の吾人を忘れたまはざることなり、パウロロマ人に教へて「凡そ之を顧求むる者には恩を豊盛にし、凡て主の名を顧求むる者は救はるべし」（羅十。十三）といひたるもの豈吾人の為に防衛の名たらざらんや、

世人の「海嘯の釜石」と称したる釜石は田老、又唐丹に比して海嘯其物は軽かりしが人口多かりし所とて死者の数は多かりき、

同所に若山某といふ人ありしが此の人も災害に洩れず、海嘯の当夜遁出でんとして家の入口に馳出たしたる一刹那、激浪の為に家は倒れて庄潰されたり、然るに如何なる機會にや若山某は大なる木箱をかぶりたれば柱や梁の倒るゝ為に疵を負ふことはあらざりしも大箱をかむりて家の下にあることなれば苦痛こそなければ、身をのがれんには道なく、近くに微なる聲音をきくや箱の中より声あげて救助を呼びたり、其の時余が友元木氏も其の辺を通りかゝりしに一人若山の名を呼びて無事なりや否やと問ふ、彼は盲亀の浮木、今、救はれざれば救はるゝ時なしと思ひしか声をかぎりに救助を呼び、彼の一人は如何になり居るかを問ひしに箱に入りて助命し居るよしを答へぬ、彼の一人は幾分か安心したりしが此の時他の知人、家の下に圧せられ、次第に目方増さりて棄置きたらんには庄死の不幸に遭ふべしと聞きたれば先づ此の危急を救ひて後に若山某を救はんと本人に其のことを語り「少し待て、何某危しとのことなれば彼を救ひて直に来るべし」といひしに若山某は箱の中より声だして「ウ、待つて居やう、助けてくれるなら待つて居やう、然し忘れてくれんなや、己を忘れてくれんなや」といふ、元木氏はいへり「此の『忘れてくれんなや』をきゝて如何にも真情、取飾りな

きいひ分なりと感し、又可笑しくもありき、然し此の時の忘れ  
てくれんなやアは実に真情、其の心中も思ひやられたり」と、  
若山某は忘れじとの誓言をきゝて安心し、平和を得、久しく箱  
中に忍びて遂に救はれたり、吾人は吾人を忘れたまはざる神を  
信し、之に依頼す、たとひ世に苦痛ありとも主の其の聖言に忠  
実なるを思はゞ忍び得ざることあらんや、忘れたまはざる神を  
信頼するものは幸福なるかな。

## 第三百三十八章 耶穌も近頃は流行りません

基督疾病を痊したまひし者に再び會ひて戒めて曰はく「視よ  
爾までに愈えたり復罪を犯すことなかれ」(約五、十四)。

又曰はく「人々の前に爾曹の光を耀かせ然すれば人々爾曹の  
善行を見て天に在す爾曹の父を榮むべし」(太五、十六)。

希伯來記者曰はく「一び光照を得天の賜をうけ聖靈を蒙り神  
の善言と来世の權能とを味ひて後墮落する者は神の子を再び  
十字架に釘けて顯辱とするが故に復これを悔改に立返らする  
こと能はざるなり」(六、四、六)。

世人の基督教を見るは基督教其物を見るにあらずして信徒を見  
るなり、彼等は信徒を見て善良なれば基督教を善良なりとし、

信徒にして忠孝なれば我が教を忠孝なりとす、彼等の此の方法  
をとる固より誤謬なりといへども信徒たるもの彼等の誤謬なり  
とて責任なしとすべからず、一回教を信じて後之を棄つるは仮  
令何等の理由あり、遁辭ありとも我が教の害、其の人の不利た  
る明なり、一回教を信じて之を棄つる者必ずしも反対家たるべ  
しとはいはじ、然れども「我と偕ならざる者は我に背き我と偕に  
歎めざる者は散すなり」(太十二、三十)の理、彼は口にこそ出たさ  
ね「基督教は虚偽なり、善良なる教、満足すべき道にあらず」と  
説教するに同じ、一回道を信じたるものは殊に深く自己の態  
度を慎み、世人の前に贖物を置かざらんことを力むべきなり、  
明治廿九年の九月余は金石より帰らんと土曜日に金石を出でた  
り、翌日の安息日は遠野に於て安息せんと思ひたれば安息日の  
午前仙臺美以會の信徒千葉某氏を訪ひたり、訪ひて見れば余と  
行違に金石に往きたるよしにて居らず、家人に他の信徒はと聞  
ひしに知らずといふ、余は少しく失望し、町長某氏を訪ひしに  
不在なりといふ、已を得ず余は旅舎に歸りて主人に問へり「此  
の地に耶穌の信者はなきか」と、主人は答へていふ「然ればな  
り、七八年前まではヤソ信者といふも大分ありしが近頃ははや  
一人も無きが如し、他に移りしもあり、死したるもあり、何某



も信者にて時々は説教の手伝などもなしたる人なるが近頃は止めて何県にか往きしよし、耶穌も近頃は餘り流行りません」と、あゝ、旅舎の主人は我が教を以て一種の流行物と見たるなり、彼の目には我が教も衣服の縞柄、髪の方と同じものなりと思ひしなり、然れども余は思へり、主人が我が教を以て一種の流行物と見たるは彼の誤解たるは論なしといへども彼を誤解せしめたるものなくんばあらず、彼故意に他を讀かさんとしたるにはあらざるべしといへども彼は主の聖言を思ふべきなり、曰はく「此の小子の一人を礙かする者は磨石を頭に懸けられて海の深に沈められん方なほ益なるべし」(太十八)と、彼に悔改に立返る道なき至当のことなり。

### 第三百三十九章 拝領だから用ゐます

保羅曰はく「神其の善旨を行はんとて爾曹の衷にはたらき爾曹をして志をたて事を行はしむればなり」(腓二、十三)。

旧約の教義は神の威權の一面明なるが故に凡て皆命令的なり、然れども新約の教義は恩恵の一面明なるが故に凡て皆約束的なり、約翰が「律法はモーセに由りて伝はり恩寵と真理は耶穌基督に由りて来れり」とあるは新旧の精神を明に認めたるものなり、

り、然れば新約中に「信ぜよ」、「悔改めよ」の語なきにあらずといへども命令の性質を帯びたるは少くして、否、無くして皆合意的性質なり、然れども神は絶対的大權を有し、吾人の真利益を思ひて信仰、悔改を勧めたまふの故に吾人は私意、私情を以て之を拒むべきにあらず、思寵的なるが故に眞の恩寵を喜び、其の聖旨に副はんが爲に命令よりも更に重んずる所ありて可なり、

余が同藩の士に村瀬登といふ人あり、ある式日殿中に於て氏に會したりしに氏の佩刀を見れば鉄製の蟹の目貫を附けたり、余は一見して其製作の巧妙なるを知りたれば氏に云へり「此の目貫は大層善くできて居るやうですがいづれ名人の作でせう」と、氏は斯く聞くや目を例の如くパチ／＼然として説出だして曰はく「此の善くできてゐるには困ります、私は生來蟹を嫌ふこと甚しく、幼少の時から手に触れたことは勿論ありませんが見るさへいやで蟹の居さうな所には避けて往かんやうにして居ます、斯ういつたら其れ程嫌ふなら何故目貫にしておくかといひなさるでせう、然しこれには仔細のあることで此の目貫は君公より拝領したものです、恩賜であるから私情より云へば好ましくないが君恩を記える爲に殊に愛する刀に附けて碎くる時があつた

ら君恩と共に御馬前に碎くる思慮かんがへです、よく似て居なかつたら幾分かよいでせうが餘り本物に似て居るので却つて困ります、本物ならとても堪へられないが作物であるから善いのです、然し拝領だから用ゐます」と、吾人の救拯に於る村瀬氏の蟹目貫と同じからずといへども人は「本性にして怒の子なりき」(弗三)、屢々神の恩賜の救拯、永生を好まずして之を斥けることあり、然れども「主その約束したまひし所を成すに遅きはある人の遅しと意ふが如くにあらず一人の亡ぶるをも欲みたまはず」(彼後三)、吾人は神の恩寵の聖声をきゝて速に救拯に与り、一は以て神の聖旨に副ひ、一は以て我が生命を完ふすべきなり、蓋し吾人の救拯、永生は神の恩賜なればなり。卅二年七月十一

日稿

## 第四百十章 積極の教

基督曰はく「凡て人に為られんと欲ふことは爾曹また人にも其の如く為よ」(太七、十二)。

論理に積極と消極とあり、事によりて積極に論するも消極に論するも其の意に於て敢て異らざるも其の勢力に於て大に異なるものあり、譬へば積極的に「善を行へ」といふと消極的に「惡を

為す勿れ」といふと其の帰する所は一なるが如しといへども其の教を受ける者に及ぼす勢力に於て大に異なるものあるを見る、是に於てか積極の宗教と消極の宗教と其の優劣自ら判然たるべし、

余が初めて基督教を聴きたる頃は未だ信念起らず、後僅に基督教の道徳を聞きて高尚なるものと爲し、批評眼もて之を見「人に為られんと欲ふことは人にも其の如くせよ」と聞くや其の語路の惡きと孔子の「己所不欲勿施於人」(論語・顔淵篇)の簡にして尽くせると比し来りて優劣なきのみならず却つて基督教の言よりも高きが如く思ひき、然れども後、漸く基督教の教訓を學ぶに及びて其の味を知るに至るや何となく基督教の「人に為られん云々」よりは孔子の「己所不欲云々」「と比して」大に力なきが如く感じ、遂には基督教の言の真に力あるを認め得たり、今にして思へば基督教の言は積極にして孔子の言は消極なりしが故なるを知れり、比喩の言を以て之を明にせんに茲に重病に罹りて病床にある友あらんに之を訪問したりとせよ、以為く病ある時枕辺に疾走するは我が欲せざる所なりと、深く病者を思ひて静座し、緘黙すべし、若し孔子ありて之を見たらんには彼は「己の欲せざる所を人に施せず」、我が意を得たる哉と賞賛して満足

すべし、然れども基督より見たまひしならば彼は未だし、彼は病ある時慰められ、痛苦ある所を撫摩らるゝを欲せり、然るに彼は未だ「己に為られんと欲ふことを人にも其の如く為さず」と、視よ基督の言と孔子の言と其の帰する所は一なるが如しといへども教訓を受くる者に於ては大に異なる所あるなり、其の後余は次第に基督の教に熟するに従ひて弥々基督の教の積極的なるを見たり、近頃其のことを思ひて恥か記中の一材料たらんと手帳に記し置きたりしに本年三月三日発行の福音新報第百九十二號に誰人の筆に成りしか恰も余の云はんとせる所を云ひたるものあり、試に其の原文を左に載すべし

四福音書に就て基督の言を考ふるに積極的なるを旨として消極の方には重きを置かざりしに似たり旧約の教などは他の倫理教と一般、人の為さるべき惡を掲げ、之を禁止するの方針を取れる教訓最も多し。然れども耶穌に至りては全く其の方向を一変し、凡て積極的に人を訓練することを勉められしなり。彼の富める者とラザロの譬喩を見よ。富める者はアブラハムの懷に行くこと能はず、彼が冥府に在りて苦みを受けしは如何なる罪を犯したるに由るか、其の性行を察するに、敢て不義を働き、大逆を行ひしに非ず。ラ

ザロに対して不當の処置をなせしにも非ず。唯彼が貧者ラザロを憐むこと薄く、自ら樂しみ、身を快くするの何の心も無く、其の財と餘命とを神の聖旨に従ひて活用することとせざりしのみ、彼は是ぞといふほどの犯罪惡事なしと雖も、進んで善を行はざりし為、冥府にありて苦みを受けしなり。人多くは惡を行ふの恐るべきを知りて善を為さざるの恐るべきを知らず、惡魔に事ふの非を覺れども神に事へざるの非を覺らざるなり、多くの基督教徒は罪を犯すことを慎み、戦々競々として消極的の道德を修むれども、大膽に進み、神の為に活動して積極的の道德を修むることを怠りつゝあり、之が為に其の精神<sup>〔萎〕</sup>悉微して振はず。教會は弱き者の団体たるが如き觀を呈するに至れり。今日は罪を犯さざらんことを勉むるよりも神に事へ、其の聖旨を実行せんことを心懸くる人の多きを要す。ダンテが教へ上げたる罪惡の中に懶惰を以て其の重大なる一つとなせるを記憶せよ。惡を行ひて亡ぶる者よりも善を行ふの勇氣なく、唯消極的にのみ流れて積極的精神之しき為に地獄に行く者数多しとす。唯己の靈を救はんと心懸け、甚しき不道德に陥るまじと熱心する者のみ多きは嘆かはしきことなり。盜

せず、淫行を犯さず、人を殺さず、其の道德を禁酒禁煙の範圍に縮め、汲々として器械的道德の奴隸となりつゝ亡に陥る者如何に多きや。一千金を與へられし者の罰せられしを見よ。彼は之を惡きことに用ゐしに非ず。彼は之を服紗に包みて土中に葬り置きぬ、彼は之を用ゐざりしがために罰せられたり。此に知るべし、十誠の禁止條目を犯して神に背く者よりも、其の天より賜はれる力を用ゐず、之を空うするより神の怒を招くもの最も多し。余輩もし消極的の道德を第二に置き、積極的の道德を標準として教會内の有様を観察し、基督教徒の道德を批評せば其のよく一千金を空く埋葬せざるもの果して幾人かある。余輩は基督の信仰に帰るのみならず、其の道德に帰らざるべからず、伝道も積極的なれ。信仰も積極的なれ。道德も積極的なれ。余輩は積極的分子我が衷にまた教會内に盛んならんことを望むものなり。

已に是の如くなるが故に基督の教訓には「何々の惡を行ふ勿れ」とあるものよりは「何々の善を行へ」とあるを多しとす、曾て一人の教法師あり、基督に來りて永生の道を問ふ、彼基督の応答を聞くに至りて大に窮し、一條の通路を発見して「我が

隣とは誰なる乎」と問へり、蓋し彼は話頭を他に転じて自己一身に係る實際の問題を一般に係る理論上の問題と爲し、以て通れんとしたりしなり、然れば基督は彼の猾智を看破し、一場の譬喩談を爲し、彼が反問に對して止むを得ず隣人とは「其の人を矜恤みたるものなり」と答ふ、基督其の答を得たまふや、單に「爾よく理解せり」と賞めたまはずして「爾も往きて其の如く爲よ」(路十。廿九)と命じたまへり、世人が屢々基督教を知らずして其の實行に驚くものは基督の積極的道德の勢力信徒に及ぶものたるなり、積極的道德なるかな。 卅二年七月十二日稿

附言 孔子は人不知而不愠(学而篇)といふ、基督は太五。十六、十二の如し

## 第四百四十一章 謙遜は偽と違ひます

保羅曰はく「心を高ぶり思を過ぐすこと勿れ神の各人に賜りたる信仰の量に従ひて公平に思念ふべし」(羅十二。三)。  
又曰はく「善を來らせんとて惡を作すは宜かからずや此を我儕が言と云へる者あり斯かる人の罪せらるべきは宜なり」

雅各曰はく「人律法を悉く守るとも若し其の一に蹟かば此れ

全を犯すなり」(二。)、

保羅曰はく「各々謙りたる心を以て互に人を己に愈れりと為

よ」(腓三。)

彼得曰はく「互に皆相服ひて謙遜を衣よ」(前五。)

基督曰はく「我は心柔和にして謙遜者なれば我が軛を負ひて

我に学へ」(太十一。)

夫れ謙遜は徳の帶なり、萬善の基なり、諸徳よく備りたりといへども若し謙の一事を欠くあらば他は見るに足らざるなり、茲に於てか天啓的道德を有する基督教は完全に謙遜を教へ、以て他の諸徳を勵まし、善事の實行に資するなり、吾人は屢々基督教外の人より謙讓の重んずべきを聞けども惜哉天啓ならざる道德は不健全なるが故に謙讓の美德中に阿諛、虚偽の分子を離ゆるを見る、然れば世人は知れども知らずといふを以て謙辭とし、為し得れども為し得ざる<sup>まよ</sup>を謙讓と思ふの誤解あり、是に於てか世人は完全、円満なる神が其の榮光を現すといふをきくや神には謙徳なしとするの誤あり、是れ知るを知るとし、為し得るを為し得るとなすを以て謙にあらざとするの誤解より出でたるなり、然れども何ぞ知らん、謙中には虚偽を含有せざるを何によりてかゝる誤解を生じたりや、蓋し故あり、字書を案す

るに謙は讓なりといひ、初めより其の義の誤つべきものありしにあらざといへども漢儒等の不健全なる解釈よりして遂に茲に至りしものか、朱子本義に「有而不居之義」とあり、又史記楽書に「君子以退讓為禮」と見え、是等の教、因を為して遂に謙の真義を誤りしものならん、加え孔子は雍也篇に教へて曰はく「孟之反不伐、奔而殿將入門策其馬日非敢後也馬不進也」と、然れども孟之反の精神は兎に角に其の行為と言とは確に相反するものありき、彼が自己の功に誇らざるは好すべしといへども敢て後れたるにあらざ馬進まさればなりの一言は明に虚偽なり、孔子の之を賞揚したるもの其の精神にあるべしといへども其の虚偽を含める行為を賞めたるが故に後世遂に之を誤り認めて謙には多少の虚偽を含むものとして咎めざるに至りしなり、余が基督教徒となりて久しからざる後なりしが旧主水野子爵山下町の新宅成り旧藩の甲乙招待せられしことあり、余も亦一人にして其の席にありしが席次の上下よりして謙或は不遜などの談あり、此の時「知らざることをも知る」と称せられたる某氏あり、知らざることをも知る程の人物なれば如何でか口を嚙みて居らん、大々的茯苓(茯苓は漢医の薬品にして漢法にては何れの病にも必ず投せらるゝを常としたれば余が旧里にては何事にも容

喙する者を斯く呼べり）を試み、喋々謙遜の説教初まり、其の勢傍若無人なりき、氏の謙は同じく漢儒の弊を其の但受けて傍痛く思はるゝ所少からず、一座皆其の説に感服せるものゝ如し、余は當時謙とは如何なる義なりや敢て研窮したる所もあらざりしが謙の必ず美德なるを信じたり、果して美德なりとすれば其の間に虚偽の存すべきものあらずと思ひたれば余は某氏の辨論を中止し「貴君は先刻より頻りに謙遜を云々せらるゝが謙遜と偽とはちがひます、謙遜は美德なり、虚偽は惡徳なり、善と惡とどうして一徳中に并存することができませうか」と、余は實驗によりて氏が不利なりとて決して凹むものにあらざるを知る、余は氏が必ず横軍的議論を試みるべしと期したり、何ぞ図らん、氏は余が言をきくや考一考したりしが「これは然うだ、君のいふ通りだ」と答へんとは、氏は説教を中断して再び云ふ所あらざりき、余は意想外なるに驚き我ながら彼の人の閉口する所を見れば餘程善き議論なりしと思ひしが後、謙讓の義を明にして彼の人の凹みしは然もあるべきことなりと思へり、謙には毫末も實際と異なるの意を含まざるなり。 卅二年七月十三日稿

## 第四百二十二章 献金は習慣にするがよい

保羅曰はく「聖徒の為に金を捐なふことについてはガラテヤの教會に我が命ぜし如く爾曹も行ふべし、一週的首日ごとに爾曹おのゝ其の得る所の利に循ひて之を家に蓄へ置け、我が到る時始めて捐なふことなからん為なり」(哥前十、六。一)。  
又曰はく「各人其の心に欲ふ所に隨ひて施すべし憂へて為すべからず亦強ひて為すべからず蓋は神は喜びて施をする者を愛したまへばなり」(哥後九、七)。

利未記に曰はく「地の十分の一は地の産物にもあれ樹の果にもあれ皆エホバの所屬にしてエホバに聖きなり」(廿七。三十)。

献金は禮拜の一部なり、若し祈禱、讚美を以て奉事とせば献金も亦奉事なり、若し安息日を守りて神に事ふる者ならば信徒は皆献金せざるべからず、然るに目下我が國教會の有様を見るに何事も幼稚なりとは云へ殊に献金のことは進歩し居らざるを見る、昨明治三十一年の我がプロテスタント教徒の捐金を見るに信徒の總数は四万〇五百七十八人にして捐金は九万五千三百六十六円六十二銭なりとす、之を一人に平均すれば二円三十四銭にして一ヶ月二十銭餘なるのみ、而して其の支途を問へば教會

維持あり、牧師謝金あり、會堂建築あり、伝道金あり、慈善金あり、あゝ、其の支途多端にして其の額少く豈、心細き次第にあらずや、此の一事を以てして我が教會の如何に幼稚なるかを知らず、従つて此の点に幼稚なるは何ぞや、蓋し理由あり、最初我が國に来れる宣教師福音を伝播するや彼等は献金のことを善く教へざりしに由る、彼等は我が國に來りて富の度の低きを見たり、彼等は最初下流の人に説きたり、富の度高からずして福音の召招に應ずるものゝ多く下流にあるが上に信徒を得んとするに急に、且つ教會は組織せられず、支出は少く、尚且つ本国の伝道會社に於ては新國なればとの理由によりて裕に支出し、此の弊遂に「基督教は信徒に物をこそ與へめ、決して取立つるものにあらず」との念を起さしめ、又信徒が人に勧むるにも「救拯に入れよ、金は出だすに及ばず」の常套語を以て遂に「金は出だすに及ばず」の念を助長せしめたるものなり、主は「価なしに受けたれば価なしに施すべし」(太十<sup>八</sup>)と教へ、以賽亜は「來れ金なく価無くして葡萄酒と乳とを買へ」(五十五<sup>五</sup>)と歌ひたれども此は救拯の恩の金を以て得べきものにあらざるを教へたるものにして信徒たるの生涯に金を要せずとの義にあら

ざるは明なり、目に見ゆる教會に属して世に動作を為さんとせば金なくして何をか為さん、教育者は金を出ださしむるに勉め、信徒は金を出だすに力むべし、一度献金を記えて習慣を為すに至らば金を献すること決して難からざるなり、若し金を出ださしめんとせば幼稚なる信者を蹟かさんといふは遂に献金を知らしむる時なきを思はざるべからず、余が藩に庵地某といふあり、其の長子海に遊び、過つて水死す、父母は痛く之を憂いて其の他の子に游泳を禁じたり、情に於ては然もありなん、然れども昔時の武士としては心得違ひなりき、水死したる人の弟某は余が父と同年輩にして交際ありしといふ、然れども父母の嚴命あるが為に公然水に遊ぶを得ず、常に遺憾としたりしが一日余が父と共に狩野川に水馬せんとて往きしが彼の人は遂に沈みたり、余が父は大に驚き、彼を救はんとして彼の身体に接するや、彼苦しきが俛に何等の思慮も無く余が父に抱附き、父は彼の人に抱附かれしが為に進退自由ならず、彼と共に沈みはじめたり、何程力を尽くすも浮上ることもならず、彼を救ふこと能はず、余が父は已に覺悟を定め、彼の人と共に死せんと思ひ、彼に抱附かれし俛水中にありしに彼の人は先に溺れ初めし故か余が父よりは早く死したり、死したるが故に抱

附きたる手はゆるみ、玆に於て余が父は其の手をもきどりと浮出で以て危く死を免れたりといふ、其の場所は香貫村に渡る渡船場（今は橋原村といひ、香貫は小字となり、渡船場には湊橋といふを架したり）にして余が父と共に渡船場を渡る時父より屢々聞きしことあり、庵地氏は斯く二子水死の不幸ありて男子なく田中藩より養子を爲し、彦五郎といひ（後保徳と改む）、其の子福太郎（若くして死す）次男欣吉（後保と改む）氏共に水に近かず、遂に游泳のことを知らざりしならん、然れども余は思へり、若い先代の庵地氏其の長子の水死したるに鑑みて早くより次子に遊ぶことを教へたりしならば第二の不幸はあらざりしならん、返す／＼も氣の毒なることなりかし。 卅二年七月十三日稿、

### 第四百四十三章 祈禱せざるは大胆に過ぐ

約百記に曰はく「まことに汝は神を畏るゝことを棄て其の前に禱ることを止む」（十五、四）。

又曰はく「全能者は何者なれば我等これにつかふべき我等これに祈るとも何の益を得んやと」（廿一、十五）。

神に祈らざるものあり、而して祈る者を笑ふ、其の故を問へば

曰はく「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や護らん」と、暗に自己を以て誠の道にかなふ、即ち善を行へりとして僅に心を安んずるなり、あゝ、盲目滅法界なるかな、彼等を何と評すべきか、恥を知らざるもの恥をかきたる例なしといはんか、猪武者といはんか、狂愚といはんか、自負、自満といはんか、盲蛇物に怖ちずといはんか、吾人は斯かる人物に対して適當の称呼あるを知らざるなり、彼等は「誠の道にかなふ」といふ、彼等何を標準として誠の道といふや、若し自製に係る道ならんには取捨、折衷の功、之に「かなふ」といふべし、然れども誠の道は自ら製造したるものにあらずして自己以上のものゝ規定したるものなり、自己以上のものゝ規定なりとすれば其の以上者の道に如何にしてかなふことを得べきや、あゝ、彼等は道の何たるを知らざるによるか、然らざれば自ら欺くなり、孔子の聖すら「義を聞いて従る能はず、不善改むる能はざるを憂ひ、切瑳琢磨の功「七十にして矩を踰えず」と云ひしにあらずや、爾時としては酒樓に妓に戯れ、屢々間に合はせの虚言を吐き、而して「道にかなふ」といふ、其の言狂愚にあらずして何ぞや、孔聖すら其の力の足らざる、其の徳の卑しきを嘆ず、況して凡庸汝の如きをや、人如何でか神に祈らざるを得んや、祈らざる



は道の何たるを知らざるなり、自己の真相を見ざるなり、祈祷せざるは人間としては大胆に過ぎたることなり、

余が父余に語りて曰ふ、我江川坦庵先生の塾にある頃先生に従ひて屢々豆相の諸山に狩猟し、後には幾分か得る所もありき、一日伊豆の某地に猟したる時犬禰(いぬぬま)（とは数頭の猟犬猪鹿を窮地に追ひつめ、其の周囲より取巻き居るをいふ）にであひたることあり、其の時追迫られたるは一頭の大鹿なりしが犬に取巻かれたるまゝなれば遁ぐることはなはず、前後、左右に角を向けて犬を威し、犬も中々に近かず、四方より吼立て、何時果つべしとも見えざりき、手に猟銃あれば狙撃せんことは難からざりしが四方犬を以て囲みたれば、よし鹿に命中したればとて弾の餘勢犬を傷けんかを思ひ、躊躇して見て居りしが遂に遁走らざる鹿なれば猟銃もて打殺さんと思ひ、忽ち犬の間より大禰の中に入りたり、入るや否や、銃を大上段に振揚げ、打たんとせる一刹那、如何になしけん、身は忽ち八九尺の傍に擲飛ばされたり、然し繁りたる灌木に擲附けられたれば擦傷さへ受けずして地上にゴロリと転げしのみ、コレハと驚き、起上りて再び近かんとせしに先生の一言に叱責せられ、猶豫して近かざりし間に猟夫の一発鹿は忽ち倒れて死したり、後、先生は諄々説きて曰

はく「大禰に入るは危険中の最も危険なることなり、汝が大禰に入りたるは素人にあらずして幾分か技に熟したるの證とすべし、然し大禰に入りて負傷せざるものは殆ど稀なり、時としては殺さるゝことさへあり、今日負傷もせざりしは汝の高運なり、余は遠くより大禰を見、汝が飛入らん模様あるを見て声をかけたれども達せざりしか、聞かざりしか、汝は忽ち飛入み、生命までとは思はざりしが大負傷を為したらんと馳来りしなり、生兵法大疵の本、盲蛇ものに怖れずとは汝が今日のことなり、以後必ず慎しむべし」と戒めたまへり、知らざる時は何とも思はず、先生よりかく聞きて冷汗の背に流るゝを覺えたることありきと、自己の薄弱なるを知らずして祈らざるものは大禰に入る危険を知らざる人の如し。 卅二年七月十三日稿

## 第百四十四章 模範の必要

基督曰はく「我爾曹に例を示せり此は我が爾曹に行しゝ如く爾曹にも行さしめんが為なり」(約十三。十五)、

「百聞は一見に如かず」、西諺に曰はく「議論の十斤は實行の一斤に値たる」と、蓋し耳に入る所の理論は美は美なりといへども目以て見る所の實行の他をを化するの勢力には及ばざるな

り、我が基督教の人を化導する實力あるものは其の宗教理論に基きたるものにあらず實在者なる基督の實行に基けるが故なり、ある人は實行なき空論を貴び、此の空論的眼光を以て基督教を見るか故に屢々我が教理を淺薄なりとし、空論多き佛教を以て深遠なり、高尚なりとせり、何ぞ知らん、彼等は宗教と哲学とを混同し居らんとは、夫れ哲学の主とする所は原因、道理、勢力、法則に由りて諸現象を解釈し、又諸現象を原因、道理、勢力、法則に分賦するものなり、其の實行の有無は問う所にあらず、之に反して宗教は禮拜、愛心、服従の目的物として神を信認することなり、然れば宗教は換言すれば實行にして理論にあらず、パウロがコリント人に教へて「神の國は言に在るにあらず能にあればなり」(哥前四。廿)と云ひ、帖撒羅尼迦人に教へて「我儕の福音爾曹に來りしは只言に由りてのみならず能により、聖靈に由り又篤き信仰によりてなり即ち我儕爾曹の中にありて爾曹の爲に如何に行ひしかを爾曹知る如し」(前。五。一)といひしはよく宗教の義を明にしたるものなり、然れば基督の品性、行爲は信徒の模範にして常に目前に其の完全なる性格を示して以て「我に學へ」と呼びたまへり、然れば基督教徒に屢々高德の人物を見るは此の完全なる模範あるによるなり、既に此の模

範あり、其の徳高からざれば主を辱むるなり、よし高しといへども空論、無模範の佛教とに對して誇るべきにあらず、吾人基督教徒は善を爲し、義を行ふことを教へらるゝのみならず基督の如き模範ありて而して「爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし」(太五。四十八)、と教へらる、模範の力は理論に優ること万々なり、恥か記第二百二十一章を見よ、

明治卅二年四月余はリフォームド教會の依頼に応じて福島、山形の二県下を巡回したることあり、仙臺を出てゝ其の日飯阪に至りしが余の常に面白からず思ふことは田舎の教會の讚美歌の下手なることなり、余は彼の地に往きて後に伝道士市村氏の妻女あるを知り、又此の妻女が歌を教ふるといふをも聞きたり、然し村上長老の口調によりて教ふるとは云へ、格別に學ぶこともあらざるが如くきゝたれば同じく是れ田舎流の歌ならんと思ひ居りしに弥々開會のときとなり、諸信徒の歌ふ所をきけば大に預期に反し、其の巧なるに驚きたり、後、村上氏に歌は中々に巧なりといひしに氏は曰ふ幸に市村氏の夫人の勞によりて田舎としてはよき方なり、何にせよ、先生がよいので……、此の巡回は不思議にも五十五番に縁ありて飯阪に於て、福島に於て、米澤に於て、上の山に於て、四ヶ所続けて第五十五番との声を

きゝしが殊に驚きたるは上の山なり、彼所は去る廿年より伝導に着手し、今尚ほ其の時信者となりし人も数人あり、余は少しく後れて講義所に入り、余が次の間に座を占めたる時司會者は五十五番といふ、其の聲に應じて歌ひいだしたる一婦人ありしが一同之に和して歌ふを聞けば同じく五十五番なれども前の三ヶ所には比すべくもあらず、若し司會者の五十五番といふ声なかりしならば或は何番なりやを知る能はざりしならんと思ひき後にて聞けば其の音頭取りし婦人も故に歌の爲にとて宮城女学校に入りたるものにて信徒は皆彼に倣ひて歌ふものなるよし、一は新信徒多くして上手なり、一は旧信徒にして此の如し、他なし、一は其の模範善くして一は其の模範の不完全なるによれり、模範は深く注意して選択せざるべからず、歌の巧拙は其の関する所小なり、吾人の徳に至りては其の關係決して小ならざるなり、統々恥か記第十五章参照。 卅二年七月十四日稿

## 第百四十五章 手続があるので無暗には棄せません

基督資格なくして天に入らんとするも許されざるものあるの寓言を設けて教へて曰はく「王客を見んとて来りけるに茲に一人の禮服を着ざるものあるを見て之に曰ひけるは友よ如何

なれば禮服を着ずして此処に来るのかれ默然たり遂に王僕に曰ひけるは彼の手足を縛りて外の幽暗に投げいだせ其処にて哀哭また切齒することあらん」(太廿二。十)(一十三)

因に曰ふ東邦諸国の風、客を招待する者は常に禮服を備へ、客入来るや之を着用せしむる習慣なり、故に禮服なくして客室に入るは主人を侮辱することなり、

世には一種の考案を有し、自ら救拯の必要を感じれども救拯の條件を知らず、即ち國王の招待には応ずれども自義、自賛の禮服を纏ひ、其の服裝を以て天に入らんとするものあり、抑々天は神の経営したまふ所にして人の設けし所にあらず、救拯は神の恩賜にして善行の報酬にあらず、神の設けたまひし所に入り、神の恩賜に與らんとせば自己の平服、即ち襤褸の如き行為を以てすべからず、パウロが「工を作すものゝ価は恩と称はず受くべきものなり」(羅四。一三)といひ、又「律法の行に由りて神の前に義とせらるゝ者一人だにあることなし」(三。廿)といひしを思はゞ吾人は唯基督の贖によりてのみ、天に入り、救拯を得るの福を得べし、吾人基督を信せば吾人に一「回」の功なしといへども基督の功績を負はせらるゝが故に忽ち天に入るの資格を有し、神の祝福によりて無罪と見做され、永遠の救拯に與ることを得

るなり、神若し其の聖き眼を以て吾人を見たまふならば吾人到底義たること能はず、たゞ基督の義を纏ふ時に義と見做されて天は我が物となり、救拯は已が物となるを得べきなり、

余が福島、山形の兩県を巡回せんとするや福島米澤間の鉄道は五月一日(廿二)より開通とのことなれば先づ山形方面にむかひ五月一日後米澤に往かば福島へは汽車にて旅行し得べしと思ひしに後又開通は十五日に延期せられたりと聞き、果して然らんには何れの方面よりするも同じことなりとて遂に人の請にまかせて福島の方に向ひたり。同所より米澤までは例の道路県令と称せられたる三島子爵の開鑿したる新道あり、余は既に経験もあり、人力車にて越すべしと思ひしに飯坂其の他にて問へば近頃道路破壊して修繕を加へざれば逆も一人曳にては往くこと能はず、二人曳としたらんには少くも三円五拾錢以上なるべし(後に思ふ一人三円五拾錢にして二人ならば七円となるならんか)、よつて余は自己の困難なるのみならず、リフフォームド教會に對して氣の毒なれば何とかして土車(人は臺車といふ)に乗らん、土車に乗らんとせば前以て其の手續を為さるべからず、茲に於て渡瀬氏に談し、其の周旋を請ひしに氏は快く承諾し、余の為に鐵道局の派出員山下宗利氏に談じくれたり、山下氏は

名刺三枚を添へ、大体は一枚にて故障あらざれども時として途中にや、かましき人物居りて繼立地より先の乗車を拒むことあり、若し庭阪にて拒まば第二の名刺を出だして、峠にて拒まば第三を出だすべしと示されしよし、余は四月廿八日に乗車せんと思ひしに廿「六」<sup>七</sup>日の夜より俄に下痢を初め、医戒によりて廿八日は一日断食を為し、廿九日の朝、旅宿の番頭に導かれて停車場に入りたり、余は山下氏の名刺を信じたれば乗車を拒まざるべしとの懸念はあらざりしが旅宿の番頭の言によれば時として十町又は廿町人を乗せざる所ありて徒歩せざるべからざることありと、余は平生なれば十町、廿町何とも思はざれど下痢したる上に一日断食したれば若しかゝりしことありたらんには如何にすべき、此は余の大に心配したる所なり、余は之を憂ひつゝ旅宿より共に出でたる校服の生徒と事務所に入りしに昨日の米澤の大火を見舞はんとてか乗車を乞ふもの非常に多く、平日は十数人位なりといふに此の日は事務所にあるものゝみにて已に三十人に近く、余の前に立ちて乗車券を乞ひ居る一婦人は正當の手續なしとて拒絶せられ、余と共に入りし生徒も「如何なる御用か知らんが乗車には乗車の手續があるので無暗には乗せません」の一句にて見事拒絶せられたり、彼は一方に斯く拒絶せら

続 続 恥 か 記 第九卷

れつゝあるに余が山下氏の名刺を出だして事務員に付したる時  
彼（多分野村某といふ人）は名刺を一見するや記載の日限に一  
日の相違あるに拘らず、何をも云はず乗車証に一名と記入して  
直に余に付したり、余は深く思へり、彼等拒絶せらるゝ人々も  
無暗に乗車すべきものとは思はざるなり、斯く思はざるが故に  
知人の書面とか名刺とか持居らざるものなし、然れども彼等は  
正當の手續なし、正當ならざるが故に拒まるゝなり、世の天に  
入らんとする者愚を為して無暗に入るべしとは為さず、斯くせ  
ざるが故に自ら可なりとせる自義、自賛を頼みて、天を輕視し、  
救拯に入らんとせるなり、然れども彼等は自分免許の方法を頼  
めり、自分免許は神の善しとしたまふ所にあらざるなり、余は  
車中に此事を思ひて一二首を得たり

道を得ればたやすきものを得ぬものゝ

こばまるゝこそ愚なりけれ

拒まれて恥かくものもあるなかに

ゆるさるゝ身の嬉しくあるかな

尚ほ続々恥か記第百九章を見よ、

卅二年七月十四日稿

続 続 恥 か 記 自 第四百四十六章  
至 第五百五十六章 第十卷

第四百四十六章 人造七不思議

箴言に曰はく「膏と香とは人の心をよるこぼすなり心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯くの如し」(廿七、九)。

伝道之書に曰はく「二人は一人に愈る其はその労苦の為に善報を得ればなり即ち其の跌倒るゝ時には一個の人其の伴侶を扶けおこすべし然れど孤身にして跌倒るゝ者は憐なるかな之を扶けおこすものなきなり」(四、九、及十)。

人は友を得るに優りて善きことなし、殊に旅中に友に逢ふは更に嬉しきことなり、況して何事か扶助を要する場合に於て期せずして友に邂逅するに於てをや、實に人は孤独のものにあらずして群居、社交の動物なるかな、

全(前の誤)章に述べしが如く余は福島より米澤まで未開通の鐵道にて旅したりしが余は此の旅行に於て不思議にも旧知に逢ふて大に便利と快樂とを得たり、其の次第を述べんに福島を發したる臺車は僅に十五分にして庭阪に着したり、乗客を取扱

ふ列車にあらざるが故に駅夫など居るべき筈もなく、車は乗りかへるものなのか、乗替へるとすれば何れの車に乗るべきや、唯同車の人の評判に耳を傾けて僅に自ら定むるのみ、庭阪に着したる時、直ぐ右の方の線路に砂を積みたる二三臺あり、人々は此れならんといふに任せて急ぎ其の車に移りしに又此れにはあらずといふものあり、余は断食の翌日とて甚く疲労して十分に歩行もならぬ程なり、大手提、小手提、傘、膝掛これらをかへて走らんことは尚更なり、然りとてグツ／＼したらん**つよいもの**に強者勝の行はるゝ所善き場所を占めんこと弥々困難なり、然し世は生存競争の世の中なり、走れずとて走らずには居られず、止むを得ず、線路を斜に横切りて走らんとせしに疲労の悲しさ、足は十分に高くあがらず、忽ち規條に躓きて膝を突きしが突貫中の人々顧るものすら無し、漸くプラトフォームにかけつけ、荷物をおきて這ひあがり、再び荷物をとりて已に数人乗り居る土車に乗りたり、人足体のものをかきわけて腰だけは材木に休ませたれど荷物のおき所は無し、止むを得ず、両足の間に

堅におきしが車の揺れたらんには転がりおちん危険あれば荷の端をとらへて居たり、其の時余が前面のプラトフォームに來かゝりし人あり、何心なく彼を見れば川原小路の隣家に居たる川井影樹氏なり、余が川井君と声かけると共に氏も余を見かけて驚きたるものゝ如く、乗るかと思へば然りといふ、氏は「も」と機関車に遠い方が善い」と独言つゝ彼方此方を見まはし居りしが已にはや人を以て満ちたる車の善き所あるべくも無く、氏は忽ち余の右方に居りし人足に「手前、彼方へよれ」と命じ、人足の抜けたる跡に自ら入り、一別以来の挨拶と共に余が大荷物<sup>(A)</sup>の脚下にあるを見て又後辺の人足に「此の荷を手前の傍へおけ、此所では落ちさうだ」と命ず、人足は唯々として氏の命の俛に座を譲り、余が荷を移す、氏が此の工事に關係し居るは伝聞し居りしが此の言行によりて見れば已に功勞を歴たるものと見え、暫くして機関車にありし一人は來り、「パスをお出しなさい」と呼び人々は争ひて乗車証を出し、余も出ださんとせしに川井氏は傍より「何、これは善い」とて拒み、又余には「出さずとも善い」といふ、余は氏の言にまかせて遂に乗車証を示さずに終りき、久しからずして車は発したりしが氏は廿七年以來此の工事に關係したることゝ線路中のことは山なり、

川なり、村なり、何なり、語らざることなく、示さざることにし、車の進行中は機関車の響に声をいだすも余が耳に達せざれば手帳を出だして木筆もて一々指示し、第十三號トンネルの工事中、其の上の山抜けてトンネル中に落ち、為に廿人餘死したるよしなど聞きたり、余は氏の好意によりて余が自ら「人造七不思議」といふことを聞きたれば左に挙げんとす、即ち此の線路にのみありて他の線にはいまだあらざるものなり、

(一) 線路の勾配三十分一少からざる事、我が國の線路は何れの會社に於ても四十分一勾配より急なるものなし、四十分一以上にして列車の通ぜざることとはあらざるも陸軍省に於て拒みて許さざるよし、然るに此の線路は工事の都合により止むを得ず、陸軍省に願ひ、同省より特許を得たるよしなり、然れば通常の機関車にては僅に七八輛を引き得るのみ、目下海外へ注文したる強力<sup>(A)</sup>の機関車已に横浜に着し居り、不日送り來るべしとのことなり、

(二) 此の線路にはブロック、シグナルと稱するものある事、ブロック、シグナルとは一個の電信局にして線路に沿ひたる山腹に造りしものなり、三十分一勾配なるが故に萬一途中に於て客車の機関車との聯結を断ちたることなどあれば到底追したる客

車を止むること能はず、庭阪を発して板屋峠までは平坦なる所さへ無き程なれば其の不慮に備へんが為に設けたるものなり、

若し逸走して庭阪方面に下り初めしものあらば此の局に於て直に庭阪に打電し、同所に於ては此の報に接するや否や線路にポイントマンを派して逸車を駐車路に導き、以て停車せしむるの法を取るなり、近頃人足の多く乗りたる臺車逸して庭阪近傍にありし機関車に衝突し、為に十数人即死し、一人の如きは何に触れてか胴半より両断せられたるものもありきと、

(三) トンネルの事、 其の数多きと長きトンネルあるは絶後とは云はじ、我が国空前の奇事なり、此の線路は延長廿六哩(十里餘)にして其の間に十九個のトンネルあり、(ミ) 其の内最も長きは第十六號にして一哩と三チェインスあり、斯く長きが故に屢々列車通行したる時は煤煙より生ずる不良の瓦斯を満たすの危険あり、是を以て其の中央の上部にシャフトと称する風穴を穿ち、煉瓦を以て積上げ、幸に高き峰にはあらざりしがシャフトの長さ三百六十呎、正しく六十間なり、何故か西の方にでんとする所に一個のシャフトあれども其の長さは五六間に過ぎず、又此の線路のトンネルは山嶺の下に掘りたるもの二三(第十六號は其の一なり)にして其の他は皆山麓に沿ひ、

山の形に横に掘鑿したるものなり、然れば少しく長きは皆灣曲して、左側即ち南の方に窓を切りたるもの少からず(多くは山麓の南に沿ひて穿ちしものにて南山の北麓には一二の外無し)、蓋し斯かるトンネルは斜傾を避けん為にあらずして雪解の頃山嶺より積雪の落下るを防ぐ目的に出でたるなり、此の辺は雪の深き所にて積雪の害甚しく、雪除小屋などは作るも用を為さずといふ、

(四) 工事中人の多く死したるもの全国第一なる事、 余南氏に聞く、氏が石切所のトンネル工事を為したる間、幸にして一人の死者を出ださず、是れ余が信徒となりて後のことにて天父の恩恵なりと信じ居れり」と、然るに此の線路の工事は屢々惨事ありて五六年の工事中五六十人の死者あり、第十二號トンネルを出でし時、川井氏は理由を語らずして前山の中腹の緩く斜傾を為したる所に五六間直径の円形に草なき所を指し示したり、後に氏のいふ所をきくに此は第十三號トンネルの上部にして工事中突然山腹よりトンネルの中に土砂抜け落ち、為に廿三人即死を為したりと、時としてトンネルの工事中土砂、石塊の墜落して工夫の死するものなど無きにあらねど山嶺より抜けて落ちたりといふは珍しきことなり、



(五) 工費の莫大なりし事、有名なる板屋峠の險を越ゆることとてトンネルは多く、夫等の為にや工費は全國一と称す、平均一哩の工費十八万五千円(廿六哩は四百八十餘万円に當る)にして普通鉄路の三倍を要したりといふ、

(六) 一村に三個の停車場ある事、此の線路は板屋峠の險に敷設したるものなるが近年板屋村を拡張して同村は数里に亘ることとなりたれば斯かることゝは為りしなり、余願ふに旅客の上下するは二個にして一個は水を供給するが為に設けたるものならん、然れど兎に角一村中に三個のステイションあるは此の線路の特色なりといふべし、

(七) 線路の高き処にある事、板屋峠の最も高き処は四千「四」百呎ありといふ、線路は固より山嶺に設けたるにあらざれども村の所在地は四千呎に近し、我が全國中鉄道線路のかゝる高処にあるは又此の特色なりといふべし、然ればにや余が此の線路を通過したるは四月廿九日なりしがいまだ線路に沿ひて雪の消えざるもの五六ヶ所あり、時としては雪中に立てる桜樹の満開なるを見たり、

以上余が命名したる七不思議なるが川井氏は啻に説明の扶助を与へたるのみならず、米澤の停車場に下車したる時の如き工夫

の一人を捕へて車屋のある所まで此の旦那のお供をせよとて余が荷をかつがしめたり、川井氏は余の為に「地獄の佛」たりしなり、統恥か記第四十五章を見よ。 卅二年七月十五日稿、

## 第四百四十七章 人を頼む教會は榮えません

詩に曰はく「あるひは車をたのみ、或は馬をたのみてする者あり、されど我儕はわが神エホバのみ名をとなへん」(廿。)、又曰はく「王者いくさびと多きを以て救を得ず、勇士ちから大なるをもて助を得ざるなり。馬はすくひに益なく、その大なるちからも人をたすくことなからん、視よエホバの目はエホバをおそるゝ者並またその憐憫を望むものゝうへにあり」

(卅三。十、  
六二。十八、

又曰はく「實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり、かれらを権衡におかば上にあがりて虚しきものよりも輕きなり」(六十二。九。)

昔日ユダヤ国の君主等に隣国との戦に神を頼まずして他の王者を頼み、以て神の呪詛を蒙りし者あり、戦争に、政治に人を頼むは不可なれども幾分か恕すべき所あるに似たり、然るに今日の我が国の教會又一個人を見るに神の国の拡張、自己の修養、

救拯等に神を頼むの念乏しくして或は貴族を頼み、あるひは學者を頼むものあり、昔日戦争、政治に人力を頼みしすら神の呪詛ありたりとすれば況して宗教に人力を頼むもの神の祝福を蒙ることあるの理あらんや、慎しむべきは教会の人を頼むことなり、

我が國に貴族、門地の人を多く網羅したる教會を求めば第一に指を米澤に戻すべし、米澤に講義所を設けたるは廿三年の頃にして最初は好況なりとの報に接したり、同地は上杉伯の旧領地にして今や封土を奉還したりといへとも上杉氏と米澤市民とは切つても切れぬ關係ありて今日尚ほ「御殿様」たるを失はず、かゝる事情あるが上に其の信徒中に子爵上杉茂憲氏あり（但し東京住居）、子爵松平忠敬氏夫妻あり、婦人<sup>夫</sup>は伏見宮殿下の令妹にして子爵は上杉伯の令弟なり、尚ほ其の弟上杉熊松氏あり、今は平民なれども平民と見るもの一人もあるなし、其の他上杉彌五郎氏（今は勝持）あり、而して松平子爵夫妻の如き當に篤信なるのみならず極めて謙讓にして其の風采こそ華族然たれ、其の坐作進退毫も大名風を存せず、風雪の時など土地風なりとは云へ夫婦打揃ひて「モンペイ」と称する裁着をはき、「ツマゴ」と称する蓑靴をはきて禮拜に出席し、時としては自ら兩戸

を開くことあり、ランプに火を点することあり、已に是くの如くなれば土地人士は我が教を善きものなりと信じ、貴むべきものなりと信じ、決して輕侮する者はあらず、然し同時に基督教は身分あるものゝ宗教にして下流人民の信すべきものにあらざとし、所謂敬して遠くるの風あり、然れども此の上杉氏一家の信者たることは教會の爲には一種の不幸となれり、世人は貴人の玩弄物と見做して近かず、信徒は徒に松平氏、上杉氏を頼みて、自ら責を任ふ者少く、唯金力に於て依頼するのみならず、伝道に於ても依頼し、甚しきに至りては松平子爵の謙徳に甘んじて講義所の小務をすら顧みざるに至り、是が爲に教會は退歩こそせざれ、更に見るべきの進歩なきに至れり、教會は貴族を以て神の上におきしにあらず、基督の能貴人に及ばずと為したるにはあらずといへども貴族に頼る所多きによりて自ら神に頼るの念乏しきに至る、今や松平子爵彼の地を去り、残るは上杉熊松氏にして今の伝道者は三澤氏（氏は山形在成澤村の農なり）なれば信徒諸士は人を頼まずして神を頼むに至るべく、神を頼むに至らば其の繁昌期して待つべきなり。 卅二年七月十

## 第四百四十八章 同情の力

保羅曰はく「喜ぶ者と共に喜び哀しむ者と共に哀しむべし」

又曰はく「爾曹<sup>たがひ</sup>彼此の勞を任へ」(加六、二)

(羅十二、十五)

出埃及記に曰はく「モーセ手を挙げればイスラエル勝ち手を垂るればアマレク勝てり、然るにモーセの手重くなりたればアロンとホル石をとりてモーセの下におきて其の上に坐せしめ一人は此方一人は彼方にありてモーセの手を支へたりしかば其の手日の没るまで垂下<sup>さが</sup>らざりき、是に於てヨシユア刃をもてアマレクと其の民を敗れり」(十七、十、十一、十三)

何事によらず同情を要せぬことゝては無きことなるが我が教役者の動作の如き、とりわけ其の必要なるを感じ、今日の教役者は世人より同情を得ざるのみならず、常に敵対の位地にあり、賤しきことをいふやうなれど其の身薄給なるが故に世人が買得る快樂もなく、世には立身、出世などいふ希望もあれど彼等には其のこともなし、唯其の力となるものは神の約束したまへる天あるのみ、若し此れなからんかパウロが「我儕の望たゞ此の世のみなれば衆の人の中に尤も憐むべき者なり」(哥前十五、十九)

吾人は其の職に堪ゆるものにあらず、然れば教役者の為に奨励となり、慰藉となるものは未来の希望に外ならずといへども此は是れ教役者の自ら内部に得る所にして外部より得るものは信徒の同情なりとす、教役者固より木石にあらず、若し我に同情を表する者あらば豈教會と死生を共にせざるを得んや、吾人は屢々教會より役者の無能を責むるを聞き、又其の不働を叱するを見る、然れども不幸にして深く同情を表するもののあるること少し、教會たる者若し其の役者を以て無能とし、不働なりと見たらんに十分之に同情を表し、役者の哀しむ時之と共に哀しみ、役者の勞れたる時之と共に其の勞を任ひて見よ、鞭を挙げて彼を叱するに優る万々なるを見るべし、希伯來記者の「彼等をなげかせず歛びて守ることをなさしむべし」(十三、一)といひ、パウロの「爾曹を教ふる者を顧み」(撒前五、十三)といひ、又「言を伝へ教を為して勞する長老を殊に尊むべし」(提前五、十七)といひしは此の同情を教へたるなり、然れば苟も教會にして牧師をよく働かしめんとせば之に同情を表するの一方方法あるのみ、同情は苛責の鞭にあらずして真綿の笄たるなり、

武州の和戸教會は古き教會なるが不幸にして牧師を得ざること已に二十年に近し、同會が牧師を失ひて三四年の後、明治十七

年より十八年にかけて余は毎月一回位つゝ同會の依頼に応じて其の地に出張したり、同會は平生牧師なきが故に教師の出張は大旱の雨の如く、無遠慮に云はゞ老若、男女右より左より蒼蠅きまでに用續して問ふもあり、語るもあり、中々に繁忙なりき余は土曜日に往き、其の夜近村に説教し、和戸村に歸りて一泊し、翌日の聖日には和戸の教堂に説教し、午後と夜とは杉戸に説教し、月曜日の午前、午後説教し、余は是く三日に亘りて五六回の説教を為せるが故に時としては月曜日に至りて最早発声すること能はず、實に和戸出張は余の爲に苦痛なりき、小林長老は常に云へり「鉋遣ひを致しまして御氣の毒でございます」と其の意無暗に追ひつかふとのことなり、而して余に供する報酬はと云へば固より何も無く、余が中等機車に乗るに拘らず、下等汽車の往復賃を拂ふのみ、已に此の如くなれば啻に身体之苦痛のみならず、懷中をも痛むることありて余の爲には損ありて益無しといふべかりしなり、然れども余は和戸出張を苦勞なりと思ひしことなく、好ましからず感じたることなし、其の故何ぞや、唯和戸の兄弟が余に同情を表しくれる一事に励まされたりき、余が和戸伝道の動機は固より和戸兄弟の同情にはあらずといへども余が疲勞を感じる時兄弟は之に同情し、余が失

望する時兄弟は之に同情し、余が苦心する時兄は之に同情し、彼等は余をして一人喜ばしめず、一人憂ひしめず、常に余が「勞を任ひ」て余を助けたり、是れ余が和戸の鉋遣ひを厭はず、自ら好みて鉋となりし力なりき、實に同情は人を動かす力を有するものなり、 卅二年七月十七日稿

## 第四百十九章 釜石の大鑛爐

保羅曰はく、「基督の愛我情を励ませり」(哥後五、十三)。

基督最後の命に曰はく「爾曹ゆきて萬國の民にハブテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」(太廿八、十九)。

基督の伝道は屢々世人に誤解せらるゝことあり、我が國の如く長く佛教の流行し居るに拘らず、伝道のことなく、又基督教の如く完全に愛を教へざる宗教の行はれし所に於て基督教徒の愛を理解せざるは寧ろ当然のことゝす(統恥か記第二十一章を見よ)、然れば基督教會の伝道會社が資金を投じ、人を派して外國に伝道するや其の意のある所を解せず、出処も不確なる魯帝ピートルの遺訓とやら稱するものを輕信して宣教師を見ることが國事探偵の如く、信徒を見ることが売國奴の如くし、何事か大に爲にする所あるが如しとす、此れ彼等は基督の愛に励まざるゝ

を知らざるなり、転んでも唯起きぬの卑劣心より基督教徒の精神を揣摩するの誤解たるなり、基督教徒の伝道他意あらんや、唯基督の命と愛とを重んずるあるのみ、

陸中釜石町を少し離れて鈴子といふ所があります、其所に田中製鉄所といふのがあつて日夜山から断出す鉄鉱を鎔かして鉄鉄を製して居ます、同所には五座の鉱爐がありますが最も大いのは高さが六十尺もあり、一晝夜に六回つゝ鉄鉄を流し、六回の製出高は廿噸、即ち五千五百貫ばかりです、其の他の小さい鉱爐で製するのを合はせると毎日一万四千貫程づゝできるさうです、此の鉱爐について一條の話があります、諸君の御存の通り此の製鉄所は明治の初年に鉱山寮といふ政府の役所があつて釜石の近所に鉄鉱があるから鉄を製したらよからうといふので英國から一切を取寄せ、莫「山」(大)の金をかけて漸くできあがつたのです、然しどういふ理由かは知りませんが政府ではできあがつて半年たつたかゝんに製鉄事業を止めてしまひました。そこで釜石に一種の評判があつたのです、其の評判は政府で製鉄所を造るので英國へ鉱爐を初め一切の器械を注文した所、英國では餘り大き過ぎて始末にゆかない鉱爐をかついで困つて居た所であつたから大悦、直ぐ其のかついで居た器械を日本に売

付けたのであつた、政府では其の事情を知らんから取寄せて据付けて見た所が馬鹿に大くて其の鉱爐を用ゐることができない、それで折角できあがつたのを一寸始めて直ぐ止めてしまつたのだ、これが評判であつて皆其のやうに信じて居たのです、實に西洋の事情を知らんといふにも程のあつたことです、或は其の時に大きすぎたといふことだけは事實であつたかも知れませんが、鉱石の切出しも今の様にはゆかず、石炭の供給も十分ではなし、鉱夫等の雇賃は高い、強ひてやつても割にあはないこともありましたが、然るに田中といふ人が引受けてからは雇賃は安い、鉱石は多くでる、北海道の炭山が開けてから澤山の粉炭がくる、粉炭をコークスに焼いてドン／＼鎔かす、今、製鉄所の人に聞くと二十噸を製する大鉱爐と其の外で毎日一万三四千貫出ても十分に世間の需用に應ずるに足りない、そこで近頃は、大鉱爐の第二爐(とは何れの鉱爐も一座には同しものが二個づゝあつて交番に用ゐて居ます)に悪い所があるので其の修覆にとりかゝつて居ます(廿九年中のことなり)、一時に双方をつかふことはできませんが今、用ゐて居る方に損所でもできるなら差当り二十噸を製する鉱爐がないので何時でも用ゐられるやうに支度して居るのです、大分鉱爐のお話が長くなりましたが之について

考へることがあるのです、基督教が宣教師等の手によつて我が國に伝つてくるのを見て種々の評判をするものがあります、或る人は基督教が英米などで近頃信する人が無くなり、教師等が不用になつたので日本へ来たのだ、自國に信用が無いから外國へ弘めるのだと見て来たやうに評判するものがあります、金石の大鉱爐を英國のかつぎものだと思つた人は今、製鉄所でもつと大いのを欲しいといつて居るのを聞いたら喫驚しませう、それと同じやうに基督教の眞實の味を知つたらある人のやうな馬鹿なことを云つて居る人、又それを眞に受けてさうだと思つて居る人は途方も無い誤謬であつたと後悔する人があります、若し基督教についてこんなことを信じて居る人があつたら金石の大鉱爐のことを考へなさい、大き過ぎてかついで居たと思つたのは却つて自分の知識の無いといふ證據になります、基督教が英米に廃つたといふのは自ら自分の無識と愚なことを披露して居るのです、大爐は不開國に用なく、大声は里耳に入らずともいひませうか、小理屈をいふ先生、少し考へたまへ。

卅二年七月十七日稿写 喜ノ音第二百九號、廿九年九月一日發行に掲載す、

## 第五百十章 内顧の憂

約書亞紀に曰はく「我等は一切の事モーセに聴きしたがひし如く亦汝にきゝしたかはん唯願はくは汝の神エホバモーセと偕に在し、如く汝と偕にいまさんことを、……唯汝心を強くし且つ勇め」(書一。十八)。

教會に於て牧師の動作を妨ぐるの最も甚しきものは牧師の動作に同情を表せず、牧師をして内顧の憂あらしむることなり、希伯來記者が「彼等を欺かせず飲びて守ることをなさしむべし」(十三。十七)といひたるを思ふべきなり、若し會員中に不義を為す者あらんか、牧師は之が爲に善後の策に奔走せざるべからず、若し自己の會友中に不義を為すものあらんか、牧師は如何にして大担に我が教の力あるを述ぶるを得んや、若し會員中に惰りて動かざるものあらんか、牧師は之が爲に特に奨励、勧告の勞を取らざるべからず、且又教會に於て殊に牧師の動作を妨ぐる者は外觀の美にして實なき信者なりとす、初めより信徒の數少き時は牧師常に之々励まされど其の多からんことに意を注げども其の數已に多く、外觀美にして格別に非難すべき所無きの信徒の頭顱を列するあらば自ら此の外觀の美に欺かれて徒に安心

し、以て怠慢に流れ、遂に教會の實力なきに至らざらんや、例へば玆に一大金塊あり、所有主は其の塊の大なるを見て得々として曰はく「我に此の大金塊あり、我の産大なり」と、然れども分拆の結果金分少くして雜物混し居りたらんには彼が其の産大なりとしたるは唯此れ夢中の牡丹餅たりしなり、教會中の不純なる信徒恰も此の金塊の如くならざらんや、あゝ、教會中の不信徒又は罪を犯す信徒は寧ろ初めより無きに如かず、彼等の不良なるは牧師の為に大患なり、牧師を失望せしむるものなり、牧師の進路を妨ぐるものなり、若し鴉のあるあらざれば権兵衛の種實らざることあらんや、牧師の播種は教外の敵に害せらるゝもの少くして教内の鴉に害さるゝものなり、

明治十七年中佛國と清國と一葛藤を生じ、佛國は東洋艦隊のクルール<sup>クルール</sup>提督に命じ、清國の福州を破り、忽ち兵を上陸せしめ、其の勢初め脱兎の如くなりき、然るに其の終局や、佛國の処為極めて曖昧にして後には処女の如く泣寝入りとなり、佛國の外交は大隈伯の軍艦を派遣してハワイを威したるよりも拙く、唯に佛國の体面を装ひしまでにて殆ど曖昧の間に終りたり、何故に佛國の外交は此の如く拙かりしや、他なし、當時佛國の内閣甚だ癡固ならず、動もすれば自己の運命危かりしが故に内顧

の憂、外征を專にする能はざりしによるなり、佛國は清國なる敵に高運を与へたり、若し佛國に此の憂なかりしならば清國に威を振ふこと今日に優る数等なりしならん、内顧の憂は振ひ得るの手腕を振はしめざるものなり。 卅二年七月十八日稿、

## 第百五十一章 孔子の自覺

保羅曰はく「彼等その心に銘<sup>しる</sup>されたる律法の工を表彰し其の良心之が證を為して其の思念たがひに或は貶めあるひは褒むることを為せり」(羅二。一五。)

又曰はく「噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はんものは誰ぞや」(羅七。廿四。)

世には惡意ありてにあらずして正直に自ら罪あるを知らざるものあり、然れば此の類の人が自ら罪なしといふは惡意あるにあらずといへども偶々自己の道念の低きを自白するものなり、且つ正直なりとは云へども決して不義なしとすべからず、パウロは羅馬人を責めて神を知らざるを不義と為し、「それ人の見ることを得ざる神の永能と其の神性とは造られたる物により創世より以來さとり得て明に見るべし是故に人と推譲るべきやうなし」(羅一。廿一)と云ひ、又アテンス人は若し知らずして禮拜せざる

神あらばよろしからずとし、アレオ山に祭壇を築きて「識らざる神」に捧げたり、然れば人正直に自ら罪なしと思ふも其の正直を以て識らざるを贖ふ能はず、若し少しく（深くといはず）自ら省る所あらば誰か神を認めざるものあらんや、誰か自己の罪を発見せざるものあらんや、人若し自ら罪なしと思はざる自己の道念如何と見よ、人は道念の進歩せるとき自己を見るの明を得るものなり、自己の徳高ければ高きに從ひて自己の罪を認むることは光明強大なれば強大なるに從ひて室中の塵埃の明に見ゆるが如し、ヨハネ曰はずや「もし罪なしと言はざる（仮令正直にもせよ）是れ自ら欺けるにて真理かれらにあるなし」（一。約八）、故に古より徳高き者は皆自ら神の前に——神の前ならずとも——罪ある認め居れり、ヨブ曰はく「人いかで神の前にたゞしかるべけんや」（九。一）又曰はく「其の（神）光明なものをか照さざらん、然れば誰か神の前に正義しかるべき」（廿五。三、四）。

孔子の聖なる誰か之を拒まん、固より其の道義の完全、円満ならざるものありしといへども一個の聖人となすに害なし、然れども彼は自己の徳の高きが故に自己の不義を自覺せり、彼が人生の不完全なるを覺るや、歎じて曰はく「甚哉吾衰也久矣吾不

復夢見周公」（述而篇）と、自己の一身を回顧するや「聞義不能徒不善不能改是吾憂也」（全上）、「加我數年五十以學易可以無大過矣」（全上）と云へり、以て如何に自己を見たるかを知らべし、彼は修徳の精神禁する能はず、幼より道に志し、數十年間刻苦、精勵して僅に自ら満足したるが如し、曰はく「吾十有五而志于學三十而立四十而不惑五十而知天命六十而耳順七十而從心所欲不踰矩」（為政篇）、視よ、孔子の聖なるすら常に過あるを憂へて之を除去、洗滌し、以て汲々として徳に進まんとを欲したりき、孔聖にして果して是の如しとせば凡庸の吾人如何にして平然我に罪なしといふを得んや、若し罪なしといはざる過るなり、然らざれば欺くなり、尚ほ然らざれば欺かれたるなり、自称の君子大に顧る所ありて可なり。 卅二年七月十九日稿、

## 第百五十二章 其の忍耐には感じました

基督曰はく「終まで忍ぶ者は救はるゝことを得ん」

（太廿四。十三）

世に辛抱強き人少しとせざれども基督教徒は確實なる希望を抱けるだけに殊に能く事に堪ふべし、保羅が「希望は羞を来らせ



ざるを知る」(羅五)といひけるもの信徒の真相を洩したるものといふべし、余が父のいまだ道に入りたまはざりし時云ひたまひしことあり、「聖書を繙きて彼方此方を見るに忍耐を教へたるもの少しとせず、忍耐を善用すれば固より善きことなれども善く用ゐずして害用したらんには其の害も太甚しからん、余は之が為に基督教を恐る」と、実にある人は懼るゝまでに基督教徒の忍耐を認むるなり、蓋し基督教徒は未来の幸福を望み、基督の愛を味ひ、神の摂理(無心の勢力にあらず)に依頼し、一身上に生じ来ることは皆神の御手よりせりと信するが故に、普通の人以上に見て堪へ得ざることをも堪へ得るなり。

余が友尚村典氏の兄尚村某氏余に語りて云へることあり、「明治の初め余は判事の職を奉じて任に愛知県にありしことあり、當時長崎附近浦上村の天主教徒の名古屋藩に御預けとなりしものあり、余は時々職務を以て彼等を拘留せる獄を巡視したることあり、又時々法庭に召喚して其の信仰を止めよと説きたることあり、余は屢々彼等の強情なるに立腹して一令の下に彼等を鞭撻せしめ、若し信仰を止むべしと約ふ者あれば余は得々として我が職務を尽くしたる如く思ひて喜びしが鞭撻にも尚は屈せずして約はざる者は約ひし者の為に甚く憂ふるものゝ如く、或

は之を戒め、或は之を勵まし、時としては人を懼れて御天主様に背き、未来の救を何とするかなど、叱責するものもあり、其の口上の憎らしきが為に一層強く鞭撻せしめたることあり、今より思へば彼等は實に善き信仰を有したるものにてありき、初めは暴力を以て其の信念を破らんとせしが到底暴力は功なしと認めたれば後には長き苦痛に堪へざらしめて改悛せしめんと獄吏に命じて其の待遇を苛刻にし、衣服、食物を粗末にし、障子破れて寒風吹入るゝも顧みず、畳破れて床板顯るゝも敢て修めず、以て苦痛を感じしめんとせり、一日余が巡視したる時婦女子の一组は其の寒風と破畳とを余に訴へて修繕せられんことを乞ひしが男子は之を制して雨露をさへ凌ぐを得ば十分なりといひ、余は飽くまでも負惜みの強き奴かなと思ひしが是も又信仰より出づる忍耐にてありしなり、今より思へば打ち擲きて偽り誓はしめんよりは其の返返し遣りたる方よかりしものを」と、あゝ、彼等は天主教徒なり、吾人が盲従、迷信と罵る天主教徒なり、福音書一卷、書信一篇を読みたることなき天主教徒なり、十数代以前の祖先は知らず、彼等は今日の吾人の如く安息日毎に礼拝せざりし、又養はれざりし天主教徒なり、斯く考へ来らば吾人は果して如何、吾人は「信仰に知識を加へ」たる信徒な

り、座右に聖巻を置きて公然読唱する信徒なり、安息日毎に礼拝し、又養はるゝ信徒なり、然るに少しく一家に小風波を生ずれば、少しく他より誹謗せらるれば、長官の眼光少しく変ずれば、社會よりの迫害少しく一身に加はれば忽ち躓き、昨日までの「兄弟」は今日悠々たる行路の人の如くなるものに比して其の相違天壤も啻ならざるなり、彼等は「最も愈れる復生を得べき爲に酷刑<sup>め</sup>られて免さるゝことを欲まざりき」(来十一)、吾人は如何、「惡を争ひ拒ぎて未だ血を流すに至らず」(来十二)、彼等は「終まで忍びて救」を望み、吾人は「教の爲に患難あるひは迫めらるゝことの起る時は忽ち道に躓く者」(太十三)たらんとす、鑑みざるべからず、戒めざるべからず。 卅二年七月廿二日稿、

## 第百五十三章 主の十字架は苦痛の緩和剂

基督曰はく「爾曹散りて各人其の属する所に往きたゞ我を一人のこさん然れど我ひとりをるにあらず父我と偕に在るなりわれ此の事を爾曹に語りしは爾曹をして我に在りて平安を得させんが爲なり爾曹世に在りて患難を受けん然れど懼るゝ勿れ我すでに世に勝てり」(約十六、卅三)。

詩に曰はく「神はわれらの避所また力なりなやめる時のいと近き助なり」(四十六)。

基督を信する時は基督と一致するなり、基督の十字架刑の吾人の救拯となるは此の一致あるが故なり、吾人の徳の次第に進步するは此の一致あるが故なり、吾人の罪に勝ちて義を行ふの力は此の一致より来るなり、吾人が患難に堪へ得るは其の患難を一人にて荷ふにあらず、基督と一致せるが故に基督と共に分担せる「が故」によるなり、然れば基督を信じて一致する時はよく苦痛を忍び得ること前章に於る天主教徒の如くなるを得べし、實に信仰は力なるかな、

西國教會の創立せられたる頃広島県の人にて石井勘太郎といふ人あり、巡査を勤めて西南役にも出でたることありとて身体も強健なるが如く見えたり、屢々教會に入入して遂に信仰を起し、明治十一年七月十四日バプテスマを領して入會せり、性穩和にして一ト通りの教育もあり、土地柄の然らしむる所か辨舌も悪からず、後、伝道者たらん志願ありて神学校に通学することゝなりしが不幸にも久しからずして突然咯血し、直に築地病院に「ドクトル」フョールズの診察を受けしに純然たる肺病なりとのことにそれより同院に入りて治療を受けしが病勢に進退こ

そあれ、次第に衰弱しゆけるを以て遂に所澤に住せる伯父石井九郎氏に引取られて彼の地に移りき（両国教會の帳簿にも余の日記にも所澤となくして多摩郡前澤村とあり考ふべし）、其の後東京に出でたること二回十四年の春上京したる時の如き少しも病ある人の如くは見えず、歸りて後は音信もなく或は故郷にでも歸りしものかと思ひ居たるに四月廿九日午後四時（両国教會の帳簿には三月廿九日とあれども九郎氏が余の家に來りしは五月八日にして「去月廿九日」と云ひたれば四月なるべし、三月は余の書損ならん）に氏の家にて死したる由九郎氏五月八日に余が家に訪ひ來りて語りき、氏は未だ教に入りて長からず、又養はるゝ道も少かりしが其の篤信には余輩の感じ居る所なり、東京府病院にありては自己の看護婦を説きて信者となし、此の婦人は後日本橋教會に属し居りたり、九郎氏の家に引取られてよりは氏を説きて信者となしたり、九郎氏の語る所によれば死する日の午前略血の甚しきが為に呼吸するを得ず、苦痛甚しく七転八倒、一時は精神も錯亂したるものと見え「伯父さん、殺してくれ」とまでいひたり、氏は靜に其の心得ちがひを論し、基督の十字架を思はゞ何とて恐れざることあらんや、爾は既に信仰によりて世に勝ちたるものなり」と云ひきかせたるに苦

痛の間に點頭きて「如何にも然うだ」といひしが其の後によく忍びて苦痛の様を見せず、稍々略血も止まりし午後三時頃如何にも喜はしげに

花景色あゆむ間もなく天国の

救主の側にすゝむ嬉しさ

と口吟し、四時を以て永逝せりといふ、其の句調は拙しいへども其の信仰は此の句によりて見るべし、氏は九郎氏の一言にて発明する所ありしもの氏の信仰によりて世に勝ちしを證するに餘あるべし、

因にいふ、石井九郎氏のことにつきて一言せん、氏は前より所澤に住し、勘太郎氏が引取らるゝ時余輩は初めて氏のことを知りたり、氏は勘太郎氏より道を聞きたる由にてある日上京し、ダビットソン教師を訪ひ、其の信仰を告白し、直に婦村すべければとてダ氏の家にて洗礼を受けて歸れり、是れ明治十二年二月廿八日のことにして両国教會の長老すら其の面を知らずして過ぎたり、然るに氏は別段に養はるゝ道を得ざりしも信ずる所堅かりしと見え、所澤某寺の禪僧は氏より基督教をきゝて甚く驚き、ある人に語りて曰ふ「余は基督教を研究したることなけれども石井氏よりきゝて確に其の教の高

尚なるものなるを知れり、若し石井氏が格別に知識あり、才能ある人ならば氏の説く所、其の知識、才能より出づるものとすべきなれども氏にして彼の説を為すを見れば此れ基督教の力たらずんばあらず」と、此の言によりて見れば氏は善く我が教を理解したりと見えたり、 卅二年七月廿二日稿、

## 第百五十四章 悟道と信仰

基督、信徒の為に祈りて曰はく「我爾に彼等を世より取りたまへと祈らず惟かれらを守りて惡に陥らす勿れと祈る」

(約十七、  
十五、)

世人は佛教を以て厭世教と為し、基督教を以て樂天教と為せり、固より佛教に樂天の分子なきにあらず、基督教に厭世の分子なきにあらずといへども其の大體の主義に至りては世人の言當らざるにあらず、近頃佛教徒は厭世主義と認められて活動世界より放逐せられんことを恐れ、佛教中の樂天的分子を担出し、太甚しきに至りては佛教の主義に反するをも厭はず、其の身宗教家、即ち出家遁世の身にあるを忘れて、人爵を羨望し、伯爵に叙せられしを法門の恥辱となさざるのみならず、尚ほ侯爵たらんとして運動せりとさへ聞けり、此の如きは活動にあらず、樂

天にあらず、大々的俗化にして福翁が「僧は俗より出でゝ俗よりも俗なり」と評したる實相を見るべきなり、實に彼等の大部分は俗化して今や佛教の精神は彼等の中に見る能はざるの悲境に沈淪せり、彼らの中には此の如き宗派ありといへども此は是れ佛教中の一弊にして佛教の主義にあらず、佛教は何れの点より見るも遁世にして決して現世に效用あるべきものにあらず、よし教歩を譲りて效用ありとするも彼等は無心の勢力に服する運命なりと諦むるものなるが故に一寸前は暗黒にして毫末も希望あることなし、之に反して基督教は有心の神に服する摂理なりと信するが故に死後は光明にして充溢せる希望を抱けるなり、余は此のことにつきて喜の首第十六卷第二百三十五號、即ち明治三十年十月一日の紙上の左の如く記したることあり、足らぬ心地はすれども其の儘に騰写すべし(但し少しく補ふ所あり)、「偕人間といふものは此の苦悩のある世の中に住つて居ますから如何なる人でも苦悩を免るゝものはありません、比べて見れば彼の人と此の人と同じやうではなく、格別に多く苦しむ人もあれば格別に少い人もあります、が、まるで無いといふ人は一人もありません、ある人は金が澤山にあつたら苦悩はあるまいと思ひますが是は金の無い時の考で金ができれば矢張相當の苦

悩があります、疑ふ人があつたら金満家に聞いて御覧なさい、種類こそ違ひますが苦悩は同じことです、またある人が学問があつたら苦悩は無い、ある人は位地があつたらと思ひますが矢張りいません、人間と苦悩とはくッついたものですから人間であつたら金満家でも学者でも國王でも決して変りはありません、實に人間は苦勞、心配、患難、不幸の器でございます、それから釈迦は老病苦死を見て之を解脱しやうといふ発心をして妻子眷族をも棄つるに至りました、佛教で此の世を浮世といひ、火宅といひ、又娑婆などいふは皆人生に苦悩があるからです、偕此のやうに世界は苦悩の所だとすれば私共はどうしたら善いでしょうか、これは人生にとつて適切な問題で決して対岸の火災視する訳には行きません、此ういふ適切な問題ですから随分古昔から聖賢は深く考へて秦の始皇は徐福に命じて不老不死の薬を探させ、漢の武帝は神丹を煉らうとしたのです、然し世界と苦悩とは不可分の關係があるのですから此の世界のものである以上は免るゝことはできません、然らば「しかたが無い」として断念めませうか、然様、若し真に断念めることができれば一種の薬であつて善いであらう、佛教で娑婆といふのは人間が三毒諸煩惱を忍受しなければならんことを教へるので忍んで受くる、

即ち「しかたが無い」と断念めるのです、然し断念めるといふについて考ふべきことがあります、断念めるはたとへば茲に病氣になつて死ぬ人があるとしませう、其の人は生者必滅といふから生れでた以上は是非とも一度は死なねばならん、是し自然の勢であつて如何ともすることはできないから其の勢に服して死にませう、生きて居るのを事實と思ふから死ぬのが好ましくないが生きて居ると思ふのは迷妄だ、夢だ、生きて居ると思ふのが迷妄なら今正覺に入るのだ、夢だから今覺めるのだ、と悟つて安心をするのです、言を換へていふなら無心の勢力に支配されて居るから「しかたが無い」、泣いても吠えても死ぬ時は死ぬのだ、是れが佛教の悟道といふので老病死苦に対して此の念を用ゐるのです、老病死苦に対して此う觀ずるのですから愛しい、可愛い、悲しい、悪い、などに対しても同じことで愛しいも迷妄、悲しいも夢、無明の中に漂ふて居るから法界に出ることができん、一度法界に出るならかゝる妄執を去るから真如に達するといふのです、悟道を聞くといふと立派に聞えるので一寸人を瞞着することができますが、然し分り善くいふなら感覺を無くするのです、何故なら人といふものは感覺があるのて愛しい、憎いがあるのです、若し愛しい、憎いが無いといふ

なら感覺を無くしたのでなければなりません、此の通り感覺を無くしてしまふなら耳目鼻口が無いと同じことですから老も病も死も苦も感ぜられんやうになる筈です、老病死苦について考へると此の無感覺は大層便利のやうですが其の代りに忠、孝、仁、義なども無くなるのです、御覽なさい、一面からは至極便利のやうだけれども一面から見ると悪い方面を感じないから善い方面をも同時に感じなくなるのです、ある人は其の様な悟道は真正のものでない、忠も孝もあるものでなければいかんといひませう、鳥尾、三浦、山岡などの悟道は多分此の説たらうと見えませんが是れは鳥尾教といふなり兎に角佛教の悟道なりどうしても前のやうに考へなければなりません、唐辛子の辛味を感じない舌なら砂糖の甘味も感じない筈です、打たれるのが痛くない身体なら撞いても善い心地はしないのです、若し妻子を愛する愛がなくなるなら國を愛する愛は何方にありませうか、人に蹴倒されて残念に思ふ心がないなら人の親切を謝する心も、人の善行を賞する心も無い筈です、夫故佛教のやうに悟るなら惡を為さん通り善をも為さん、善でも義でも択んで為さうといふ心があれば無我無心の境に達したのでなく、また妄執の中に居るのです、此のやうに忠孝仁義も共に無くなりますなら佛教として

は善いものか知りませんが人を人間と見て考へてはトント価値の無いものです、私共は苦悩を感じたくないが去りとて之を感じなくなれば動く死人と同様ですから其の様な悟道は欲しくありません、私共は十分に鋭敏な感覺を以て居て老病死苦に恐れず、負けず、其の上に忠でも孝でも愛でも何方までも発達させて人間らしく働きたいのです、言を換へていふなら鋭く忠愛の心を持つて居て、否、實行してそれで苦悩を「為」<sup>何</sup>とも思はんやうにしたいのです、私共が然うならなければ人間の用を為しませんから基督の教へた所は全く佛教と其の趣を異にして居ます、聖書の中に信徒を指した言を見ると其のことは明白です、一、二の例を挙げませう、「教會は彼の身體なり」(弗一三)、「其の婦」(黙十九。七)、「わが妹、わが新婦」(雅四。一二)、「聘定せられたる潔き女」(哥後十。二)、「神の室」(哥前三。二)、「(弗二。二)」、「神の田」(哥前二。九)、「活ける神の城」(二。五)、「(黙二二)」、「わが妹、わが佳耦、わが鴿、わが完きもの」(雅五。二)、「諸族」(弗三。一)、「神の羊又は羔」(約廿一。十)、「羊牢」(約十。一六)、「羊の群」(彼前五。二)、「園」(雅四。十二)、「の如し、視たまへ、一個でも無感覺、不生産的、非愛愛的、無常的、厭世的、遁世的はありません、已に基

督の教は佛教と人生觀を全く異にして居ますから悲哀的の分子は少く、「善へ、樂しめ」といふことが目を突く程澤山あるのです、基督は「人爾曹を訴<sup>の</sup>、誅<sup>り</sup>りまた迫め、偽りて各様の悪言をいはん、其の時は爾曹福なり、喜び樂しめ」(太五。十)と教へ、パウロは「第<sup>三</sup>これのみならず患難にも欣喜をなせり」(羅五)といひました、然らば基督教徒は一種特別の人情を有つて居て、人の痛いと感ずることを快いと感じ、人の悲しいことが面白いのでせうか、否、基督教徒だとして魔法つかひではなし、又人情が別といふでもなし、痛いことは矢張痛い、首斬られれば矢張死にます、然し茲に信者には人の知らない一種の力があるので、即ち神を信じて——神を有心の神(無心の勢力ではありません)と信じ、神の全能、全仁で人を愛すると信じ、神は此の全能、全仁をもつて世を支配したまふから善いも悪いも神の聖旨の行はるゝこととなり、嬉しいも悲しいも此の恩恵ある神の摂理(止むを得ざる必然の道理ではありません)なりと信じ、尚ほ其の上に信仰によつて基督に一致したから罪を赦されて永生を与へられ、天を我が物とする一大希望を抱いて居り、「わが生けるは基督の爲また死ぬるも我が益なり」(腓一。一)と思ふて神に服することができませう、一寸考へると「無心の勢力」に

服するも、「神の摂理」に服するも似て居るやうですが服する者の身にとつては大分ちがひます、「しかたが無いとあきらめる」のは消極的で「それッきり」です、然し神の摂理に服するのは神に服するのだから十分に希望をもつことができます、パウロが「わが心常に剛毅<sup>つ</sup>し」(哥後五。六)といったのも此かる希望をもつたからです、分りよい為に譬喩をあげて見ませう、世の中に地震、火事、洪水、海嘯、病、老、死、苦などは人が恐ろしいもの、怖いものとまうします、たしかに然うにちがひありません、然しお考へなさい、其の恐ろしいのは地震其の物が恐ろしいのではなくて其の害が恐ろしいのです、若し焼けるだらうといふ家もなく、其の身に害の及ばん空中にでもあつて大火事を見て居たら怖くないどころか却つて面白く思ふかも知れません、御覽なさい、地震、火事は其の物が恐ろしいのではなくて其の害が怖いのです、是と同じ道理で人は老病死苦が恐ろしいと思ひますが矢張恐ろしいといふのは其れから生ずる結果が恐ろしいのです、次第に人が老いて往くなら身体力が減じる、死に近づく、病があれば苦しい、或は死ぬかも知れん、死ぬなら妻子眷族と団欒して樂しむことができない、計画した事業も途中で止めることになる、苦しいことがあれば長く泣かなければ

ばならん、是れが恐ろしいのです、然し基督の約束を信じて常に其の約束に慰められ、其の恩寵に励まされて居れば其の喜樂の為に老病死苦其の他の患難も取消されてしまひます、私は幼少の頃父に連れられて江戸に往くとなつた時出立の前夜は少しも眠くなくて却つて寝られんのを困りました、江戸に往く嬉しさに眠いのを思はなんたのです、神の貴い御約束を深く信じ、神の御旨に善く任せる時は世の苦惱は大に輕められて殆ど感じないので、人が歌舞音曲で楽しむのは何ですか、其の楽しみで暫く他の苦勞を忘れるのです、神を信ずるものは神の恩と愛とを樂しむから世の苦惱を感じないので、然し然ういふと老病苦はそれで善いとしても死んだらどうするか、死ぬなら神の恩も愛も約束も感ずることはできないだらうといふ人があるか知りませんが其所が基督教の力です、基督教では死後に永遠の生命のあることを教へます、唯永生があるのみでなく其の永生は極めて幸福なもので、天の最小の幸福でも世の最大の幸福よりも優ることを教へてあります、基督がバプテスマのヨハネのことについて「天國の最と小さきものも彼よりは大なるなり」(太十一)とお教へなされたことから分りませう、それゆゑ基督の信者であつて死を恐れる人はありません、善い信者の歌ふた

言をおきなさい、「神われを受けたまふべければ我が靈魂をあがなひて陰府のちからより脱かれしめたまはん」(詩四十九、十五)、「悪者は其の惡のうちに亡ぼされ義者は其の死ぬる時にも望あり」(箴十四)、「死ぬる日は生るゝ日に愈る」(傳七)、「死よ爾の刺は安にありや陰府よ爾の勝は安に在りや」(哥前十五、五十五)、此かる信仰を有つことができますから信者の死は寂滅でなく、涅槃でなく、生命に入る門です、ステパノが殺さるゝ時「主耶穌よわが靈魂を納けたまへ」(徒七、五十九)と呼んで從容迫らず、再び跪いて「主よ此の罪を彼等に負はしむる勿れ」と祈りながら死んだのは天の希望に満たされて居たからです、佛教と基督教と其の安心の趣に相違あることを知る為に述べておきたいことがあります、此のことは恥か記の中にかいたやうな気がするもので探たが見えないのでかきます、或は重復して居るかも知れませんが、明治十年鹿兒島の亂の始まる前に東京から巡查を辭して鹿兒島に歸つた若者が数人ありました、然るに私学校の生徒等は彼等が辭職歸県した理由の明白でなかつた所から大久保内務卿の内命で西郷先生を刺しに來たのだと遂に捕へて牢に入れ、實を吐けとひどく苛責しました、

凡て秘密に属したれば其の真相は知るによしなしといへど



も西郷、桐野、篠原等に反意ありしことは後に明白になりたり、其の年六月頃獨逸國より西郷等の注文なりとて小銃一萬挺を船載し来りし事實あり、而して其の注文の時日は西南役開始の前にありたり、是の如くなれば大久保侯の慧眼疾く之を看破し、先んずれば之を制す、内命とまでにはあらざるも以心伝的に帰國せしめたるも知るべからず、此の若者の中には中原尚雄？、樋脇盛岡、末広直方などいふ人がありました、此の人々は何程苛責せられても白状をしないので私学校党は益々怒つて残酷極まることをしました、現に樋脇氏は今も右の手が曲つたぎり自由がきくません、其の時かねて佛法——殊に浄土真宗を嫌つて居る若者は其の頃鹿兒島に居合はせた真宗の僧侶大洲鉄然をも捕へて同じく牢に入れておきましたが、毎日責める、どうしても白状しないので乱暴にも殺してしまはうと決心しました、若い人たちが最早今夜は殺されるだらうと覚悟をしたのですがそれなら何か有難い法門にても聞かんものと同監の大洲氏に「何か安心のできるやうなことにても聞かせてください」と請ひました、すると大洲氏は力なげに「斯うなつてはもう佛法はしやうがありません」と答へたので皆大に失望したさうです、彼の人々が幸に助かつて牢を出ると

き大洲氏も大に前言を悔いたと見えて「どうぞ彼のことは他言しないでください」といつて皆承知したさうですが此の若者の中に後、基督信徒になつて佛法の力のないのを知つて教會の人に話してそれで私の耳にもはいつたのです、大洲氏が「しやうがありません」といつたのは佛教に安心する道が無いといつたのではなく、自分だけは安心したとしても斯ういふ場合に一時間や、二時間佛教的安心法——即ち悟道を語つたからとて、修養の功を要するものは呑込めやう筈がない、然うかといつて大洲氏は真宗であつても阿彌陀様に救はれるといふこと、極楽往生といふことは信じないでせう、それゆゑ止むを得ず「しやうがない」といひました、然し是は大洲氏が悪いのではない、佛教が然ういう教義なのです、これで佛教の悟道のトント頼みにならんことが分りませう、

余は大洲氏のことを聞きて眞實ならんと信ず、然し余が直接に聞きたることにあらざれば誰にか問ひて確めおかんと思ひ居しに幸に昨日日本県知事末弘氏を訪ふ用事ありたれば之を質したるに同氏は大洲氏と監を異にして収容せられ時々面くらめは見たれども談話したることもなく、今、御話のやうなことは曾て中間の者よりも聞きたることなかりき

といひぬ

然ればよし大洲氏の口から出たことがなかつたとしてもあの場合にあの請があればあの答より外にないのが佛教です、却つて一言で返答して真に安心させるやうなことがあつたら佛教の真意には反いたものです、之に反して佐久間嘉七氏が實驗したことがあるので挙げませう、佐久間氏は維新前に芝神明前で岡田屋といふ立派な書店でしたが若い時から慶應義塾にはいつて英書を読み、昔の町人としては学者です、然し此の学問が身を誤まる本になつて商売がいやになり、学者で身を立てやうと維新後に家も地面も売つて其の金で洋行するとツて長崎に往きました、すると朋友が氏の為に得策でないと思つて厳しく之を止めたのです、氏も朋友の忠告を納れて洋行は止めと決心して東京に帰るつもりで船に乗りました、場所も時もきまませんでしたがある日洋中で何事か船中に大騒動が始まりました、何かと思つて甲板に出て尋ねやうとすると忽ち部屋のは外から締められたので戸を叩きながら大声をあげて其の理由を尋ねると大変です、船の中で今、火事が始まつたので消防に尽力中、客の甲板に出ることは許さんので暫く待てとのことでした、佐久間氏は斯うきいたから弥々たまりません、ますく強く戸を叩いて、

続統恥か記 第十巻

火事なら尚々早く出してもらはなければならんと、一生懸命、大もがきにもがいて独り大騒動をやりました、其の時一人相乗の外国人が居たのですが乗船の時から日夜面をあはせて談話もして居た人です、其の外人は佐久間氏の餘りに騒ぐのを見て、近いて云ひました、「船火事が始まつたら素人が出ても用には立ちません、船火事は陸とちがつて通ることもできませんから黙して成行きを待つのみです、甚しくなれば火に焼けるか、水に溺れるか二者の一、どうせ生命は危いものと見なければなりません、唯其の成行きを神の御手にお任せなさい、然うすれば安心がなりませう」と、佐久間氏は其の語といひ、態度といひ、餘り不思議なので自分の迷ふて居るのは思はずに、此の人は精神がどうかして居るのだらうと思つたさうです、然し其の中に火事は本物にならずに済んで一同大安心をしたのですが佐久間氏は騒動のしまつた後に其の外国人に仔細を問ひました、するとこの外国人は宣教師であつて深く基督を信ずる人、死の危険に遭遇した時十分基督に依頼してあるから未来の生命を望んで安心して居たといふことをききました、佐久間氏は宣教師の談話をきき、其の平静を見て大に感じ、其の後露月町の教會で道を研究して信者になりました、

其の宣教師の名を聞き洩したると佐久間氏が少しく脳に異状ありて時々酒に溺れて全く不信者の如くなるは大に遺憾とする所なり、

此の二個の實例を考へたら佛教の悟道と基督教の信仰と全く違ふことが御分りになりませう、統統恥か記第二章、第百十五章及び第百廿三章を御覧になると一層明白になりませう、

明治四年の春なりしが余は父と共に上京して浜町の藩邸にあり、慰みに鶏二三羽を飼ひしにある時雛十数羽を孵化せしめたるに牝鶏は日々餌をひろひて雛に与へしがある日一羽の鳶俄に空中より下し来りて其の雛をつかまんとせり、牝鶏は不思議の声を出了すと思へば其の近傍に散在したりし雛は四方より一斉に牝鶏の翼下に潜み、一羽も見ざるに至り、平生牝鶏を虐待して困りし牡鶏も牝鶏の傍に立ちて鳶に對ひ、鳶は失望して何方にか飛びゆきて雛は皆無事なるを得たり、基督は信徒の爲に恰も雛に於る牝鶏の如し、常に危険、災難、困難、心痛を守りたまへり、若し信仰によりて其の御翼の下にあらば吾人は真に安心なるを得べし、基督はエルサレムの人々の其の保護に依頼せざりし時「噫、エルサレムよ、エルサレムよ、……母鶏の雛を翼の下に集むるが如く我爾の赤子を集めんとせしこと幾次ぞ

や、然れと爾曹は好まざりき」(太廿三)と慷慨の涙を潑ぎたまへり、諸士、御翼の下にある安心を得るに意なきや否。 卅二年七月廿五日稿、

## 第百五十五章 フルベッキ博士の謙徳

箴言に曰はく「驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきだつ」(十六、十八)。

詩に曰はく「謙る者は國をつぎ又平安のゆたかなるを樂しまん」(卅七、十一)。

謙を美德とせざるものなく、謙に利あるを知らざるものなし、然れども謙の美なるは外觀的にあらず、謙の利は世俗的にあらざるが故に外觀を好める俗物に於ては屢々驕傲を以て真正の大となせるが如し、ヨハネは駱駄の毛衣を着し、革帯をしめ、蝗と野蜜とを食物とせり、俗物は之を見て大ならずとし、鬼に憑かれたる者となしたり、然れども「智慧は智慧の子に義とせらる、神は彼を以て大なりとし、」婦の生みたる者の中いまだバテスマのヨハネより大なる者は起らざりき」と教へたまへり、然れば誇るべきは富貴、位階にあらずして自治、自制にあり、若し人真に謙るものなりしならば識者は必ず其の美を見、謙者

余が師フルベッキ先生は我が國に渡來せる年代に於て、其の學識に於て、我が政府に重用せられたるに於て、其の年齡に於て、宣教師の無二の利器たる和語に於て先輩たりき、然れども先生は天性の美質に基督の感化を以てしたれば頗る謙讓にして毫末も先輩ぶりし言動を見しことなし、余が常に敬服せる一例あり、余は明治十一、二年の頃先生より説教學を学びしことありしが本文、序論、辨論、結論を先生の前に述べて其の評論を待てり、先生の銳利なる批評眼は時として余が説教の全部を解剖し、粉名微塵に破壊して全く旧形を存せざることもあり、面白きことあり、恥かしきことあり、余の益を得たること少しとせず、然るに余が卒業の後、按手礼を受けて聖職につき、先生と共に説教會、或は演説會に臨むに至るや、毫も余が所論の組織を評したることなく、又忠告さへ為したることなし、余は始めて先生と共に演壇に立ちたる時幾分か恐るゝ所あり、時としては先生より教授を受けたる説話を其の俚に引用することあり、斯かる場合には弥々窮して、後に小言をきくこともあらんかと思ひしに然らず、後には先生の批評なきを知りて憚らず所懐を述ぶるを得たり、是れ先生が後進を待つに同輩を以てし、些も先生風

続続恥か記 第十卷

り、茶を持来るまで催促せず、床を敷かんといふまで一言も命せず、一度も手を打たず、敢て他の食物も命せず、翌朝もかくして勘定をすませ、日本人相当の茶代を与へ、例の一円も与へ、又荷物も下婢を勞せず、然様ならばと言して去りたり、然う思ふて見たる故か主人も番頭も手代も下婢も餘程驚きたるが如く、たゞ「御粗末様」を異口同音に繰返し居たると、視よ是れ固より為にする所ありてなりといへども是れ先生にとりては平生なりしなり、余は外國宣教師中につまらぬ人物、時としては惡物をも見ることあれど先生の如く本邦人中に曾て見たることなき人物を見ることあり、是れ天性の美のみにあらずして基督の感化を受けたるものならざるを得ず、若し天性の美とのみいばど我が國にも此の如き人あるべき筈なり、独り基督教國にあるもの思はざるべからず。 卅二年七月廿九日稿、

## 第百五十六章 日本人だと思ったんだ

神ヨハネによりて曰はく「渴く者には価なしに生命の水の源にて飲むことを許さん」(黙廿一、六)人<sup>は</sup>は自ら因業なるものなり、旋毛<sup>せんもう</sup>曲<sup>まが</sup>りのものなり、右せよといへば左し、左せよといへば右して兎角柔順<sup>すなは</sup>なるものにあらず、

それ神の救拯は価なしに受くべきものにして善行、勞力の報酬にあらず、信するものに賜はる神の賜なり、ある人いふ「若し基督の救拯を五円払ふ者に賜ふといはゞロンドン府の人々皆悉く之を得べし」と、然し人は因業にして旋毛曲りなるが故に価なしと聞くや、無代価に善き物なしと為して救拯を輕んずるなり、人は餘りに善しと見る時「価なし」と比較し來りて之を斥く、然らば神は何故に相当の代価を收めてすべての人を救はんとは爲したまはざるや、理由なくんばあらず、若し代価ありとすれば何程高価なるも既に「有価物件」にして神の賜たる性質に反すべし、又有価物件たりしならば全く金なきもの如何にして救はるべきや、無代は有金、無金の別なく凡て救はるゝを得べし、有価なれば貧人に対して得ざるの責任は神にありとなるべし、然れども無代なるが故に得ざる者ある時は其の責任得ざる者にあるべし、玆に於てか、神は無代をよしとしたまひしなり、吾人が救拯を維持し、信仰の生涯を為さんとせば勞力を要し、忍耐を要し、又知識をも要すべしといへども先づ其の救拯に入るには何等要する所あらざるなり、然れども無代価の救拯を以て餘り善過ぎると為し、自己の豫期に反するを以て却つて其の救道を斥くるなり、人は因業なるかな、旋毛曲りなるかな、

安政六年に我が國に來り、三十九年間我が國に伝道したるフルベッキ教師は「舌の賜」を得たる人にして六七歳の時已に蘭の二語に通じ、八歳の時より英語を学び、長じて佛拉丁、希臘、希伯來に通じ、我が國に來りてはよく我が語を解し、凡て八ヶ國の語に通じたり、彼のサー、ウキリアム、ジョーンズが廿八ヶ國の語に通じたりといふに比すれば固より遜色なきにあらずといへども天稟の性ありしことは疑ふべからず、氏は曾て余に語りていふ、「近頃（明治廿二年より三年にかけての時なり）米國に歸りし時和蘭人の殖民したる地方に往きたることあり、當時日本伝道のことを演説してと乞はれしが本國を出でゝ久しきことゝて蘭語には忘れたるもの多し、然し移住民のこととなれば英語の幾分を解する者もありたれば若し蘭語を忘れたる時は英語を挿入してよくばとの條件を附して承諾したることあり、歸りには歐洲を過ぎて生國和蘭に至りしが彼の地にては英語挿入は聴聞人の為に不便なり、よつて一策を案し、演説の前日蘭語のリードル一冊を購ひ、一回通読を為して、而して翌日首尾善く演説するを得たりと、視よ其の齡十八歳にして本國を去りて四十年、時として本國語を用ゐたることありたりとするも四十年、よし古郷忘し難き本國語なりといへども之を用ゐ

ざりしこと四十年なるに一冊の読本にてよく準備し得たるもの「方言の賜」あるにあらざれば決して為し得ざる所なり、海外にあること十數年にして帰朝後、當分和語の演説を為し得ざるものに比して其の相違如何、氏は已に是の如き「賜」ありしが故に廿九歳より学びし和語は本邦人と毫も異なる所無きまでに進歩したりき、余輩が氏を聞きて少しく異様に感じたるものありしは氏の和語に熟せざるにあらずして九州訛を存じたりしなり、面白き一話あり、余が同勞者松崎連氏余に語りて曰へり「フルベッキ博士の和語に巧なるはいふまでも無きことなるが余が京都宮にある時（十八、九年）博士とバラ教師と同地に來りしことあり、劇場を借りて演説會を開き、先にバラ氏演説したり、然るに氏は「タイサンよろしい和語なりしが地方の人々には珍らしく聞えたれば聴衆は意の通ずると通ぜざるとに拘らず、拍手、喝采して頗る満足せるが如く見えたり、氏の後は博士にして例の輕妙なる辨舌もて演説を始めたり、然るに奇なるは今まで拍手、喝采堂を動かす有様なりしものは全く止み、論旨の肯綮に中る時拍手する者あるのみ、余は論旨高尚に失して一般聴衆に理解せざるものかと思ひしが又然りにもあらざるが如し、玆に於て余は聴衆の中に入りて親しく其の狀況を探りしに理解

続統恥か記 第十卷

せられざりしにあらず、面白しと感ぜざりしにあらず、多数の人々は氏が鬚髯なき上に餘りに和語に巧なりしを以て氏を外国人なりとせず、九州辺の人、戯に雅馴を報告したるものなりとなりなしたるなりき、氏の日本化したるは豫想外にありし」と、あゝ、宇都宮人は外國人より巧なる和語を聞くべしとは期せざりしなり、外國人ならばタイサンよろしい和語を聞くを通例のことゝなしたり、然るに氏の言語外國人的にあらず、餘りに巧なりしが故に想ひしよりも善きに過きたり、是を以て彼の人々は誤り認めて本邦人と爲し、本邦人となしたるが故に敢て拍手、喝采せざりしなり、若し基督の救道多数人の豫期に投し、善行を以てせよと教へられたりしならば「イザ我善行を以て救はれてやらん」と思ふべきなれども「救拯は功によるにあらずして価なき恩寵によれり」といふを以て人多くは「餘りに善過ぎたり、価なきおまけの蜜相にはまゝ腐りしものあり」とて救拯を斥くるに至るなり。 卅二年七月卅一日稿、

続 統 恥 か 記 自 第百五十七章  
至 第百七十章 第十一卷

第百五十七章 教は嫌だが伊藤さんは善い

彼得曰はく「爾曹善を行ふを以て愚なる人の無知の言を止むるは神の旨なればなり」(前二、十五)

世に基督教を好まざる者は少からずといへども基督教徒の道德を好せざる者は少し、清國の一商賈自己の店頭（英文の宗教的小冊子を置きて来客の見るに任せたり、ある人其の故を問ひしに曰はく「余商売の取引を爲すに敵手の正邪を判知せざれば頗る危しと爲す、若し余が店に來りて此の小冊子を喜ぶ者は問はずして宗教家たるを知るべく、若し之を輕視する者なれば交はずして不正の人たるを知るべし」と、問ふ者重ねて「貴君は基督教徒なりや」と問へば彼答へていふ「否、余は信ぜず、是た一の商略のみ」と、問者呆然たりといふ、蓋し常識ある者は基督教道德の善良なるを知らざることなし、而して彼等の之を信ぜざるは何ぞや、自己の情慾を制して義に就くの決意を爲し得ざるのみ、之を思へば人類ほど薄弱なるものはあらざるな

り、伊藤々吉氏は久しく伊豆の三島に伝道せり、大成功ありたりとは云ふべからざるも成功ある伝道なりき、然れども彼の地三島神社の所在地として其の勢力なかくに強大にして我が教は概して人々の好まざるところなり、彼の地にして兎にも角にも多少の信徒——殊に有力なる人々の道を信するに至りしものは伊藤氏の力たらざるべからず、若し他の人にして彼の地に伝道したりしならば決して今日あること能はずと思へり、然れば土地の人々は知ると知らざるに拘らず伊藤氏を信することは頗る篤く、「教は嫌だが伊藤さんは善い」とは皆人の称ふるところなりき、何故に氏はかゝる信用を得たりしや、一の好例あり、明治十二年が西南より起りて大に我が國に虎列拉病の流行したる時にして三島町の如き最も其の慘なるものたり、甚しきに至りては巡査、又衛生員等さへ此の病に罹り、避病院は病者を以て満ち、医師は足らず、人足は恐れて出で來らず、時としては一家悉く病に臥し、死者あるも其の旨を報ずるものさへ無く、生



者、死者一室中に横りて数日を経ることすらありき、伊藤氏は此の状況を見て黙する能はず、アレキサントリアの古事を思ひしや否や知らざれども奮然として起ち、草鞋を穿ちて、市中を奔走し、病者ありと見れば之を訪ひて、警察署に報し、医薬なきものには之を投じ、死者ありて運搬する者あらざれば人を強ひて伴ひゆき、自ら片棒をかつぎ、以て火葬場に致したり、之を見聞する者誰か氏の動作に驚かざるものあらんや、之より氏の名声一時に高く、蓋し「伊藤さんは善い」の言此の頃より始まりしものなり、然れば土地の人々基督教を見ること蛇蝎の如くなりしといへども基督教徒の善行には閉口して一人も之を不可なりとせるものあらざりしなり、善は愚人の眼にも善良にして、善に反するものはあらざるなり。 三十二年八月十一日稿

## 第百五十八章 祈禱は釣の如し

保羅曰はく「断えず祈るべし」(撒前五。十七)。

断えず祈るは応答を得るの秘訣なり、吾人は神の必ず祈禱に応じたまふを知れども其の応じたまふ時期は吾人の知るべき限にあらざ、然れば若し吾人祈禱に応答を得んとせば唯断えず祈りて神の応じたまふ時を待たんのみ、若し神百回祈る時に応すべ

しと定めたまへりとせば九十九回にして止めたらんには如何にして応答を得べきや、吾人は神の意のある所を知る能はざるが故に唯断えず祈らんのみ、稀に祈禱して而して止め、又稀に祈禱して而して止め、我祈禱すれども応なしといふは応答なきこと其の当なれ、然れども屢々祈禱し、絶えず祈禱するものは屢々応ぜらるゝが故に祈禱の興味を覚えて弥々祈禱するに至らん、是れ「有てる者は予へられて尚餘あり」(太十三。一二)のものか、之に反して祈禱せざるものは応答なきが故に遂に祈禱なきに至らん、是れ「無有者は有てる物をも奪らるゝ」(上)の類なり、故に祈禱は恰も釣を垂るゝが如しといふべし、

余が性は性急なりしを以て釣を好まず、幼少の頃父上に従ひて狩野川に釣したることあり、時々は釣道具の珍しきが為に出かけたこともありしが待つこと能はず、蚊針も木瀬川に鮎子を釣らんとし、又烏賊釣をも為したることありき、然れどもいつも成功したることなく後には釣竿もて水中をひっかきまはして帰り来るを常とせり、余が家は城内の片端通といふ所にありて家の前には城濠あり、濠中には鯉は少かりしが鮎は多く、童子等御目付の巡視を竊みて土手の上より針に飯粒をつけて鮎を釣りに楽しめり、余も好みはせざれども時々にかけて二三寸位

八月十一日稿

## 第百五十九章 魯國守兵の交代

の鮒釣ることもありしが多くも釣れざれば度々もいえず、よく／＼暇ありし時辛抱して一二尾を得るのみ、余が十六七歳の頃なりしならん、余は不図鮒にて釣りに見んと思ひ、小さき鮒を堀りて釣を垂れて見しに驚くべし、針さへ下せば浮子は直にピク／＼、静にあぐれば一寸許の鮒つき居り、殆ど待つ用のなく、一時間も辛抱せば二三十尾を得ること難からず、余は面白くもあり、大発明を為したる心地して鮒をもて釣ることを他に知らせじと他を離れて一人釣るを常としたり、一日例の如く釣り居りしに例の如く浮子のピク／＼を見、例の如く引揚げんとせしにコハ如何に其の引く力甚しく、或は右に、或は左に、なかく／＼あぐる能はず、大尽力の後、漸くに引揚げ見れば八九寸もある大鮒にてありき、然れば余は之に力を得、希望を得、大に興味を得て後、屢々此の小鮒釣のみは廃せずして面白く、慶応初年の世の変遷までは之を為したり、釣を好む者は待つ間が面白しといへど余は待つを好まず、然し釣り得る時は面白くして止めざりき、祈祷する者此の釣と同じからざらんや、若し少しく祈りて応答なしとて止めたらんには何れの時応ぜ「さ」るべきや、一度針を下して魚を得ずとして止めたる人には魚を得る時なし、祈祷と釣とはよくも似たるものなるかな。 三十二年

基督曰はく「惑に入らぬやう目を醒しかつ祈れ」(太廿六。)  
此の聖言を親しく聴きたる彼得曰はく「謹慎、儆醒爾曹の敵なる惡魔吼ゆる獅子の如く徧行りて吞むべき者を尋ぬ」

故に保羅は曰く「此の盾をもて悉く惡者の火箭を滅すことを得ん」(弗十六。)

又曰はく「祈りて倦まざるべし」(全十。)

惡魔は狡猾なり、白晝公然來りて姦淫せよ、竊盜せよといふものにあらず、又惡魔の下に属して動く所の惡者亦同じ、彼は正義の假面を被り、外觀を美にして以て來る、彼は即ち「綿羊の姿にて爾曹に來れども内は殘狼なり」(太七。)、故に非常の用心あるにあらざれば其の攻撃を免るゝこと難し、

余が五歳の時、即ち安政元年は佛、英土三国同盟の軍大にクリミヤに魯軍と戦ひたる年なり、同年十月魯の戰艦(フレガット)伊豆下田に來る、蓋し英佛の戰艦に追はれたりしなり、フレガットといへば今の戰艦の如き勢力はあらざりしならんが千二

三百石積を以て親船と称したるものゝ目には山の如く映じ、  
 「オロシヤの黒船」といひて余が幼少の耳にも恐ろしきものと  
 聞えたり、余が藩にとは黒船御固めといひて多数の人々を出だ  
 し、下田町を固めたりしが十一月四日の朝、其の何故なるかは  
 知らざりしが彼は俄に漁舟数艘をやとひて彼の艦を沖合に引出  
 たさしめたり、当時<sup>マツ</sup>漁力を以て艦を進退せしむるものは甚だ少  
 く彼の艦の如きも港湾にありては出入ともに漁舟を備ひて引か  
 しむるを常としたり、我が御固めの人数は彼何を為さんとする  
 か、其の意を解せずして見て居りしに殆ど湾口に至りて再び投  
 錨したり、然るに其の日の午前九時頃一小震あり（駿河は大震  
 なりき）、人々驚きて家外に出でしが忽ち収りたれば皆家に入  
 りたる頃海水は漸々に減し始め、平日見えざる大小の岩石など  
 水上に現はれ、離魚の取残されたるもの岩間に潑刺たるあり、  
 老若珍しがりて魚を拾ひしに忽ち沖合に海水の山の如くなりて  
 来るあり、誰かは知らず「津波だアー！」と叫ぶや、飲茶の境  
 は一変して阿鼻叫喚の街となり、壮は老を助け、男は女を引き  
 て遁れしが水の来ること速くして引去られたるあり、溺死する  
 者数百人、押流されたる家数百戸あり、此の際魯国戦艦も押寄  
 せ来る水の勢に錨鎖を断たれ、艦は海岸に打当てられて碎壊こ

そせされ、漏水甚しく用ゐること能はざるに至れり、茲に於て  
 艦長ブーチャ「チ」<sup>キ</sup>は幕府に乞ひ、豆州戸田港に於て修繕せ  
 んことを許され、遂に戸田に回航することゝなれり、日は記え  
 ざりしか一日下田港を発して駿河湾に航したりしが重須<sup>おもす</sup>に來り  
 し頃風浪甚しく、漏水俄に増し來りて最早救ふべからず、近傍  
 の漁舟に助けられ、本艦を棄てゝ皆上陸し、沼津を経て戸田に  
 往きたり、本艦を沈めたれば再び幕府に乞ひ、遂に六艘の砲船  
 を造り、之に分乗して本國に帰りしといふ、抑々戸田村は二部  
 に別れ、一部は我が藩の領地にして、一部は天領たり、是を以  
 て我が藩も幕命によりて例の御警衛として人数を出したりし  
 が事々物々見るものゝ珍しきが為に彼等にとりては普通のこと  
 も我にとりては驚かれざるものもなく、又我が大平に慣れて武  
 事の衰へたるものゝ眼には消煙、彈雨の中を通過し來りしもの  
 軍紀の嚴肅なる唯々驚愕の外あらざりしなり、番兵交代の様  
 を見たる者余に告げていへり、「一人の番兵あり、一人來りて  
 代らんとせる時必ず一人の附添あり、何が為に然るかを知らざ  
 りしが後に其の理由を問へば一人の附添は二人交代する間を守  
 るの兵なりと、如何に守衛が其の職なりとはいへ、彼等の敵た  
 る英、佛の兵あるにあらず、彼等の四角四面なる實に馬鹿々々

しき極なりといふべし」と、暗に彼等の用心に過ぎたるを笑ひたりき、然れども彼等は實戰によりて斯く守らざるべからざるを知りたるなり、敵を守るもの毫末も油断あるべからず、彼等の如く倦まず、怠らず守るが故に守らるゝもの安全なるなり、若し之を笑ふ者として英、佛を敵と「し」たらんには未だ砲声を聞かずして潰ゆるの兵たりしならん、若し誘惑にあひて常に罪を犯すものより怠らずして守る者を見たらんには笑ふべきものあらん、用心に過ぎたりといはん、然れども實に悪者の誘惑に克たんとせば彼の輩の笑ふまでに用心せざるべからず、吾人の生活を満足ならしめんとせば完全なる用心あるべきなり。

卅二年八月十一日稿、

## 第百六十章 妾を諫めて不首尾となつた

馬太伝に曰はく「ヘロデ其の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことに由りてヨハネを捕へ縛りて獄に入れたり此はヨハネヘロデに此の女を娶るは宜しからずといひしに因る」(十四。)、希伯来書に曰はく「爾曹惡を争ひ拒ぎていまだ血を流すに至らず」(十二。四。)

人と人との間に親疎の別あるは其の原因一ならざれども不義、

罪惡の為に親しく、又不義、罪惡の為に疎きに至るもの少しとせず、顧ふに世にはヨハネのヘロデに於るが如く自己の罪惡の為に高德の君子を遠け、以て自己の慾を遂ぐるに便するもの多し、ヘロデはヨハネを以て大人となし、君子となし、大に畏敬すべき人物となしたり、然れども一朝自己が實弟の妻ヘロデヤを奪ひしを諫めらるゝや、其の情を制すること能はずしてヨハネを捕へ、以て獄に投ぜり、吾人が基督を信するや昨日の親友變して今日の敵となるもの決して珍しとせず、是れ多くは信仰の念より其の朋友の不義を戒め、朋友は之を戒めらるゝも其の不義を棄つるに忍びず、他に名を求めて疎外するに至るものなり、吾人は信仰の為に舊友を棄つるを好まずといへども若し信徒となりて不義の友と其の交情依然として旧の如くなるあらば其の旧友に不忠なる意味あらざるべからず、時としては旧友との不和、篤信の證となるものあるなり、

組合教會の教師金森通倫氏は不幸にも後、信仰を失ひ、大墮落を為して無下の小人となり(続々恥か記第八十五章を見よ)しが其の初め信仰の確實なる、其の品行の高潔なる吾人に常に敬服せる所なりき、岡山教會の今日あるもの氏の力與りて大なるものありしなり、然れば氏が同教會にあるや、當時同県知事は

高崎五六氏にして深く其の信用を得、氏は其の息を金森氏に托して同志社に入學せしめ、氏の伝道に便宜を与へたること少からず、常に県治上のことにも顧問となり、其の状恰も家康に於る天海僧正の如くなりき、是の如くなれば氏の名声の岡山に噴々たりしは新島氏の京都に於るが如く基督の名を知らざるもの、岡山教會を知らざるものもあるも金森氏の名を知らざるものなく今治に於る横井氏よりも、仙臺に於る押川氏よりもよく其の名を知られたりき、此の如くなれば何故氏は岡山を去りしや、他なし、高崎氏同地にありて妾を蓄ふ、金森氏之を知るや直に氏を面責して寸毫假す所なし、氏は大に之を怒れり、然れども捕へて獄に投ずる能はず、遂に氏は金森氏を以て目上の瘤となし、之を遠けんことを謀り、爾來氏の伝道に便利を与へざるのみならず、密に妨害を与へ、此妨害に遭ふて氏は其の手腕を岡山に振る能はず、止むを得ず此の地を去るに至りしなり、高崎氏の暴状は惡むべく、金森氏の忠實愛すべし、あゝ、氏は「義の爲に責められて福なり」としたりき、然れども氏は今や墮落せり、氏若し半夜人定まりて後、自ら妾の側に臥したるを思ひて當時の高崎氏を思はゞ今昔の感果して如何。 卅二年八月十二日稿、

## 第六十六章 基督教徒の光明

基督曰はく「人々の前に爾曹の光を耀かせ然すれば人々爾曹の善行を見て天に在す爾曹の父を榮むべし」(太。五。十六)、「私は基督信者でござる」と故に吹聴して信者たるを知らるゝは信者たるを蔽ふに比して大に善しといへども故に吹聴せずして自ら知らるゝは更に善きことなり、世には教會に來りて信徒の如くし、世間に出てゝ不信徒と交る時毫末も信者らしき所なきものあり、彼等は味噌の味噌くさきは眞の味噌にあらず、信徒の信徒くさは眞の信徒にあらずといはんか、然れども主の教へたまふ所によれば信徒は世の光なり、若し光たらんか、故に照すべしとせざるも光の性質として自ら照らん、照らざる光は眞の光にあらず、信徒たるを示さざる信徒は眞の信徒にあらざるなり、ある人政事的運動にて某県の會合に臨めり、歸りて余にいふ「何某等と共に何方に行き云々」と、余は其の何某が信徒たるを知りたれば「彼の人は信徒なり」と語りしに余に語りし人驚きていふ「果して然りしか、余は彼の人と偕と某地に往き同宿すること三四日なりしが氏は何とも語らざりしを以て全く知らざりき」と、余は此の語をきゝて思へり、彼の人が自

己の信仰を示さざりしはよろしからずといへども余に語る者も亦自己の信仰を示さざりしなり、此の人は他の示さざりしを云へども自ら自己の示さざりしをも白状したるなりと、故に吹聴するに及ばずといへども同宿の人に其の信仰を示さざるは或は其の信仰の有無如何あらん、世に光明なき燈火はあることなく、光明なき信徒（と自称する者）は多きが如し、歎すべきかな、真山良氏は佐倉の人にして麴町教會（？）の信徒なり、余は氏が東北学院に算術の教師として仙臺教會の長老たりし時始めて知りたり、氏は疾より余の名を知りたるよしにて何となく親愛の情深かりしが後去りて何方に往きしかを知らざること数年なりき、先に岩越鐵道に技師たりし田中楨次郎氏余にいふ、「郡山に居りし頃真山良」といふ人ありしが信者のよしにて貴君をも知れるよしなり」と、其の時は「然るか」とのみにて他に何等の談話もなくして終りしが此の頃鹿島組の鈴木巖氏に面會したりしに氏はいふ、「貴君は真山良といふ人を知りたまふよし、近頃鹿島組にて氏を傭ひしに頗る事務に機敏にして且つ實着に社にては深く信用し、善き人を得たりと喜び居れり」と、余は之を聞きて深く喜び居りしに三四日前、前の田中氏を訪ひたる時、談偶々真山氏のことに及び、此の頃は鹿島組に居るよしな

りと語りしに田中氏はいふ、「彼の人の如くならば何方に往きても信用を得ること難からじ、余が岩越を去る頃にはいまだ彼の社に居りしが恐くは彼の社に用なく鹿島組に往きたるなるべし、氏は岩越にて荷物運輸の事を辛りしが事理に精通したると機敏にして且つ正直なりしを以て深く信用せられ、毎月五千元前後の出納を一任せられ、毫末も渋滞したることなく、尚且つ一銭たりとも誤魔化したる跡あるを見ず、余は他の者を呼出だして尋ぬるも要領を得ず、氏に問ひて直に其の要を得ること屢々ありしを以て『役に立つ男』と思ひ居たり、其の平生を觀るに酒をも飲まず、喫煙せず、不思議の人と思ひしがいまだ信徒なりとも思はず、然るに荷物の運搬を辛るものは駄数を多くして賃金を私すると自己の業務を多く見せんとて其の数を偽らざるものは殆ど稀なり、時としては千駄と報告して其の實は二三百駄に止まることあり、何分にも信用すること能はずして報告あるも尚ほ内調を為すことあり、然るに真山氏よりの報告は常に他の者に比して駄数少く、少きが故に實際と報告と異なることなく、氏が五百駄といへば必ず五百駄にして些も誤数あることなし、後には何事にても『其のことに間違いないか』と問ひ、『真山さんがいひました』と聞けば直に信じて誤謬なきに至り、

人皆氏の機敏と正直に感服し居りたり、後、何かのことより不  
図宗教談に渉りしに氏は基督教徒なりといふを以て然らば貴君  
を知るかと思ひしに貴君を知れるよし、始めて貴君の相識なる  
ことを知りたり云々」、實に氏の如きは「燈を燃して斗の下  
にお」かず、「燭臺に置きて……すべての物を照（太五。）す  
人なり、若し信徒にして氏の如く耀きたらんには神の国の全勝  
は決して遠からざるなり、光明なき燈、氏の光明を見たらん  
には愧死すること無きか。 卅二年八月十二日稿、

## 第百六十二章 僻み根生があるから……

以賽亞基督の性格を預言して曰はく「彼は競ふことなく喧ぶ  
ことなし人街に於て其の声を聞くことなし……傷める輩を折  
ることなく煙れる麻を煥すことなし」（太十二。廿。）  
保羅曰はく「我衆の人に向ひて自主のものなれど更に多くの  
人を得んために自ら己を衆の人の奴隸となせり、ユダヤ人に  
は我ユダヤ人の如くなれり、此れユダヤ人を得んためなり、  
又律法の下にある者には我律法の下にあらざれども律法の下  
にあるものゝ如くなれり、是れ律法の下にある者を得んため  
なり、律法なき者には我律法なきものゝ如くなれり、是れ律

法の下にある者を得んためなり、律法なき者には我律法なき  
ものゝ如くなれり、是れ律法なきものを得ん為なり……、柔  
弱者には我柔弱者の如くなれり、是れ柔弱者を得ん為なり、  
又すべての人には我其の凡ての人の状に循へり、是れいかに  
もして彼等數人を救はん為なり、われ福音の為に如此おこな  
ふは人と共に福音に與はん為なり」（哥前九。十。）  
人を救はんとせば己河岸にありて大声、疾呼するも益なく、自  
ら水中に入り、自己を彼の位地をおきて抱かざるべからず、人  
を説きて之を教化せんとする者は己まづ教化せらるべきものゝ  
位地に立ち、十分彼に同情、同感の念を有せざるべからず、己  
別位地にある時は彼別感情を以て我を見るが故にわが感化の力  
は彼の一身に及ぶこと能はざるなり、神若し我を救ふといへど  
も基督人となりて吾人の中に現れ、吾人と寢食を偕にしたまふ  
ことあらざれば吾人は神と感情を一にする能はず、感情一なら  
ざれば神の教化を受けること能はざるなり、パウロが異邦人を  
説くに當りて自ら其の身を異邦人の如くしたるもの其の成功の  
一要素たりしなり、清国内地に入りて道を伝ふる欧米の宣教師  
が清服を纏ふものは徒に奇を好むにあらざるなり、  
余は廿三年以来監獄に伝道し、見るべき成功としては一もあらざ

れども囚人には必ず囚人たるの僻み根生あるべきを知りたり、之を知るが故に「監獄」、「囚人」、「就役」、「法律上の罪人」など凡て囚人の僻み根生に障あるべき語を用ゐず、又彼等呼ぶに「諸君」、又は「兄弟」、又は「あなた方」の如く極めて親しく、又敬語を用ゐ、毫も「余は罪囚にあらず」との語勢をすら用ゐることをせず、蓋し彼等は囚人としての僻み根生ありて思ひもよらぬ邪推をなすものなればなり、彼等は平生苛責、叱咤、命令の声のみ聞きて親愛、同情の声を耳にせることあらざるが故に「盗人」と響く声あれば「我を呼べり」とし、「悪人」と耳にすれば「我を罵る」となすものなり、然れば彼等に対して親愛の言は餘程感ずることの深きものなり、余本年一月以後風邪の為に三月に至るまで休講したりしに同月中書信を以て余の疾病を問ふもの二人ありき、余は其の書信を落手して一二週の後出席したれば説教を終りて後「此の頃わざ／＼手紙を以て病氣を見舞ふてくださつて有難ふございました、幸に回復しました……」といふや一同莞爾として低頭せしが其の頭を挙げたるとき見れば落涙し居る者二三人ありき、あゝ、可憐なる囚徒、彼等は入監以来長きは七八年他人より「有難う」といへるが如き謝辞をきゝたることは無かりしなり、「有難う」の一言、彼等

の為に幽谷の瑤音、絶島の帆影、死者の福音たりしなり、余は是によりて弥々彼等を囚人視するの得策にあらざるを見き、此の頃留岡幸助氏来り、雑談の際左のことを云へり、「囚人といふものは僻み根生があるから餘程注意しないと倒れかゝつたものを突飛ばすやうなことがあります、私の所に居た出監人の一人は他に出て歸つてくる時は必ず裏の竹藪の影に四五分時間立ちて自己の噂話を為すや否やと見るを常とせり、又一人竊盜をしたものが来て居ましたが中々僻みがあつて困りました、まだ全く痊なをりませんが其の痊りかたを遅くしたのに一の原因があります、ある日私の妻が一間に巾着を持つて来て錢を奪へて居たのですが終つて立たうとした時其の男は障子をあげて其の間にはいりました、妻は立ちかゝつたのであつたが其の男の入来るのを見たので氣がつき、其の男を疑つたのではないがヒョイと巾着をつかんで往つたのです、誰も何とも思はなかつたのですが其の男は「まだ己を疑つて居るか」といつたさうです、囚人を扱ふには僻み根生があるから餘程氣を付けなければなりません、私も経験があります、私がアメリカから歸つて全く金の無くなつた時非常に困つたから時計を売らうと思つて二三の店に持つて往つたのですが何処でも皆断られたのですが後で考へ



れば規則があるので店で売らうといつても買はん筈です、然し私は貧乏したので自分に僻みがあるから何の店でも私を盗人と思つて見るなと思つたことがありました、實に僻ませるなら教化することはむづかしい何んでも悪いことをした者をも悪いことを為んものと見て扱はなければなりません、悪いことをせんものと見て居るなと思ふと其れに感じて悪いことをせん氣になります、人を扱ふのはむづかしいが囚人を扱ふのは殊にむづかしいものです」と、主の救極に力あるは主の同情なり、パウロの伝道に成功あるは其の身を同位地に置きたるにあり。 卅二年八月十二日稿、

## 第百六十三章 信者風

箴言に曰はく「鉄は鉄をとぐ斯くの如く人は其の友の面を研ぐなり……水に照せば面と面と相肖るが如く人の心は人の心に似たり」(廿七。十、七、十九)。

人は境遇の感化を蒙らざるものなし、孔子の支那風なる、釈氏の印度風なる、ソクラテスの希臘風なる、パウロの猶太風なる、ルーテルの独逸風なる、西郷南州の日本風なる皆是れ境遇の感化を蒙りしものにして真に超然として境遇の外にあるものはあ

らざるなり、然れば聖賢、達士の思想の如きも境遇に化され、統系を存し、何程の新規軌、新思想なりとも天より降りし基督の如きものあらざるなり、「天より降り天にをる人の子の外に天に昇りし者なし」(約三。一三)、其の他に至りては何等の人物も人たるを免れざるなり、一の土地に土地風あり、一の国に国風あり、是れ境遇の感化なり、余が友松崎連氏云へり、氏曾て他藩の某氏と共に両國辺を逍遙したることあり、之と語りつゝ行くととき五六間前に神谷乙之助氏の往くを見たり、一人なれば呼止めもすべかりしが他藩人の同行者あるを以て其の俚にして行けり、其の時同行の友人は後より神谷氏を指して「彼の人は貴君の同藩人ならん」といへり、松崎氏は驚きて如何にして知るかを問へば「貴君の風俗と全く同じ」といひたるよし、余の目より見ては此の二氏に似たる所ありとも思はざるに他人の目よりは似たる所あるを見たり、是れ我が藩の小境遇にして知らず識らず感化せられしものなり、然れば基督教にも信者風なるものありと見え屢々知らざる人に然か思はるゝことあり、(統恥か記第三十七章にも余が教役者と見られたることを記せり看参せよ、本年四月余は飯坂町に往き、一夜(一日なり)村上清氏と宿舎の樓上に雑談す、偶々信者風といへる談起り、余は恥

か記(統)第三十七章にあることを挙げて教役者風もあるものかなといひしに氏は独り莞爾として頻に点頭き居りしが後に左のことを語出でたり、「余の貴君を知りしも同じくそれなり、貴君が曾て角屋(温泉宿の二)に着せられし時(明治廿四年十一月十二日の夕刻なり)余は彼の家の帳場に居りしが貴君の風采を見るや余は何となく教役者ならんと思へり、玆を以て主人を促し、宿帳を附けさせて一見したるに果して盛岡の基督教々師三浦徹とあり、偕こそ我が眼は誤らざりけれ、推して面會を求めんかと思ひしが何となくきまり悪くて果さず、何事か機會あれかしと貴君が入浴せられし時格別に入浴を欲せざりしが余も亦入浴せり、然し遂に機會を得ずして其の「日は止み、翌日」押川氏と共に貴君に面會せり、然し貴君は「昨」<sup>其の</sup>夜同浴したるを知らざるが如く見えき」と、余は此の談をきゝて弥々奇なりと思ふと同時に九年間の一疑問を解釈するを得たり、余は其の日押川氏と共に上野より同車せん筈なりしに発車時刻に至るも氏は来らず、止むを得ず、余は独り乗車し、小山に來りしに斎藤王生雄氏の<sup>上州より來りしに逢ひ、氏と共に仙臺に行かんと</sup>為したりしに宇都宮を越えたる頃より頭痛して気分よろしからず、遂に飯坂に一泊せんと決し、福島にて下車したり、下車し

て見れば和田氏は鈴木氏と共に待つ人にもあるが如し、問へば押川氏来る筈なりといふ、余は氏の乗車せざりしよしを語り、同所より直に人力車を備ひて発し角屋には着したりしなり、余が室は入口の上にある二階にして滝の湯の音耳につきて眠を妨げられ、十時を過ぎたれどもいまだ眠らず居りしに忽ち入口を叩く者あり、家の者は之に応ずる、入口の戸の聞く音あり、来客と下婢と二三回の問答あり、其の内二階に昇るものあり、余が室の襖を開く者あり、見れば一人の下婢にして「三浦様とは旦那ですか」と問ふ、然りと答へしに何もいはずに室を出でしが入交りて押川氏と和田氏と村上清氏を伴ひ來りしなり、余は最初より押川氏と飯坂に同行すべきを思はず、又福島に於て和田氏に面會したる時角屋に止宿すべきことを語らず、然るに押川氏の「如何にして余の宿を知りしや」と問ひしに氏は戯れて「香で知つた」と笑ひ、何ともいはず、余は本年までも如何にして知りしかを知らざりしに此の日村上氏の言によれば村上氏は必ず余の宿を知るべしとて同氏を訪ひたるよし(福島にて和田氏は余に村上氏を迎きて面會しくれよといひたれば氏は余の宿を知ると思ひしなり、余は気分悪かりしを以て和田氏の依頼

に應ぜず、明朝村上氏を訪はんと思ひたりしなり、村上氏は余に訪はれたるにはあらざりしが前掲の事によりて偶然余の宿を知りたるにてありし、余は敢て世人と異りたる風俗を為さんと思はず、又教役者の風あるを知らざれば之に倣はんともせず、然れども自ら化さるゝものありて世人の目に信者風と見ゆるものあるなるべし、人は境遇の奴なるかな。 卅二年八月十二日

稿、

## 第百六十四章 神經です

利未記に曰はく「魔術を行ふべからず」(十九)。

耶利米亞曰はく「異邦人は天にあらはるゝ徴を懼るゝとも汝等は之を懼るゝ勿れ(二十)。

人には迷妄、迷信多きものなり、我が教に於ては旧約の當時より之を禁じたと雖もそれすら時々迷信に陥ることあり、況んや禁ぜざるのみならず、却て奨励するに似たる他教信徒に於てをや、迷妄、迷信は徳の害なり、進歩の敵なり、極楽往生の迷妄痴漢、痴婦の情死を奨励し、地に神ありとするの迷信清人の鐵道破壊となるが如き、學者の迷妄宗教を排斥して其の惡結果を蒙るを知らざるが如き其の例なり、基督教信念の旺ならざるや

迷妄に陥る古今皆一なり、大に慎まずして可ならんや、我か基督教を信する人々の中に Faith Curing と稱し、信仰を以て疾病を痊し得ると為すものあり、余は信仰を以て疾病を痊さるゝことあるを信ぜり、然れども必ず痊ゆべしと信ぜず、信仰にて痊すを得べしと為すは神の力と神經病とを混したるものなり、又祈禱によりて疾病を痊すといふは奇跡的信仰の部分に屬して普通の信仰にあらず、若し奇跡的信仰なりとすれば其の力は独り疾病快癒にのみ動くにあらずして他の事物にも動くことは使徒等の如くなるべきなり、彼等信仰により、祈禱によりて疾病を痊し得べしとするも決して奇跡を行ひ得べしとはせざるべし、果して然らば独り疾病快癒にのみ力ありとするは無道理千萬の迷妄たるなり、吾人の祈禱には能あり、故に神若し善しと見たまふならば其の祈禱を聴きて疾病を痊したまふことあるべし、祈禱によりて必治なりといふは誤謬なり、蓋し奇跡は人力を以て為し得べからずといへども神經に關係ある疾病は人力を以て痊し得るが故なり、

余が藩に雨宮某といふ人あり、(余が幼少の頃、死したるよしにて余は余よりも二三歳若き其の息を知りたるのみ、然し余が今云はんとする人は此の息の祖父に當る人「の子」なるやも知

れず、今間はんにも道なし、氏は奇妙にも瘧の病を痊せり、其方法を聞くに此の疾病ある者氏に治を乞へば氏は明朝或は明後朝、精進潔斎、禮服を着用して我が家に來れといふ、其の人來れば先づ座敷に請じ、自ら麻上下を着し、ボロ／＼なる錦の囊に入れたる一刀を三方にのせ、之を恭しく目八分に捧げ、來りし者の前に置き、以て之を三拝せしめ、而していふ「是れ余が家に古くより蔵する神刀なり、神刀の功驗瘧を治すること妙なり」と、自ら拝して之を納む、是れ兩宮氏が瘧病を治するの手段なりき、ある人其の神刀といふは何等の寶刀なるかを知らんとして氏に問ひしに氏は笑ひて曰ふ「否、敢て寶刀たるにあらず、余が平生用ゐ居る小刀なり、幸ひ古めかしきボロ／＼の囊ありしを利用して相手に寶刀と思はせ、以て瘧を痊す、一の方便のみ」と、聞く者果然、大笑せりと、視よ、彼は相手の迷妄に乗して天理教のモルヒネ金米糖菓を用ゐたるなり、又飯坂の村上氏は余に云へり、「神經といふは奇妙のものにて虎列拉病者の通行するを見て忽ち虎列拉病になりし談あれど余も亦之を利用して神經病者と痊したることあり、余が須賀川より此の地に転じて後久しからざる時なりしが長岡の知人某氏の母少しく腦に異狀ありて時々自ら狂者なりと思ひ、奇妙なる拳

動を為して困難なりと聞きたれば余は彼の人につきて母の平生又信念など聞き、ある日少しく平人と異なる服裝をなして長岡村に往き、其の家の前に立ちしに朋友は一種の拳動を為して余が立てることを母に知らせたるが如し、母は余が風采を見しに普通人と異なる所あるを以て、意ありしものと見え、何用なりやと問ふ、余は固より問はしめんとしたるなれば一種の神託を伝ふるものなりといへり、彼は驚きて余を家中に請じ入れ、余は導かるゝまゝに座敷に通じ、此の婦人を相して諄々として其の平生を指摘、説破し、かゝる信念は此れなり、彼の信念は一種の迷妄なりと説くや、朋友ははや居たゝまればなりて家外に遁出だし、余も吹出ださんとせしこと数回なりしが一生懸命、辛抱して漸く説終りしに彼の婦人の驚愕は預想外にして此の時より前の有様と大に異り、今も尚ほ無事なり、全く痊えたりとは見えざるも知らざるものは尋常人と為して怪まざるまでには痊えたり、神經病はまことに奇妙なるものなり」と、氏は一種の方便説を為して一人の婦人を救ひたり、此は Faith Curing にあらずして Unfaith Curing といふべきか、奇なるかな、神經の作用。 卅二年八月十四日稿、

第百六十五章 盛世祈禱にて救はる

基督曰はく「爾曹すべて我が名に託りて求ふ所のことは我すべて之を行さん父の栄の子によりて願れんが為なり若し爾曹何事にて我が名によりて「救」はゞ我これを行さん」

(約十四・十、十四)

約翰曰はく「われらがすべて求むる所は彼より受く其の誠を守りて其の悦びたまふ所を行へばなり」。(一約三、二)

前章に於て余は單に祈禱によりて疾病を医さるゝことなきを云へり、今、盛世祈禱にて救はるといはゞ或は矛盾の言に似たりと思はん、然れども其の矛盾にあらざるは左の言によりて明ならん、

祈禱によりて疾病の医さるゝは真理なり、然れども今日新約の時代に於ては奇跡を行ふを許したまはず、「奇跡」によりて疾病医ゆといふは即ち奇跡なり、然れば今日は直接に祈禱によりて疾病を医したまはずして間接に医したまふなり、間接とは何ぞや、祈禱によりて人力の爲し得べき方法を取らしめたまふなり、是れ之れを祈禱にて救はるといふなり、

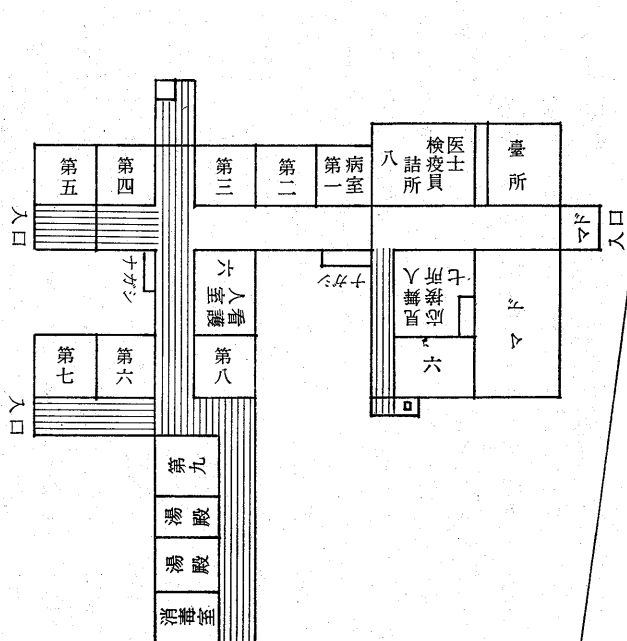
余は近頃神が此の方法によりて余が三女盛世の生命を救ひたま

ひしを経験せり、其の顛末を詳記する所あるべし、近頃市中に赤痢病流行し、彼方、此方に病者あるよしをきゝしが是れたゞ他人事にして余には関係なし、かゝる疾病の流行せざるも余は前より用心し居れば大安心なりとしたるは油断なりき、卅二年八月十四日の午後余は一二の兄弟を訪ひて夕暮家に帰りしに盛世は床にあり、如何にせしやと問へば熱あり、頭痛せりとて臥したりと、體温を驗したるに摂氏の九度四分を示せり、斯くては棄ておけじと直に医士木村氏に人を走らせたるに不在なりといふ、後島村氏近所に往く用なきやとのことなれば再び木村氏に來診を促したり、夜に入りて木村氏來診し、いまだ何やら分明ならざれども或は腸カタルならんかと、下剤を投ず、其の功に能はや十時頃より下痢を初め、夜のあくる頃までに十五六回下痢したり、十五日の午前木村氏來診し、十分に赤痢の徴あり、午後一診して確實ならば止むを得ず規則に従ひて其の筋にとゞけいづべし、就ては岩手病院の隔離室なり、万日の伝染病院なり、何れなりと入院然るべしと、余は万日の病院を知らず、岩手病院なれば近きが上によく知りたれば岩手病院に入らんと木村氏に乞ひて院長杉立氏に宛てたる書をもらひ、島村氏をして談判せしめ、看護婦一人を備入るゝことをも相談せしめたり、

然し余は夕刻に至りて医士より届出づるを好まず、そは夕刻届出だして夜に入りて入院するは不便少からずと思ひてなり、木村氏は夕刻診察して明朝届出だすことゝせんとて帰りしが夜に入り来診し、幾分か輕快の模様なれども明朝八時に届出づべしといふ、此の時太郎は少しく熱あるが如しとて木村氏の診断を乞ひしにこれも或は赤痢にはあらずや、盛世の下剤二服を服し試みよとて去れり、然し太郎は二階に寝ねしを以て夜半に下剤の功能あらはれては困難なりとて之を服せず、キニーネ三グレインを服して眠れり、盛世の下痢は昨夜の如くして此の夜を過ぎし、太郎は十六日の午前六時頃より下痢し初めたり、七時頃木村氏来りたれば二人とも診察を乞ひしに盛世の方は昨夕よりもよし、太郎は純然たる赤痢なりとのことにて遂に二人とも入院せざるべからざるに至れり、午前十時頃に至りて検疫員北田某氏、巡查部長、巡查、人足二人、消毒薬と共に来れり、北田氏に担架ありやと問へば無しといふ、昨余年が乗りしもの病院にある筈なりといひしに其の答何となくトンチンカンなりしが後に思へば余は岩手病院のかんがへなるに氏等は皆万日の伝染病院と思ひ居たるが故にてありき、北田氏の命にて人足は駕籠を迎へんとて去り、偕巡查部長と談話せしに岩手病院には伝染

病患者を収容せず、普通患者の伝染病に罹りし者ある場合には隔離室あるを以て之を許せども他にて發生したるものは同院に入るを許さずと、然し北田氏は市役所に談じたらんには許さるゝことあるべしとのことにつき米合はせたる島村氏に依頼して市長清岡氏に談判せしめたり、島村氏は帰り来りしが市長も居らず、検疫主任の人も居らざるを以て談判するを得ずと、余は巡查と争はんかと思ひしが遂に争ふをせず、万日と決したり、蓋し万日は木村氏の主管する所にして万日を嫌ふは間接に木村氏を嫌ふに當り、又今徒に争ふ時は患者の為に不利なり、又事に托して避病院に入るを嫌ひ、衛生的道德を欠くと思はれんも好ましからずと思ひてなり、島村氏が市役所と病院とに往復せる間に木村氏は又来りて余の為に氣勢を添ふる所ありしが巡查は規則を楯として拒み、余は既に決心したるを以て十二時頃冷粥一杯を食ひ、太郎と盛世とを駕籠に乗せ、余と巡查と附添ひて家を出て明治橋麓より河に沿ひて東し、並列せる老杉の下にある「盛岡市立伝染病院」に達す、本文の主趣には敢て必要なきに似たれど筆の序に病院の体裁、状況を云はんとす、病院の建物は左頁に挙ぐべし、患者は表入口より出入するを許さず、皆裏入口よりす、入りて病室はと問へば何れも皆四疊半の小屋に

続統恥か記 第十一卷



して二人を容るゝ時は殆ど看護者の座する所なし、余輩は二人の患者あるを以て更に広き病室をと請求したりしに無しといふ、如何にすべきと勸考中留守居の長岡氏は看護人室に入れんといひ、木村氏も亦来りて其の室をとの助言もありしが検疫員の佃間氏は三浦氏の為に異例を為るはよろしからじとて遂に是迄隔離室として一度も患者を容れたることなしといふ第一号室（實は第九号なるよし余私に第一号と称せり）と第二号室とを余輩の為に用ゐることゝはなれり、初め看護は余一人なり、或は後より看護者一人を得ん考案なりしを以て先づ二人を第二號に入れたり、茲に余輩の喫驚したるは室は一方口にして後方には高き窓あるのみ、尚且つ便器を持来りしが置くべき場所なく、四畳半の室中におくなり、患者は多く食物を要せざれども看護人は食はざるを得ず、其の食物も同じく室中におくべし、其の上に蠅の多きこと何程追へども去らず、便器より飛来りて食器に移り、時としては糞便より来りて口辺に止まることすらあり、病院とはいへども医士は一人も居らず、看護婦なし、薬局なし、自由に使役すべき小使なく、病院中に一個の時計すら無し、是の如くならば飽くまでも争ひて拒みしものをなど後悔したれども及ばず、是れも天父の摂理中にあることならんと主の御手に

任せまつりてありしに余が妻は兒を見んとて来れり、初め妻は健康の身にもあらず、危険なる病の看護はよろしからじ、且つ留守宅をも棄てゝはおけず、余と看護者にて足らんとおもひしが妻の来りし頃は盛世の容体よろしからず、妻は此の兒が家を出でたる時より甚く衰弱したるが如しとて此の夜は看護しゆかと止まることゝはなれり、余は病院に入りたることなれば妻と交代して看護するやうになるべしと思ひしに盛世は毎三十分時に便通あり、且つ夜中は殊に煩悶してかけたる物をば踏みぬき、或は右し、或は左し暫くも目を離すこと能はず、然れば交代は愚か、二人ともに三十分時の休息すら無く、其の夜は唯煩悶を見つゝ送れり、十七日の午前となりしに盛世の煩悶は幾分か鎮まりしも其の容貌を見ては活きたるものと思はれず、（余が妻は此のことを十八日の午前なりといへども余の日記は十七日とせり）、目はくぼみて、眠るも閉ぢず、半眼にして黒眼は上の方につりあがりて見ゆるものは白眼のみ、頬はこけ、口は閉ぢず、色さへに青ざめて全く死したるものゝ如し、木村氏も此の朝は早く来診せず、九時頃なりしならん、余が妻は其の顔を見て「頼み少き容貌なり」と甚く心配し、室前を通りし長岡氏に「一寸此の顔を見られよ」といひしに氏は一見して「これ



は棄てゝおけない」の一語をのこし、常には羽織を着、帽子かむりていづるを例となせるに此の時は臂からげて其の俛、木村氏を迎へんとていでたり、余は其の脈搏にてまだ死する程にはあらずと思ひしが妻は長岡氏の驚きに驚かされてはや望なしと爲して泣出だしたり、長岡氏の挙動にて心配し居たる他の看護の人々は余が妻の声をきゝて二三人見舞に來り、同情の涙をたれて「ヤーヤア、ナンモ、ナンモ」を繰返す、久しからずして長岡氏よりも早く木村氏は來れり、家を出づる時長岡氏にあひたれば一旦家に歸り、用心の爲注射器を携へ來れりといふ、氏は診察して小首を傾け、「面白くない」と二三回重復して、散薬一服を投じて去れり、其の日の午後木村氏の徒弟久慈氏來りて灌腸し、氏は木村氏の言を伝へていふ、「盛世さんは神経症状といひて中々に危篤なり、万一のことありたる時遺憾ならん爲に他の医士に見せたとすれば遠慮なく頼まれよ」と、木村氏は七を投げたるなり、既に望を絶ちたるなり、余は他の医士に見せたりとてはや施すべき術もなからんと思ひしが余に一縷の望といふは福島医士が田中氏の児を治療したると木村氏と其の手當の異なるを知りたれば福島氏に頼みてみんかと思ひき、斯く思念せる時医士石井六郎氏自己の患者を見んとて來れり、

余が妻は誰を頼みてよきか石井氏に問試みんといふ、余は石井氏に診てくれとなれば兎に角、医士を業とせる者に対して他に誰を依頼してよきやとの相談は少しく妙なりと思ひしが遂に妻の希望に任せて同氏に問はしめたり、氏は見舞として一診したる後「誰を頼まんかとの御相談ありても余は医士として誰がよからんとは云はじ、然し余が若し木村氏と共に治療して而して誰にか頼診せんとならば福島氏といふべし、蓋し同氏は内科を得意とし、杉立氏は外科を得意とすればなり」と、尚ほ石井氏は滋養物を与へ、腹部、脚部を温めよと忠告して去りぬ、其の夜木村氏來りたれば福島氏に診察を乞ひたきよしを語り、同氏より書面を得んことを約したり、石井氏の忠言もありたれば直に重湯を作りて服せしめ、又木村氏より送り來したる鶏卵ブランデーを味はしめたるに喜びて之を嚙れり、然し此の夜も亦煩悶は前夜の如くして多く眠らず、十八日となりしに午前島村氏來り、木村氏の依頼によりて福島氏に使したるに本日午後三時に診察すべしとの承諾を得たるよし、且つ氏は今夜教會の諸兄弟は特に祈禱會を爲す筈なりと語り、大に力を得たり、今日までの経験によれば午前は夜中の如く煩悶せず、静なるを常とし、今朝も同じく静なれど眠れば容貌は死者の如くなりしに午後一

時少しく過くる頃、其の容貌幾分かよきが如く、如何にして然るかは固より知るべからず、二時少しく前には不図覺めて母を呼び「よくなつたら渡辺さんへ往かう」といふ、意味の全き一句をいだしたるは是れ初めてなり、病める児の死する頃には医師の身体にある物、即ち羽織の紐などをひねくりみるものなるに児は木村氏の胸のシャツ紐子をひねくりたるを見たり、余も亦迷妄なき能はず、之れを見たる時快からず思ひしが妻には語らず居りき、三時には福島氏来診とのことなれば試みにとて余は語りき、「今に福島さんといふ御医者様が来なさるが鬚のある方だからひっぱつてあけろ」と、其の時は理解したりや否や明ならざりしが福島氏の診察せるとき手を延ばして氏の鬚をひき試み、氏は「鬚が分るかな」とて笑ひ居たり、偕福島氏は診察して後、

「敢て不良といふにあらず、聞きしよりもよし、滋養物を十分に供給し、脚部には湯湯婆を入れ、下腹には湿温袍を施し、アイス、クリームを食はしめよ」

と、尚ほ最早到底望なからんと余の間に對して

「否々、まだ棄るには早し、敢て格別熱もなく、又心臓の動作も十分なり、薬よりも手當を大切なりとす、今日より三

日の丹精にて此方物となるべし、頭痛せざれば頭部は冷さざるもよし、腹部には懷爐の如きものよりも湿氣あるをよしとすれば莖弱を暖め、フネル布に包みてあつべし、脚部には長き靴足袋をはかするをよしとす」

これより手當法一変し、時を定めて重湯、鶏卵ブランデー、生乳、牛煉乳、葉を投じ、又弘光とめ子にたのみてアイスクリューを作らしめ、これより次第に快く、廿一日の午前に至りては例の死に面もなく、眠りし時は目を閉ぢ、くぼみし目も幾分か肉づきたるが如く遂に全快、退院するに至れり、廿一、二日の頃木村氏は愁眉を開きて

「盛世さんの助かりしは医薬の功にあらず、神の祐助なり、あの時（十七日の頃をいふ）誰に見せても今日あるを期し得たるものはあらじ」

あゝ、感謝すべきかな、余が児は何故に十八日の午後一時過より輕快の期に入りしや、大に理由あり、即ち余輩が入院したる日は恰も水曜日なりしを以て其の夜教會の祈禱會は専ら余が家の病者の為に祈りたり、然れども其の後、經過の不良なるをきゝて島村氏は特別に祈禱會を為さんとて其の夜十八日の夜、氏が家に開會せんことを報告し、尚ほ當日の午前二三の兄弟に報

じたり、後に平塚氏はいふ、五六日前より便通なきを以て医士に乞ひて下剤をもらひたるに其の日の午前に服するを忘れ、午時少しく前に服用せんと思ひ居りし際、島村氏来り二三の人々に告げくれよと乞はれき、若し午前に服用したりしならば余は此の時刻に外出するはむづかしかりしならんが忘れたるばかりに島村氏の請に應ずるを得たりと、又島村氏の言をきくに頗る奇なるものあり、氏は十六日の夜の祈禱會に雅各書五章十六節を挙げて諸氏をすゝめ、偕十八日の特別祈禱會は夜の六時より開く考案にして大井光衛氏に司會を乞はんと思ひ居たり、而して余は十八日の午時前に平塚氏に乞ひて二三の兄弟に知らさしめ、急ぎて家に歸りしに十二時少し過ぐる頃、平塚其の他の兄弟来り、午後一時より開會ときゝたりといふ、斯くきゝて驚きたれども皆午後一時と思ひて来らんには早き方却つて可ならん、然し大井氏は多分夜と思ひて来らざるべし、若し氏にして来らざれば余は馬太八章五節以下に見ゆるカペナウンの百夫長の信仰を挙げて諸氏を励まさんと為し居たる際大井氏は来れり、よつて一時半頃より氏の司會にて開會したりしに氏は又雅各五章十六節の語を引きて信仰の祈禱をすゝめたり、前の水曜日といひ、此の日といひ期せずして同じ本文を取りしこと偶然にあら

ず、必ずや主は此の祈禱に應じたまふべしと信じ、又十二人集まりし人の中唯一二人を残し、他は皆祈り、不信者すら祈禱したれば大に力を得たり、然るに今宵（八月卅日の夜余は教會の祈禱會に出席して十八日の午後一時過より俄に容体のよくなりしことを語り、雅各書五章十六節、又カペナウンの百夫長のことを引用して感話を為したり）、三浦君の語る所をきくに十八日の午後一時過より快くなり初めたりといふ、諸氏記せよ、午後一時半の祈禱會は初めより期したるにあらずして夜を誤ちたるものたるを、余は初めより夜と思ひ居たるに一人も夜と思ひしものなく悉く誤つて午後一時に集りたるさへ奇なるに諸士の引用する所の本文といひ、又三浦氏の言によれば一時後より快くなり初めたりといふ、實に主が祈禱を聴きたまふことは今更喋々を要せずといへども特に今之れを實驗したるを謝すと述べたり、視よ、余が児盛世は祈禱によりて救はれしなり、祈禱其の物にて直接に救ひたまひしにあらずといへども主は此の祈禱に應じたまはん聖旨なるが故に（一）木村氏をして七を授ぜしめ、（二）自己の患者を入院せしめて一回も来診せざりし石井氏をして十七日の午後病院に來らしめ、（三）余が餘りに好まざるも余が妻は石井氏に謀り、同日の夕刻より重湯を供給せし

め、(四) 祈祷の前応を許したまはず、又後応を許したまはず、平塚氏に服薬を忘れさせ、時刻を誤つて一時に會せしめ、以て即応を許し、是に於てか、此の祈祷によりて余が児を救ひたまへり、「二羽の雀も天の父の許なくば地に墮ることなし」、神は吾人の祈祷を聴かんとして人の行動を主宰し、世に起る一切のことを摂理したまふなり、誰が神の摂理の範圍外に動くものあらんや、神は吾人の祈祷に應ぜんとして世界を運轉したまふなり、祈祷の応答の特に著きを實驗したれば記念の為茲に特記せり、  
卅二年九月八日稿、

## 第百六十六章 希望は人を動かす

耶利米亜曰はく「おほよそエホバをたのみエホバを其の特とする人は福なり」(十七、)

又曰はく「われこの事を心におもひ起せりこの故に望をいだくなり、エホバはおのれを待ち望む者とおのれを尋ねもとむる人に恩恵を施したまふエホバの救拯を望みて靜にこれ等待つは善し」(哀三、廿一、廿五、廿六、)

夫れ希望は人の力なり、一回望を失はゞ既に有する力をさへ失ひ、之に反して望を抱かば懦夫も尚は蹶起すべし、一身の生計

に餘裕ありといへども其の身長病、固疾に悩み、其の立つ能はざるを知るや自ら縊れて死するあり、是れ回復の望を絶ちたるが故にあらずや、身に一錢の貯なくして患難、困苦其の一身に蝸集し来り、外觀寧ろ死する方彼の幸福ならんと思はるゝ程なるに彼敢て力を落さざるものは七転八起、何れの日か一陽来復して今の困苦を昔語とせん望を抱けるが故なり、望なくば英雄も憤死すべく、望あれば病者も笑面を示さざるを得ざるなり、希望は人の力なるかな、

本年八月は余が家には長く記憶すべき災厄ありし時なり、前章に記したるが如く三女盛世と長男太郎と殆ど同時に赤痢病に罹り、言語同断なる病院に入りたり、避病院に入るは健康者と隔離すべき目的なるはいふまでも無きこととなるが又病院は自宅よりも医薬看護の善く行届くべきを以てなり、然るに彼の病院の行届かざるは自宅よりも数層甚しく余は入院したる時、東北人の音「ひびやうあん」といはずして「しびやうあん」といふは自ら「死病院」を意味すると為し、已に幾分の感觸を害せり、然るに盛世は入院當日の午前に反し、同日の午後より容体甚だよからず、十七日に至りては木村氏已に七を投じて「見込あるが故に他の医士を頼むもよし」とはいはずして「後に残念なり

とせんが為に誰になりと遠慮なく相談せられよ」といふ、余が喜びて入院したるものは一日も早く回復して退院せんことを望みてなり、人数を減じて退院せんとは思はざりき、然るに今や主治医より此の言をきく余如何でか望を絶たざらんや、薬を服さしむるも功能あるべしとは思はず、食物を手ふるも唯苦痛を長からしむるのみと思へり、余は看護するを親たるの義務なりとせり、然れば何を為すにも力なく、斯くまで面白からざりしことは余の生涯に多く経験せざる所なりき、余は十四日の夜より帶さへ解かず、よくも眠らず、食物も二三回粥を食ひしのみなれば身体は非常に疲労したり、是く心身共に疲労したれば恰も半死人の如くなりたり、然るに十七日の夕刻に至りて石井氏は「いまだ失望すべき時にあらず」といひ、十八日の午後に至りて少しく快きを見、福島<sup>フクイマ</sup>医士の診断によりて「三日間の辛抱にて回復の道に入るべし」と聞き、之が為に余は再び望を抱くに至れり、是く望を抱くや、降続く日夜の雨も然まで嫌はしくも無く、寄来る蒼蠅も前ほどには五月蠅からず、水を乞はれて立つにも懶く思ひし余は乞ふ語のいまだ終らざるに立つを得るに至り、鋭氣前日に倍し、看護の甚く面白きを感じ、腰の疼痛を感じるの外、疲労も思はず、食物は甘く、唯神の恩寵を感謝

して動きたりき、あゝ、望なるかな、望なるかな、若し死すると極りて尚ほ三四日を歴たりしならば余は堪ゆる能はざるに至りしならん、回復の希望は余の為に大なる力となりき。

卅二年九月廿九日稿、

## 第百六十七章 同情は實驗よりす

希伯来記者<sup>ヘブライ記者</sup>基督に同情ある理由を述べて曰はく「彼自ら誘はれて艱難を受けたれば誘はるゝ者を助得るなり」(二八)。

又曰はく「われらが荏弱を體恤ること能はざる祭司の長は我儕にあらず彼は凡のことに我儕の如く誘はれたれど罪を犯さ

ざりき」(四)。(十五)。

同情、體恤は人情の常なり、常なるが故に養はれずして自ら発するものあり、然れども人情は又自己に厚くして他に薄きものなれば他の疾苦を知らざる時は十分に発達せるものにあらず、其の身富貴にある者同情の念なきにあらずと虽も自ら貧賤を味はゝざるが故に貧賤に対する同情を欠く弊あり、「我が身を抓つて人の疼痛を知れ」、人は自己を他の位地に置きて眞の同情を有すべきなり、夫れ基督は神の子にして神なり、其の人となりて世に降るや工匠の子として貧家に長ぜり、彼は貧賤の如

何に不快なるか、如何に苦しきか、人の輕侮を受くるの如何に無念なるかを味ひたまへり、是故に深く貧賤なるもの、輕侮せらるゝ者に同情を寄するを得るなり、基督は全知なり、貧賤の苦しきを知らざるにあらずと虽も人の救主となりて人の状態を味はんが為に人の状態を自らし、以て同情、體恤を味ひたまへり、豈、貴からずや、

余は生来炊事を自らしたることなく、又人に使役せられたることなし、故に炊事、役事等には経験なし、今年盛世、太郎の疾病の為に看護の為避病院に入りしに前章にも云へるが如く病院中には看護婦もあらざれば便器取扱の外は一切自ら為ざるを得ず、最初は炭取に炭を出だすことだけ留守居の長岡氏に頼みたれど餘り屢々するも氣の毒なれば之も後には自らするに至り、看護と炊事は余輩夫婦の上に悉く負はせられり、然れば水を汲む、火を起す、重湯、粥を煮る、殆ど苦使せらるゝが如く、忽ち腰に疼痛を覚えて立居に難義なることいはん方なく、仕事は所謂單調にして三度が三度同じことなり、自己の為に自ら動くは自己の自由意思なれども病者看護のことは定まりたる時刻ありて欲せざる時にも為さざるべからず、殊に病者の一身に係ることは眠くとも立たざるべからず、余は一二日にしてツク／＼

下婢に同情を表するに至りき、自己の愛する子の為に動くすら是の如く苦しきを況して些細なる給料の為に義務の念もなく、使役せらるゝ下婢、下僕に於てをや、余は敢て自ら同情よしとは思はざりき、然れども今に於て深く下婢の如何に腰の痛きか、如何に眠きか、如何に面白からざるかを恤み思へり、「我が子なら供にはつれじ夜の雪」、「雪の日やあれも人の子樽ひろひ」、若し自ら其の境遇を實踐したりしならば人は同情の念を広く且つ大ならしむるを得べし、延喜の帝の寒夜の御衣、誰か其の御仁德に感ぜざらんや、天の栄光を棄てゝ世に降りたまひし神の子、誰か其の體恤を感激せざらんや、真の同情は親しく経験せるより生ずるなり。

卅二年九月卅日稿

### 第六六十八章 罪は次第に恐れざるに至る

希伯来書に曰はく「恐くは苦根生へいでゝ爾曹を擾さん且つ多くの人之れに因りて汚さるべし」(十二)。

伝道之書に曰はく「悪しきことの報速に來らざるが故に世人心を專にして悪を行ふ」(八)。(十一)。

罪は恰も伝染病の如く罪を有する者一人の害たるのみならず、

其の罪必ず之に接する者に感染せしむるに至る、然れども罪の伝染力は虎列拉、赤痢、バスの如くならずして肺病、癩病の如し、虎列拉、赤痢の如きは其の伝染急激なれども其の力は強大ならず、虎病の人を殺すは患者の半数にして痼病は四分之一に過ぎず、然れば虎病は必ずしも人を殺さずといへども肺癩に至りては全治したるもの殆ど無し、肺の如き北里氏の研究も未だ必治の功を見ず、後藤氏の名も未だ癩界に十分の信用を得ず、然れども世人の此等の疾病に対する感情を見よ、虎と聞かば其の半数近く回復するに拘らず唾を吐き、鼻を押へ、面を擲めて急ぎ遁れん、されど肺病ときく時は其の病症必死なるに拘らず然までには恐れざるなり、彼を恐るゝは伝染速なるが故なり、此を恐れざるは伝染遅緩なるが故なり、罪又之に同じく必死なりと虽も伝染遅緩なるが故に有する者然までに驚かず、見るまた然までには恐れざるなり、罪の報即座に來りしならば誰か之を恐れざらんや、即座に來らざるが故に「まだよからん」、まだよからん」、遂に肺患の死に近きて「此の頃は太によろし」といふが如し、「罪を犯す者百次悪をなして猶長命あり」(伝八、十二)、何程の悪人たりとも罪に報あるを知らざるにあらず、神を知らざる者といへども積悪の家に餘殃あるを思はざるにあらず、唯

其の報の靦面ならざることあるを以て之を改めず、後には習慣となりて全く恐るゝこと無きに至る、然れば吾人に要する所は罪に報あるを確認すべきにあらずして報速ならざるが故に習慣となるの恐るべきを知るにあり、然れば努めて罪を見ず、罪を聞かず、罪を語らず、罪に触れず、罪に交らず、罪を味はざるにあり、パウロが「捫る勿れ嘗ふ勿れ触るゝ勿れ」(西二)といひしもの豈膏酒の害を見てのみならんや、

余は潔癖ある人にあらず、又神経質の人にあらず、然るが故に汚穢しきことを見るも然までとは思はず、又伝染病者に接するもそれが為に神経病をやむ程のこととなし、然れども余亦普通の感覺あり、汚穢しきものきたならざるにあらず、伝染病者恐ろしからざるにあらず、人並には汚穢しく感じ、又人並には恐ろしく思へり、余が本年八月二児に附添ひて万日の避病院に入るや、実に避病院の皮切にして生れて始めてなりき、余は身を此の危険なる避病院の中に投じたるが上に病室の穢げなるを見、病者の下痢するも見もし、聞きもし、尚ほ其の上に殊に殆ど辛抱に堪へざりしは院中何れの所も蠅の多きことなり、「見ぬもの清し」といへるが如く蠅が病毒伝播の媒介をなすとも若し何れより來るかを見ざれば然までにも思はざりしならん

が現在目前にある便器に集り、追はるゝや忽ち食器に集り、時としては何れの蠅が便器より来りて此の茶碗にたかれりといふまで目撃するの不幸に遭遇したれば余何程無頓着なりとて如何で安んずるを得べき、入院して三四日間茶さへ快くは咽に通らず、況して食物をや、余は二三日を歴たる頃木村氏に便通なきを訴へ「勿論三四日はろくに食物も食ひませんから」といひしに氏は驚きて「それぢやア身体を弱らせて看護も何もできるものではありません」と、余も然かく思ひたれば長岡氏に頼みて密に医員の詰所に入りて食を為したり、それより一日、二日と病院に居るに従ひて病毒に慣れ、後には前の如くに恐れず、退院の頃には殆ど全く恐るゝ所なきに至れり、余は實見して前に思ひし程伝染するものにあらざるを思ひ、又看護の為に来り居る者の無頓着なる、不注意なる、而して彼等に伝染せざるを見て弥々恐れざるに至りき、一日余は盛世の病室の前にありて三四人の看病人が廊下に集り居るを遠見したり、一人の婦人茶碗三四個を盆にのせて出だしたりしが一個の茶碗穢れて居たりと見え、取り上げて中を見しが忽ち前掛の端にてクル／＼と拭ひ、直に茶をつぎて他の婦人に与へたり、余は恐ろしきことをするものかなと独り響登して居りしに後余が妻も何方にてか見て居

りしものと見え、「あの人は前掛で茶碗を拭いて」と驚きて語りき、彼等の無頓着すべて皆是の如し、彼等は便器、病者に触れたらんには手を洗へとて石炭酸を給与せられてあり、然れども余は河村といふ男子の外一人も手を洗ひし婦人を見たること無し、而して彼等は余等二人が一々手を洗ふを見て「旦那方はあの臭いかおりッこ（香）の水で手ッこを洗ひめさる」驚き居りき、是の如きを目撃せるが故に余は弥々恐れざるの度を増し、遂には病毒につきて殆ど何をも思はざるに至り、退院後の今日に至りても恐るゝの念は極めて少し、慣るゝは実に恐ろしきものなり、若し是の如く罪に慣れたらんには余は如何なる悪人となるべきか、罪は猶ほ病の如し、之に慣れて恐れざるに至る忽れ。 卅二年九月卅日稿、

### 第百六十九章 鳥尾得庵の無責任

保羅曰はく「爾曹今より後異邦人の如く其の心の邪曲なるに任せて行ふべからず彼等心昏きものなり又知るところなきにより頑なるによりて神の生に遠かれり彼等は恥を知らず好みて凡の汚を行はん為に己を放蕩に付せり」（弗四。十、一七、一十九）、ある人は佛教を以て大なるものといひ、又其の教理を以て高尚



なるものなりとせり、余は佛教を学ばざるが故に固よりよくは知るよし無しといへども佛教の道德、又佛者、佛徒の品行に徴して高尚なりとは思ふこと能はず、若し世に餘り効用もなき空論として見たらんに高尚なる所もあらん、或は深遠といふことをも得べきか、然れども其の教旨、教義の人心を化して真善真義を行はしむるにあらざれば余は之を高尚とせず、又深遠となさざるなり、孔子曰はく「賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、与朋友交、言而有信、雖日未学、吾必謂之学矣」(学而編)、ヤコブ曰はく「信仰もし行を兼ねざる時は乃ち死ぬるなり」(十七)、若し實行の伴ふものあらざれば教旨、教義の何程高尚なるも空論たるを免れず、余は佛者の行為を見て常に此の事を思へり、ある者は彼等の所謂高尚なる教旨を述べ、而して姜を蓄へ、高利の金を貸し、妄語を為し、ある者は彼等の所謂深遠なる教理を説けり、然れども彼等は一切空と信じて惡も為さざるが故に善も為さず、否、彼等には善惡もなく又正邪もあることなし、然れば彼等は徹頭徹尾道德界に喙を容るゝの權はあらざるなり、然れば少しく佛教を研究して其の端に入りたる者には品行方正なるもの無きにあらずといへども深く入りて其の蘊奥に入りたるものは傲慢にして頑なるにあらざれば豪放

にして愚、義務の念なく、責任を知らず、其の説く所は其の心の如く飄飄鯨的たるを免れず、

余は三浦梧楼の朝鮮王妃を殺さしめしを聞きて無善無惡的主義の彼、此の位の惡事を為すは當然なりと思へり、彼は不生不滅を主義とするものなるが故に捕へらるゝや、問はれざるに自白して從容死刑に処せらるべしと思へり、然るに彼は巧に證據を湮滅せしめて無證據にて放免せられ、恬として恥づる所なし、然れども是れ彼の無善、無惡主義にして彼に於ては恥づる所なきなり、鳥尾得庵に至りては三浦程馬鹿にあらず、故に彼の如く馬鹿なることは為さざれども其の傲慢にして頑なる、彼の主義として無責任なるは敢て三浦に異る所なし、余は近頃其の實を見たれば其の顛末を左に記すべし、本年「八」月二日發行東京日々新聞第八千三百十六號を見しに鳥尾得庵の論文を載せたり、此の論文は加藤弘之氏が「道德と法律と抵觸する場合ありや否」との論題を以て論じたるものに対する駁論なり、其の論の當否は余の知る所にあらざれども鳥尾氏の論する所余の腑に落ちざるものあり、よつて余は日報社の手を介して鳥尾氏に左の書を送れり、

突然甚タ無礼ニ似タレ凡止ミ難キ一事有之一書ヲ奉呈仕候、

餘ノ義ニ無之本月二日発行東京日々新聞第八千三百十六號一  
読仕候所先生ガ加藤弘之氏ノ「道德ト法律ト抵触スル場合アリ  
ヤ否」トノ所論ニ付駁論ヲ試ミラレ候趣ノ緒言ノ下ニ同新聞紙ヘ投寄被遊候御論文掲載有之一読仕候然ルニ其ノ末段ニ  
近キ加藤氏ノ論旨ヲ駁セラル、ニ至リ

欧州各國ノ仰ヲ以テ救世主ト称スル耶蘇ノ如キモ羅馬  
ノ羈絆ヲ脱シテ猶太ノ独立ヲ図リシ革命宗教家ナリ  
……猶太國ハ古来ヨリ國教ヲ以テ國ヲ建テシモノナリ  
當時ハ政教一致ト謂ハンヨリハ寧ロ國教ト謂フヲ至當  
トス故ニ耶蘇自ラ教王ト称シ其ノ宗教ヲ改革シ門徒ヲ  
率キテ独立ノ旗ヲ挙ゲシモノタルハ其ノ伝ニ於テ明ナ  
リ

ヲ通説シテ大ニ驚愕仕候次第ニ御座候私義ハ久敷前其督ヲ信  
シテ我が教主ト為シ、否、彼ハ閣下ヲモ救フノ救主ナリト為  
シ、已ニ基督教ノ為ニ伝道ニ從事致候こと二十餘年ニ相成候  
者ニ御座候、然レバ基督ノ伝ト申シ候新約福音書ハ申スニ及  
バズ信徒者又ハ反对家ノ基督伝ヲモ種々通説仕候得共未タ曾  
テ基督ガ「猶太ノ独立ヲ図リシ革命宗教家」タル事、或ハ  
「門徒ヲ率キテ独立ノ旗ヲ挙ゲシ者タル」事等ヲ見聞致候事

続 統 恥 か 記 第十一卷

無之甚以不審千万ノ義ト存候、責任ノ何タルヲ知ラザル一書  
生、道德ノ何タルヲ解セザル一壮士ノ立論トシテハ固ヨリ云  
フニ足ラザル義ト存候得共宗教家タル大名ヲ「負」ハレ候閣  
下ニシテ此ノ論アルハ驚入候次第ニ御座候、初メ一読仕候時  
ハ閣下ガ佛教ヲ信奉セラル、ヨリ或ハ故ニ我が基督教ヲ譏誣  
セラル、ノ意ナランカトモ存候得共斯カル卑劣ナル挙動ノ閣  
下ニアルベキ筈モ無之、然レバ閣下ガ福音伝ヲ誤解セラレタ  
ルモノカ、然ラザレバ故ニ基督又ハ其ノ教義ノ譏誣セル者ノ  
著書ニテモ通説セラレ候ヨリ此ノ誤謬ニ陥ラレ候カト存候、  
閣下ニ對シテ是ク申上候事ハ無礼ナリトノ思召モ有之候半カ  
ナレ凡基督教ニ就キテ我が國ノ知識ノ幼稚ナルハ屢々驚入候  
事モ有之候間閣下ニ於テモ同ジク誤解セラレ候義ニ有之間敷  
ヤト存上候依テ甚タ御手教恐入候得共閣下ガ「其ノ伝ニ於テ  
明ナリ」ト認メラル、点ハ何レニ有之候哉御教示被下度奉願  
候、若シ閣下ニ於テ誤解セラル、所アラバ乍失礼更ニ御參考  
ニ供スル点モ有之可申、私ニ於テ誤解仕居候所有之候ハ、國  
家ノ為ニモ大ニ熟考ヲ要スベキ義ト存候、又「其ノ伝」ト称  
セラレ候モノ福音伝外ノ書籍ニテモ有之候ハ、其ノ書名及ヒ  
著者御指示被下度奉願候、昨日御論文一読仕候テ甚タ安カラ

続 統 恥 か 記 第十一卷

ズ候間乍突然御伺ヒ申上候謹言

卅二年「八」月「五」日

三浦 徹

鳥尾得庵先生

尚ニ御住居ノ地不存候間日報社ニ托シ同社ノ手ヲ經テ御郵  
送仕候答ニ御座候封皮一枚封入仕置候間御返翰ニ御使用彼  
下度候也

然るに七月を終らんとせるに何等の返答なし、よつて日報社へ  
届けくれたりや、又鳥尾氏の住居は何方なりやを照會したりし  
に同社よりはかゝる書面の来りしことなし、何かの行違ならん、  
鳥尾子鳥尾子は小石川関口町百九十二番なりとの回答ありたれば八月  
五日に前挙の書面を直送したり、其ノ後余が家は赤痢患者発生  
にて大騒動を為し忘れて過ぎしが九月に至りて尚ほ返書なし、  
三銭の郵便券を召上げて而して猶ほとは無礼なりと思ひたれ  
ば同月九日返答如何と催促の書状を送りたり、然るに彼もはや  
黙しては居られざりしか十三日附を以て左の葉書を送りたり

度々の御書拝見致し候耶蘇革命の論は其の伝記にて拙  
者の見る所を述しものに御座候今日耶蘇教徒も澤山に  
有之此人々より貴下の如き質問有之とも一々応じて之  
れに答ふる事は出来不申に付實は其俟に致して御答も

不申上事也故に貴下も拙者の説に御不同意なれば御不  
同意にて可然候敢て其是非を決着致候要も無之と存候  
尤も拙者の見る所は羅馬人が耶蘇を極刑に処したる其  
罪惡と認めしものを事實として申すに御座候猶御詮（マ）？  
義可然候今後は一切御書面はおことわり仕候

九月十三日

鳥尾小彌太

一錢五厘が消し飛ばされたる上に是の如く撥付けられたり、餘  
りに馬鹿々々しきが故に是かるものを相手とするは狂人を追ふ  
の不狂人たらんかと思ひしが其の不親切、無責任なるは叱責す  
べきものと思へり、是に於て又在の如き書を送れり、

「今後は一切御書面はおことわり仕候」ト御拒絕被下候ニ付  
質義へ不仕候得共十三日附ノ御葉書ニ接シ候間先ヲ御報被下  
候御手数ニ対シ謝辭ヲ呈シ候序ヲ以テ質義等以後御手数ト為  
ルベキ義ハ差扣候得共此ノ御書ニ接シタルニヨリ私ノ感覺ハ  
一応申述度御一覽被下度候

先ニ私ノ御伺ヒ申上候ハ其ノ文中ニモ認置候通り閣下カ一個  
ノ壯士輩ニモ不被為入候間御言論ニハ十分ノ御責任アル事ト  
存ジ儲コソ耶蘇ヲ以テ反逆人ノ如ク見ラル、根拠ヲ伺ヒ度  
「福音伝ニアラザレバ誰ノ伝記ニテ御覽相成候義ナリヤ」ト

申上候次第ニ有之候、然ルニ十三日附ノ御書中ニハ「耶蘇革命の論は其ノ伝記にて拙者の見る所を述しものに御座候」トノミ有之、固ヨリ見ル所ナクシテ云フ者ハ無之ニ付見ル所タルハ初ヨリ明ナル次第ニシテ御伺ヒ申上候必要ハ無之候、其ノ見ル所ノ根拠ヲ知り度存候ニ付御伺ヒ申上候次第ニシテ前ニ差上候書面ニテ其ノ辺ハ明ナル事ト存候、然ルニ斯カル御答ヲ得候ハ私ノ最モ遺憾トスル所、恰モ不親切ナル政府委員ノ議會ノ反対ヲ受流スカ如キ口調ニシテ責任アルノ言論ニハ無之候故ニ御書ニ接シ候テ閣下ガ私ノ質問ニ対シテ御不親切トノ責ハ當然御免レ不被成義ト存上候、

次ニ「今日耶蘇教徒モ澤山ニ有之此の人々より貴下の如キ質問有之とも一々応して之に答ふる事は出来不申に付實は其候に致して御答も不申上事也」トアリ、若シ果シテ数万ノ信徒ガ前後左右ヨリ質問致候時ハ一々之ニ応セラル、事ノ御困難御推察申上候、然レ凡苟モ言責ヲ重ンズルモノナラバ自己ガ一度口外シタル者ニ対シ新聞紙ナリ、雜誌ナリ、演説ナリニ於テ其ノ質問ニ答ヘラルベキ筈、是レ閣下ガ當然ノ御責任ト存候、然ルニ「問フ者多キ故ニ一々答フル能ハズ」ト云フヲ以テ撥付クルハ学者、紳士ノ体面ニ於テ最モ賤シムベキ事ニ

シテ閣下ノ御処為トシテハ遺憾千萬ノ義ニ御座候、若シ質問スル者アラバ何故ニ其ノ言責ヲ重ンジテ十分ニ論セラレザルヤ、若シ論セラレシモノアラバ其ノ書名ヲ示サル、ハ閣下ノ相當ナル御処為ト存候、事此ニ出デザルハ或ハ閣下ガ御言責ニ窮ンテ遁ゲラル、モノカト被存候

「故ニ貴下も拙者の説に御不同意なれば御不同意にて可然候敢て其の是非を決着致候要も無之と存候」トノ御文面是又私ノ大ニ遺憾ト致候所に御座候、固ヨリ不同意ナレバ不同意ニテ可然義ニ候得共私ヨリ御伺ヒ致候主意ハ反逆人ノ宗教ヲ信ズルハ我が国家ノ為モ善果ヲ収ムル能ハズシテ惡果ヲ来シ候次第ト存候間閣下ニ於テ反逆人ト認メラル、点ヲ伺ヒ候訳ニ御座候、其ノ御説ニシテ取ルベキモノアラバ——心服スルニ足ルモノアラバ私ニ於テ參考ト可致道モ可有之カ、其ノ心服スルニ足ラザルヲ知ラバ其ノ時不同意ニテ可然義ト存候、最初ヨリ不同意ナレバ不同意ニテ可然トノ御言ハ後進ヲ待ツ先輩ノ言ニ無之、若シ私ノ質問アラザル時ニ此ノ御言アリトスレバ敢テ不可ナシ一度私ヨリ伺ヒ候時ニ於テ此御言アルハ國家ヲ思フ閣下ノ言トシテハ感服シ得ザル所ニ御座候

最後ニ「拙者の見る所は羅馬人が耶蘇を極刑に処したる其の

罪惡と認めしものを事実として云々」、此ノ御言ハ稍々私ノ御伺ヒ申上候点ニ対シテノ御答ニ近ク候得共未タ満足ハ仕兼候、御所見トシテハ確實ノ根拠アル御論ニハ無之候、政府ガ罪惡ト認メタルト云フヲ以テ直ニ宗教、道德等ノ論拠トスルハ危險千万ノ事ニテ古ヨリ政府ガ義人ヲ有罪トシテ刑シタルノ例ハ少カラザル事實ナルニ之ヲ思ハズシテ確實ナル證據アルニアラズ、一定ノ見識アルニアラズシテ唯「見ル所」ヲ以テ其ノ根拠トシ、誤謬、過失ノ例ニ乏シカラ乏シカラザル政府ノ処為ヲ基礎トシテ自己ノ意見ヲ定ムルガ如キ決シテ学者ノ満足スル所ニアラズト存候、故ニ閣下ノ此ノ御答ハ質問ニハ相當致候得共確實ナル御根拠ニハ足ラズト存候、

故ニ唯今ノ私ノ感スル所ヲ無遠慮申上候得ハ閣下ハ御言論ニ対シテ十分ニ責任ヲ有シ玉フニアラズ——有之能ハズ、不都合ノ言論ヲ為シテ遁ゲラレタル事ト存候、

右ハ私ガ御答書ニ接シテ直ニ発シ候所ノ感覺ニ御座候尚ホ御質問申上度存候得共「おこわり」ニ付不得止私ノ所感ヲ陳述仕候御一読被下候へ、幸甚ニ御座候敬具

視よ、氏は余が問ふ所の要点を見ざるにあらざるべし、彼は確に見る眼を有せり、然るを斯く前後不都合なる書面を送りて拒

絶するものは自ら無責任なる放言を知れるが故なり、是に於てか佛教を信奉するものゝ道德には確乎たる基礎なきを知るべし、佛者の立論の飄蕩鯨なるは今に初めぬことながら彼等には一定の基礎あるにあらざるが故に真に止むを得ざるの結果といふべし。 卅二年九月卅日稿、

## 第七十章 下等動物に道德がありますか

馬拉基曰はく「我は大なる王また我か名は列國に畏れらるべきなればなり萬軍のエホバこれをいふ」(十四。)

保羅曰はく「我儕真理に逆ひて能なし」(哥後十。三。八。)

佛教の教理の彼我矛盾、前後撞着したるは大乗と小乗とに於て明白なれども其の枝葉に至りて互に衝突するは彼等の為に氣の毒なることなり、一方に阿弥陀の利益を説きて極楽往生を勧むると思へば一方に心外無別法を説き、甚しきに至りては一人の口よりして弥陀の本願と寂滅為樂とを聞くことあり、盲人の國には片目も王たり、若し野蛮國民に教へたらんには其の矛盾を見るの明なきが故に或は暫く満足することあらんか、然れども真理の光明を以て彼等を照したらんには魑魅魍魎の朝敵の前にあるが如く彼等は四離滅裂して了らんのみ、彼等は今の姿を以

ては到底文明の世に立つこと能はざるなり、

久しき以前のことなり、浅川 広湖氏が任に甲府にある頃なり、所用ありて上京せんとて八王子町に着したり、食後無聊に堪へず、出でゝ市中を逍遙したりしにある寄席の前に演説會の看板あり、何かと見れば佛教の演説會なり、名ある人の名は見えずりが七八人の僧名を掲げ何様大集會らしく見え、チラリ、ホラリ入る人をも見たれば慰みにとて中に入りしに今や、最初の一人席にありて演説中にて聴衆は餘り多からず、一方に二三十人の一群あり、一方に百人餘とも見ゆる群あり、氏は適宜の所に座を占めて聞き居たるに一人の若僧は彼の輪回説を持出だして罪を作る者は未来蓄生道に墮ちて牛馬に生るべし、一度蓄生道に落つるも若し善根を積みたらんには人間界に生るゝことを得べしと、浅川氏は是くきゝて面白く思ひたれば手帳をいだして其の名と演説の大意を筆記したり、何れも兄たり難く弟たり難き人物先づ無難に演説は終りたり、彼等は格別の反対も無かりしを以て少しく調子付きたるものかよせばよきに終りて若し質問したき者あらば申出でられよといふ、浅川氏は戯に質問したしと乞ひしに彼等は大に驚きたるものゝ如く頓には返答もあらざりしが漸くにして此方へとて榮屋に導かんとせり、氏は否

聴衆の前こそ望ましかれ、此の聴衆中には余と同じ疑義を抱ける人もあるべし、よし他に疑義なしとするも貴君等は一人も多く貴君等の主義を聞かせたく思ひたまふならん、此の言をきゝて彼等は榮屋に入り、喃々論じ居りしが遂に七八人の辨士ソロ／＼と出で来りて一列に並びたり、氏は先づ問ひて何某といはるゝ何番目に演説せられたるは何れの方なりやと、一人は余なりと答ふ、氏は先づ其の御方に質問せんとす、下等動物には道徳性ありや、如何、彼俄に答へず、餘程困りたるが如く見えしが彼苦し氣に「無きやうなり」いふ、傍にある一僧は「否、あるべし」、一僧は「否、なからん」と忽ち彼等は二説に分れ、ありといひ、無しといひ、互に口角泡を飛ばして紛々擾々、何時果つべしとも見えず、是に於て浅川氏は中裁して曰はく余は貴君等に討論を請ひしにあらず、何某辨士の信する所を聞かば足れり、何某は指名せられて恥かしくや思ひけん、余の信する所にては無しと、氏曰ふ「無しとの御説ならば他の一義を質問せん、貴君の御説によれば一度蓄生道に落つるも若し善根を積みたらんには人間界に生るゝことを得べしといひたまひしが道徳性なき善生が如何にして善惡を為すべきか、善は善なるが故に忤んで之を行ふ時に善なり、道徳性なきものゝ善を行ふこと

ありとも自己の選択に出でたるにあらざるが故に之を功德とすべからず、然れば道德性なき下等動物が善を功として人間と爲るの理あるべからず、且つ加之他に一の奇なる事實あり、学者の研究、調査する所によれば全世界の表面にある下等動物、即ち禽獸、蟲魚の類は次第に其の数を減じ、既に其種類を全く滅したるものすらあり、之に反して人類は如何と見るに年々歳々其の数を増加し、ある杞憂家の如きは久しからずして人類居住の為に地の陝きを訴ふるに至らんとし、是く一方には下等動物の数を減じ、一方には人類の数を増すの事實ありとして而して貴君の説を以てすれば彼等動物は続々として善を爲し、以て未來に人の爲りて生るゝものなりとせざるを得ず、貴君の説を真なりとすれば学者の論する所を偽とせざるを得ず、學説を以て真理なりとすれば貴君の説は荒唐、無稽とせざるを得ず、何れを真として可なるべきや、此の言を聞かや敵手は未だ何等の答もなきに他の一人は彼に云へり「それ見たまへ、だから僕は道德性があるといつたんだ」、彼曰はく「でも無さうではないか、若しあるとするなら善惡の説で固るだらう」、又再び討論會初まらんとす、浅川氏は笑を忍びて曰はく「佛教に於て一定の説なく、又貴君等に於て分らずとならば余は強ひて質問

はしますまい、余は貴君等が今一層學はれんこと——否、佛教を學ばれんことを忠告せんとす、人を集めて自己の説を鼓吹せんとならば自ら信ずる所あらざるべからず、一定の主義もなく、所信も無くして人を説かんとするは嗚呼なり、僧侶等は瘡の如く、目のみ見張りて一言もなし、浅川氏は辭して去らんとせしに一方の二三十人中より二三人出で来り、懇懇に氏に挨拶して曰はく「先生の御姓名は何と仰しやいますか、私共は當地の信者でございます」と、氏は公然名乗るも如何と思ひたれば名刺を出だして「私は一夜宿りの旅人です」とて急ぎ去りしが二三人は入口まで来りて禮を述べ、御通行の節には是非教會を御尋ねくださいましといひたりと、氏はいふ彼の人々は僧侶の攻撃にあひて餘程困り居りし所なりしならん、余の質問にて僧侶等閉口したれば復讐してもらひし心地したるならん、彼等はトンダ者にひどい目にあひたりと愚痴こぼしたるならん、基督曰はく「凡て相争ふ國は亡び凡て相争ふ邑や家は立つべからず」(太十二)と、彼等の教理は互に相争へり、我が真理の前に如何で亡びざることあらんや。

卅二年九月卅日稿

## グリフィス・コレクションの明治学院資料

福井県立武生工業高校教諭

山下 英 一

### はしがき

明治学院大学英文科の卒業生である私は、ヘボン、ブラウンの名は在学中から親しんできた。しかしウィリアム・エリオット・グリフィス（一八四三—一九二八）というお雇い米国人教師について研究するうちに、ヘボン、ブラウンはいうまでもなくフルベッキ、ワイコフ、植村正久、井深槐之助といった明治学院の恩人たちのことを知るにいたり、ますます母校について強い関心を持つようになった。

そこでこれまで私がグリフィスについてその文献をグリフィスの母校、米国ニュージャージー州のラトガース州立大学の文

グリフィス・コレクションの明治学院資料

書館で調べてきて、日本のキリスト教にも深いつながりを持つグリフィスのことから、明治学院の歴史に必要な文献もあると思つて、できるだけまとめたのがこれから述べる資料である。もちろん識者のなかにはこれについてすでに多くをご存知の方がおられると思う。とくに高谷道男先生のように私などよりはるかに以前、グリフィス文書を調べておられ、この方面でも広い視野をお持ちの先生がおられるので、かえって自分の恥をかくようなことになるかも知れない。

グリフィス・コレクションとは

グリフィスは東西文明の交流と融和を計ろうとした真摯なバ



# グリフィス・コレクションの明治学院資料

トリオット（愛国者）であつたと思われる。明治四年三月、ラトガース大学を卒業したばかりの青年（二十七歳）グリフィスは、福井藩（藩主松平春嶽）の藩校明新館の理化学お雇い教師（三年契約）として福井に來た。約十カ月、米国式化学実験室を設置して若い士族、僧侶の子弟に自然科学を通して新しい西洋文明を伝えた。明治五年一月、明治政府の要請（フルベッキの依頼）で新しいポリテクニク・スクール（これは実現せず）の理化学教授のため東京へ、しかし大学南校の教授となり自然科学などを教授した。明治七年八月帰国。米国の改革派教会の牧師をつとめ、他方数多くの著作をあらわし、最晩年はオンタリオ湖畔のブラスキで暮していたが、避寒のためフロリダ州に來て八十五歳で急死した。墓はニューヨーク州スケネクタデー市のデール墓地にある。

ついでにグリフィスの所属した学会の名と活動情況について少し述べておくと、

日本と朝鮮の亜細亞協會、ライデンのオランダ文学協會、ミドルバーグのニュージールランド科学者学会、米国歴史学会、米國芸術文学研究会、明六社などの学会と、大学で説教及び講義（ハーバード、エール、シカゴ、コーネル、ラトガース）、寄稿

（ネーション、アウトルック、インディペンデント、センチュリー、ノース・アメリカン・レビュー、フオーラム、クリティック、ハーバーズ、スクリブナーズなどの新聞雑誌）がある。ラトガース大学（ニュージャージー州、ニューブランズウィック市）のアレクザンダー図書館にあるグリフィス・コレクションは、グリフィス個人の膨大な資料で、これは一九二九年と一九三四年、遺言により寄贈された蔵書（原稿を含む）、一九六四年孫娘のキャサリン・G・H・ジョンソンから寄贈された手紙、日記、メモ、切抜が紙箱などに整理されて、ひと目で見渡されるように書架に収蔵されてある。

## 資料一 明治学院普通部一覽（自明治二十五年至明治二十六年）

（一覽から抜粋）

イ、目的 本学院ノ目的ハ学生ヲシテ英語ヲ以テ完全ナル基督教主義ノ高等普通ノ教育ヲ受ケシメ智徳兼備ノ学生ヲ養生スルニアリ……愈々進テ整備ヲ求ムルノ務ヲ怠ラザレバ遂ニ欧米各国ノ大学校ト比肩シテ其盛大ヲ競フニ至ルノハ亦決シテ期シ難キニナラザルヲ信ズ

ロ、職員 理事員長 マストル・オフ・アーツ、井深梶之助

會計

マーチン・エヌ・ワキコフ

博士

ギドー・フルベッキ

石本三十郎

植村 正久

島田 三郎

役員

総理

井深梶之助

書記

ジョン・シ・バラ

教授

英語、商業科

ジョン・シ・バラ

物理、化学

マストル・オフ・アーツ

(ロットガルス大学校)

マーチン・エヌ・ワイコッフ

英語、英文学

マストル・オフ・アーツ

(ロットガルス大学校)

ハワルド・ハリス

英語、生理

石本三十郎

注・ロットガルス大学校とはラトガース・カレッジのことである。

資料二 写真

グリフィス・コレクションの明治学院資料

一、一八七一年女学校(グリフィス注・一九一二年現在、大きな建物になって活動している) 横浜、米国ミッションホームの校舎と庭。

注・井深梶之助とその時代第一巻二九六頁の共立女学校校舎と同じもの。

二、宣教師住宅

注・イ、明治学院九十年史の岡見富雄画、明治三十七年。

ロ、井深梶之助とその時代第一巻一五頁の明治三十七年の宣教師館 岡見富雄画伯、普通学部生当時のスケッチ。中央はライシャワー館、右はランチス館として描かれている。

三、ブラウン博士の家から見える横浜と港

注・グリフィス著 A Maker of the New Orient 一九二頁。

四、イ、井深梶之助 明治学院総理(米国留学中の写真)

注・井深梶之助とその時代第一巻口絵の写真 高谷道男氏提供。

ロ、壮年時代の井深梶之助(右同書の口絵写真と同じ)

資料三 蔵書

1. Dutch and English Testament, 1886.

グリフィス・コレクションの明治学院資料

i) Warera no shu iesu kiristo no shin yaku zen sho.

(The New Testament in Japanese Translated by J. C. Hepburn, M. D., LL. D. Yokohama printed by the Seishi-Bun-Sha for the British & Foreign Bible Society 大英国聖書会社 1886.)

ii) A Synopsis of all the Conjugation of the Japanese Verbs, with Explanatory Text and Practicals Application by G. F. Verbeck.

横浜 Kelly & Welsh, Limited 1887.

iii) Calendar of the Meiji Gakuin Tokyo, April 1890.

iv) 新約聖書卷之二 馬可伝福音書

v) 摩太福音書 摩太福音書之終

vi) 亞米利加之伝道使ゴブリ訳 横浜 明治四年七月刻成

vii) 路加伝福音書

資料四 グリフィス宛の手紙

i) フェリスからグリフィスへ(発信・ニュー・ヨーク)

一八七〇年十一月十六日付

抄訳・オグル博士は越前へ行くのを批難する。誰もまだ江戸へ自ら行くと申し出ていない。なぜ君が江戸の大学へ行かないのか理由が分らない。フルベッキ氏が望んでいるなら……良き領主が君をその目的地に無事とどけ、君を役に立ててくれるものと思う。君の仕事を中心から興味をもって見つめるだろう。

ii) フルベッキから福井のグリフィスへ(発信・江戸)

i) 一八七二年十二月二十一日付

抄訳・ポリテクニク・スクールの物理と化学の教授として江戸へ来てほしい。条件は福井と同じ(馬を除いて)。器具は十分集めてある。万難を排しても来い。代りの者を見つけるのはまかせなさい。

ロ、一八七二年一月八日付

抄訳・今月の後半までにこちらに来てほしい。万事が関係者にとって満足に収まるだろう。神の偉大な愛により万事が好都合になるだろう。

福井藩雇いのグリフィスは明治政府の招聘を受けたが、フルベッキの意見に従い江戸へ出発する。明治五年一月二十二日大雪。

iii) オルトマンからニュー・ヨーク州イサカ市のグリフィスへ

(発信・芝区明治学院) 一九一九年

抄訳・フルベッキ博士が長崎に着いてから六〇年の記念が近づき、それを祝うために何かしたい。準備中の“The Japanese Verb and Postposition”という小冊子はフルベッキの“Synopsis of all the conjugations of the Japanese Verbs”を基礎にしている。ジャバン・エヴァンジェリストにのせるフルベッキ博士の記事を書きたい。ついでにグリフィス氏の秀作“Verbeck of Japan”を参考にしたい。写真の利用を頼みたい。時間がないので使ったあとでの許可を願うので心無いと思われまじょうが。……グリフィス氏の日本人への変らぬ愛情、フルベッキ博士への大きな尊敬が資料の借用許可を私に与えて下さるものと思う。いうまでもなくヨーロッパ、アメリカ、アジアの三つの大陸での私の仕事はフルベッキ博士と似ている事実もあって。……私の他の不足な面の最も寛大な批評家グリフィス様。

四、ワイコフからグリフィスへ

イ、一八七七年一月四日(発信・明治学院)

ユニオン神学校で学ぶグリフィスがワイコフに福井の人達との消息をたずねた、その返事。

グリフィス・コレクションの明治学院資料

ロ、一八九二年九月七日(発信・下高輪)

グリフィスはボストンのショーマット組合教会の牧師。

抄訳・この国の議会制度について予言を述べたくない。あなたの方がこの問題については知識があると思う。あなたなら少し離れて問題全体がよく見える。ここは小さな衝突がいくつもあつて人は困惑する。私がつまらぬしはばペンを使うように希望されるが、たとえ私のペンが流暢な道具でなくても本当はそうしたい。しかし私の務めは本よりも人間を、私自身と私の経験を書くことにむしろあるように思われます。私の時間と体力は手元の仕事でいっぱいであります。

ハ、一八九三年四月六日(発信・明治学院)

グリフィスはショーマット組合教会牧師。ワイコフ夫妻は日本に、四人の子供はニューブランズウィックに居る。グリフィスから日本の諺の本を捜してほしいと頼まれる。

ニ、一八九七年七月三〇日(発信・ニューブランズウィック)

グリフィスはニュー・ヨーク州イサカ市の組合教会牧師。

ホ、一八九七年九月一〇日(発信・ニと同じ)

抄訳・あなたが言うように日本は“a puzzle”である。日本人を親しく知れば知るほどわからないことが多い。しかし日本

グリフィス・コレクションの明治学院資料

の将来について私は全く希望を持っている。日本の進歩は必ずしも順風に帆をあげていない。あなたも知るように日本人にも外国人にも日本の協力者にとって不満がなくもない。そして私は前途にはどこほ道がたくさんあるというより他に期待はないが、日本は着々と前進しているし、前進しつづけるだろうと信じている。

へ、一八九九年一月二十四日（発信・明治学院）

グリフィスはイサカの教会の牧師。

抄訳・妻と長女が私と昨年九月に日本に帰った。長女は今、横浜のフェリスセミナリーで教えている。しかしエヴァンジェリストの仕事につくために二、三カ月中に青森へおそく移されるでしょう。フルベッキ氏の資料はあなたの持っている以外のものは、その家族からもミッシェンボードからも見つかりません。フルベッキ氏の写真もありません。私はフルベッキ氏の簡単なスケッチを書いてフルベッキ大佐に送ったから、それがあなたの手に渡ると思います。

グリフィスは一九〇〇年に“Verbeck of Japan”を出版した。

ト、一九〇二年十一月十四日（発信・明治学院）

グリフィスはイサカの教会の牧師。

ブラウン伝（一九〇二年出版）をもらったお礼。

抄訳・追伸。ミセス・ラウダー（ブラウン博士の娘）がこの手紙を運ぶ船で日本を去ります。YMCAで先週の日曜日、約四百名が集まり、若い青年からキリスト教の仕事の意見を聞くために選ばれたスピーカー三人はすべてブラウン博士の生徒でした。

へ、一九〇六年三月一日（発信・明治学院）

グリフィスはイサカの教会をやめて文筆生活に入っている。

五、アンナ・ワイコフ夫人からグリフィスへ。

イ、一九一二年十二月四日（発信・信州松本大柳町九六二）家で日曜の午前、サンデー・スクール。百人の子供が集まる。月曜日夜、子供らの父母兄弟姉妹と集会。

ロ、一九一三年一月二十六日（発信・イ、と同じ）

水曜日のサンデー・スクールは松本近くの村。土曜日のサンデー・スクールは汽車で一時間、人力車で一里。火曜日、長野上諏訪で婦人会。金曜日は家で婦人集会、木曜日は家で訪問者を迎える。

ハ、一九一四年十二月二十七日（発信・イ、と同じ）

バラ博士を迎える。日曜日朝は説教。午後は子供と話す。老人なのには珍しい活動家。

ニ、一九一五年一月二十八日（発信・イ、と同じ）

ホ、一九一八年十月二十六日（発信・東京上大崎八〇四）

ヘ、一九一九年十月二十一日（発信・ホ、と同じ）

ジャパン・タイムズがアメリカを「セルフィッシュユアメリカ」と報道した。

ト、一九一九年十月二十六日（発信・ホ、と同じ）

グリフィスの姉マーガレットが東京の竹橋女学校で教えた頃（一八七三年）の写真の女生徒の消息について問合せてきたグリフィスへの返信。

資料五 グリフィスの東京日記（明治学院と横浜を考える上

で参考になるかも知れない）例。

イ、一八七四年七月一日（水曜日）

抄訳・横浜行の九時三〇分の汽車に乗った。……ブライン氏とブラウン博士の家を訪ねたが、ロバートとゴードン・ブラウン夫人は留守。六時十五分の汽車に乗る。レゼンダー將軍とビングラム大臣は馬で行く。

グリフィス・コレクションの明治学院資料

ロ、一八七四年七月十八日（土曜日）

抄訳・早く起きる。八時十五分の汽車で横浜へ。忙しい日。

用務の片を付ける。夜、ブライン夫人の家でお茶。ストア夫妻、ミラー、ヘボン、サイル等を訪ねた。平底船から十時十五分、コロラド号に乗船。見送りのため、大勢の友達が船に十二時四十五分までいた。暗い夜。燐光が見事。港の明りが美しい。

筆者注・この日記はグリフィスと姉マーガレットが帰国の日のものである。

資料六 グリフィスの姉マーガレットへの手紙

例

イ、一八七二年二月十二日（発信・江戸）

抄訳・ブライン夫人の存在の大きなめぐみは、社会にキリスト教の要素が発達し、ユニオン教会が組織されたことです。ブラウン博士がその牧師をつとめています。しかし学校で日曜を除き毎日、六時間教え、聖書の翻訳を続け、説教の仕事はつらいので、キリスト教徒の兄弟として私はブラウン博士の手伝いをする必要はありません。

ロ、一八七二年三月十日（発信・イ、と同じ）

抄訳・まだ講義を始めていない。学校がまだ数日、開校にならない。改築がだいぶ必要なのです。しかしその間、日本語を学んでいて、あいかわず忙しい。先週の土曜日、横浜へ行つてその新しいユニオン教会のために説教をしました。ブラウン博士はその牧師で、ブライン夫人が管理にあたっている。劇場のような建物で礼拝をします。とてもいい所で約二百名が出席した。午後、小さな宣教チャペルでバラ氏のバイブル・クラスに出席。約五十人の全部日本人が出席、日本語で教えていた。今日、そのうち八名が洗礼を受けて、教会と一体になった。これが全く何の妨害もなく公然となされた。夜、ブライン夫人の家の客間で人が集まって祈禱会がありました。食堂はバイブル・クラスの日本人でいっぱい。今週、江戸に新しい教会の建設を始める。それに私は一〇〇ドル寄付をした。時々、芝へ行く。そこにアメリカ科学委員会が置かれてある。

ハ、一八七二年六月六日（発信・イ、と同じ）

抄訳・マギー（姉マーガレット）の手紙にある寮制の女学校について思い切ったプログラムを作成して文部大臣に送っている。私とフルベッキ氏の二人で最良と考えたことをしまし

た。

#### 資料七

グリフィスの日本通信（これはグリフィスが日本滞在中に米国及び日本の新聞に寄稿した文章を筆者が名付けて日本通信としたものである）。

例。

「日本からの手紙」一八七二年三月二十三日 江戸にて。

（クリスチャン・インテリジェンサーへ寄稿）

抄訳・福井から出てきた田舎者。小さな石造のチャペル。そこにバラ氏が働いていた。日曜日、日本人の男女が聖書を学ぶために満員になるほど集まる。三月十日（日曜日）、七人の日本人が洗礼を受け、神の聖餐にあずかる。日本人が出たあと、がつしりした腕の勇敢な水夫が聖書を学び、共に祈りに集まる。夜は米国ミッションホームの客間に英米人がいっぱい祈りに集まった。大きな食堂はバラ先生の教えを聴く日本人であふれる。

#### 資料八

グリフィスの著書（グリフィスの日本に関する著書は多い。日本人学生のための英語教科書、日本昔噺、ペリー、ハリスなどの伝記、日本の宗教、とりわけ重要な「皇国」(The

Mitado's Empire)」などがあるが、以下、とくに明治学院と関係のあると思われる著書を選んでみた。

イ、"A Maker of the New Orient, Samuel Robbins Brown, Pioneer Educator in China, America and Japan, The Story of His Life and Work," New York: Fleming H. Revell, 1902.

サムエル・ロビンズ・ブラウンの生徒で、彼等の愛する師の物語を捧げる。永遠の偉大な日本万歳という献辞がある。グリフィスはこの伝記を書くのに、ブラウンの両親、友人、米国改革派教会伝導局への手紙、ブラウンのノートブックや日記に、友人の情報とグリフィス自身の四年間の日本体験と十八年における改革派教会所屬を参考にしたと序に書く。また、米国の詩人ホイットマンの "The Pioneer"、英国の詩人アーノルドの "Rugby Chapel" の引用で物語の始めと終りを飾っているのを見てもグリフィスの文学趣味がわかっておもしろい。

ロ、"Verbeck of Japan: A Citizen of No Country, A Life Story of Foundation Work, Inaugurated by Guido Fridolin Verbeck," New York: Fleming H. Revell, 1900.

グリフィス・コレクションの明治学院資料

グリフィスはこの著をフルベッキの協力者であり、子供達の母としてのマリア夫人に捧げている。行動の人フルベッキのことをグリフィスは潜函で働く橋造りや戦争の様子も分らず回転砲塔で戦う火夫のように、人の見えない所ですすんで働く人で、自分について書かなかった人だと評し、この伝記をフルベッキを知らない人のために書いたと序で述べている。

ハ、"Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates: A Life Story of Toil for Christ," Philadelphia: The Westminster Press, 1913.

この序でグリフィスはフルベッキ、ブラウン、ヘボン、ウィリアムズ(一八二九—一九一〇、米国聖公会宣教師)ら四人の宣教師を米国が日本にもたらした最大の贈物であると述べ、ヘボンをイエスの忠誠なサムライであると言う。このヘボン伝を書くにあたって、ヘボン夫人からはグリフィスがその最適任者であると名指され、息子の S・ヘボンから父の日記や文書を送ってもらって執筆、これら宣教師の二代目の息子と娘に捧げた。"Honda The Samurai: A Story of Modern Japan,"

Boston: Congregational Publishing Society, 1890.

これはグリフィスの書いた唯一の小説で、仮名、実名を織り



込んだ臨場感あふれる面白い読み物である。話の舞台は福井と横浜で下級武士の息子が攘夷の嵐のなかで新しい西洋文明に接触することによりどのような思想形成をしたかを物語るのであるが、横浜ではヘボン、ブラウン両博士について聖書の日本語訳を手伝い、妻子とともにキリスト教信者になる。「新日本の今日をあらしめ、またキリスト日本のあるべき姿に大いに力のあつた宣教師（生けるも死せるも）の貴い結果に深甚の感謝をこめてこの物語を献呈する」との献詞がある。

ホ、"The Lily Among Thorns," Boston: Houghton, Mifflin & Co., 1889.

ボストンのショーマット組合教会の牧師をしていたグリフィス四十六歳の時に出版した旧約聖書「雅歌」"The Song of Songs"の研究書であるが、一八八四年の英語改訳の「雅歌」が原典に忠実な劇的構成をとり文学性を重視していると見ていることである。このテーマとなったシュラムの娘の愛は、グリフィスの妻キャサリンの「女性として、妻として、母として」の愛への賛歌になった。シュラムの娘は姿の见えない男への純愛と節操のため、ソロモン王の誘惑に毅然として戦った女性であった。そこにグリフィスは女性の鏡を見たのだらう。文学とし

ての聖書を考えるにふさわしい書である。

〃 "Christianity in Japan"

一八七〇年から一八七四年の日本滞在と一九二六年から一九二七年にかけて六カ月間の日本再訪を通して見た日本のキリスト教についての感想で、"The Japan Christian Intelligencer"に載ったグリフィス最後のエッセーの一つ。日本におけるイエスの宗教の前途は非常に明るいといっている。

抄訳

(1) 日本人がたとえ学問があり、真心があっても、全く日本的な、いや大いに日本的なキリスト教を急いで創造するのは適当でない。

(2) 日本にとって希望がある。それは忠誠がこの国民の根本的美徳であり、その伝統を勇気づけ、イエスへの日本の忠誠を我々の最高の抱負にしよう。

(3) 日本でキリストを愛し、その心と行いを真似たいと願っている人たちは、キリスト教とキリスト教文明は同じものではないと信じている。

(4) 神道と仏教に深く根ざしている最上のものの正しい復活は、キリスト教の組織づくりに最良のものになると信じる。

(5) 一口に言つて、すべての国は東洋と西洋が提供できる最良のものから生まれた一つの理想を歓迎し受け入れるだろう。これらの考え方には排他性が全くない。グリフィスの大きな特色である。

4. "Agitated Japan: The Life of Baron II Kamon-no kami Naosuke. Revised by Wm. Elliot Griffiths, D. D. New York, D. Appleton & Co., 1896.

島田三郎著 開国始末の英訳(斎藤顯理訳)

抄訳・全世界、全人類の前にある最も強力な問題は東洋文明と西洋文明の和解であり、この仕事こそ政治家、哲学者、キリスト教徒が貴い力をかけるに価する。この困難で微妙な仕事に成功した人に、ウィリアムズ、ベリー、ハリス、パークス、岩倉らにまじつて井伊掃部頭は少しも負けていない。彼は「いばり散らす」人としてしか日本も外国も書いていない。殺された大老にどんな汚ないことも言った。しかし井伊には島田三郎がいた。侮蔑と悪口が一掃されて、今ここに真の愛国者を見る。古い日本人に共通の人間の欠点はあるが、時代の兆候を読みとり、インドの運命とシナの屈辱から自国を救った。内側から門をはずして日本をキリスト教国の文明に開国した。流血を見ず

グリフィス・コレクションの明治学院資料

にアジアが文明化され、キリスト教化されるのを見たい米国人、西洋が東洋から恩恵を受け入れて、東西相互の善意による幸福を期待する米国はこの書を歓迎するだろう。(グリフィス序)  
チ、"The Bible Verified" by Alfred W. Archbald

明治三十年五月「聖書の證明」として基督教書類会社より出版。石本三十郎訳 その「緒言」の筆者は「皇国」の著者、神学博士ウイリヤム・エリオット・グリフィス(ニューヨークイサカに於て)でその石本三十郎訳を記すと、

聖書は諸文学中に於て不二、無双のものなり、願は彼の謙遜なる熱心なる著書に聖書の研究を奨励し神を凡て求めつつある者の信仰を強めんことを、靈魂を救ひ神の栄光を願はし風景美麗なる日本として道徳上愛すべき国となす為には神の話を敬い虔みて研究するに如くものなし、願は万国民を一の血統より出しその住する處の境界を指定し終へる神は上天子より今日出生する赤児に至るまですべて日本の人民を常に祝福し賜はんことを願は聖靈は「大和魂」をして最キリストに忠信なるの意たらしめ賜はんことを。

## あとがき

終りにあたり、明治学院は本質的にいって聖書とキリスト教宣教と英学を母体にした伝統のある学舎であるとの感をますます深くしている。

明治学院の揺籃期前、つまりグリフィスが日本に滞在した時代にヘボン、ブラウンら宣教師の横浜居留地での活躍にグリフィスがいかに関心をもち、感動をしたかを知った。

グリフィスのヘボン、ブラウン、フルベッキの伝記もそのための踏査であったように思う。そもそも明治に於て学校がその姿をあらわすための時代の要求は宣教師とお雇い外国人の両面の活動に待つところが大きかった。とくにフルベッキ、グリフィスは教育の分野に入っていた。教会を建て、学校を建てるという点では植民地政策ともとれるが、日本にとって大きな特色はこれら宣教師やお雇い教師がすでに日本の長い豊かな伝統にまず驚き感心して、そこから日本人のための教会、学校をつくりをどうすべきか考えていったことだ。ヘボン、ブラウンの塾や横浜のユニオン教会の設立がそれである。

こう思うと明治学院の歴史に少し視点を变えてグリフィスからの言及がなされてもいいのではなからうか。

## グリフィス参考文献

グリフィスと福井（山下英一著 一九七九年、福井県郷土新書5）

明治日本体験記（グリフィス 山下英一訳 一九八四年、平凡社 東洋文庫430）

（一九八五年六月二十三日）



- ㉗ 金東仁「글을산의 거품」(「文壇の収獲」)〈創造〉7, 1920. 7, p. 68.
- ㉘ 横山春一「蘆花文学とキリスト教」〈文学〉1979. 4, p. 29.
- ㉙ 阿部光子「蘆花の復活思想と終末観」〈解釈と鑑賞〉1967. 6月, p. 65.
- ㉚ 大岩鉉「白鳥はクリスチャンであったか」ibid., p. 42.
- ㉛ 佐古純一郎「芥川龍之介における芸術の運命」前掲書, p. 154.
- (\*1) 李王朝の正二品の文曹の長。
- (\*2) 四級公務員の別称。
- ㉜ 1984. 12, 筆者との対談による。
- ㉝ 金東仁「文壇三十年의 자취」全集8, p. 424.
- ㉞ 磯田光一「芥川龍之介論」〈第16次新思潮〉3号, 1962. 2月。
- ㉟ 久米正雄「新思潮座談会」〈文芸〉1950. 6月。
- ㊱ 吉田精一「態度の人」日本近代文学大系「芥川龍之介」所収, 1970. 2。

註

- (1) 張徳順「韓国文学史」同和出版社, 1977, p. 369.
- (2) 趙演鉉「韓国現代文学史」成文閣, 1980, p. 428.
- (3) 白鐵「韓国文学의 길」(「韓国文学の道」) 新丘文化社, 1968, p. 175.
- (4) 金東仁「文壇三十年의 자의」(「文壇三十年の足跡」) 東仁全集 8 卷, 弘学出版社, 1964, p. 392.
- (5) 「水雲崔濟愚と東学思想」韓国古典研究会編, 地下鐵文庫, 1981, p. 55.
- (6) 「大韓毎日申報」1905. 8. 3日付
- (7) 「独立新聞」1899. 8. 12日付
- (8) 「毎日新聞」1898. 5. 28日付
- (9) 「独立新聞」1899. 9. 12日付
- (10) 金允經「朝鮮文学及語文学史」Seoul, 1933, pp. 564-565.
- (11) 崔鉉培「Han-kul と文化」에 늘 (We Sol) 崔鉉培博士古稀記念論文集, 1968, pp. 197-201.
- (12) 趙演鉉, 前掲書, p. 29.
- (13) 李康彦「金東仁と Realism 文学の限界」『嶺南語文学』1975, p. 108.
- (14) 李善榮「道德と美学」『現代文学』1969. 3月号, p. 335.
- (15) 金東仁「3. 1 자의 8. 15」(「3・1 独立運動から 8・15解放まで」) 東仁全集 8, 弘学出版社, 1964, p. 55.
- (16) 金東仁「文壇三十年의 자취」(文壇三十年の足跡) 東仁全集 8, p. 392.
- (17) 金東仁「金妍実伝」全集 2, p. 279.
- (18) 金禹昌「韓国現代小説의形成」(의) 民音社, 1978, p. 107.
- \* 赤木祐平(本名, 池崎忠孝)
- (19) 新島繁(本名, 野上巖)「大正期の思想と文学」(文学) 1957. 4月, p. 1.
- (20) 生松敬三「大正期の思想と思想家たち」(文学) 1964. 11月, p. 114.
- (21) 中村真一郎「芥川龍之介の世界」青木書店, 1956, p. 173.
- (22) 高田端穂「反自然主義文学」明治書院, 1963, p. 152.
- (23) ルナン「イエス伝」津田稔訳, 岩波書店, 1961, p. 318.
- (24) 「世界の運命をなほ日々支配するこの崇高な人物を, 神と呼ぶことは許される。ただしそれは, イエスが神性のすべてのものを吸収した, あるいは神に一致したという意味においてでなく, イエスが, 人類をして, 神に向ひ最大の歩みをさせた個人であるという意味においてである。」ルナン前掲書, p. 373.
- (25) 佐古純一郎「芥川龍之介における芸術の運命」一古堂書店, 1956, p. 123.
- (26) 李商燮「新文学初期의基督教」〈現代文学의基督教〉(と) 文学과知性社所収, 1984, p. 34.

仰はそう簡単に消滅するものではない。むしろ東仁の一連の宗教作品は芥川のキリスト物に比べてより深い信仰の痕跡を留めているものとみなさざるを得ない。ここで改めて東仁が明治学院での留学時期に文学へ目覚めたことの持つ意味が論点になる。『第一次大戦で経済も文化も著しく発達した大正爛熟期』<sup>83</sup>は『「人生」と「芸術」との分裂を見ない日本の近代自我の歴史の幸福な一齣』<sup>84</sup>を成した『純文学の黄金期』<sup>85</sup>であった。『ザイン (Sein) とゾレン (Sollen) との幸福な一致を見せた』<sup>86</sup>大正期に偉大な人間としてのイエスを扱った作品が量産されたことは東仁の鋭敏な青春の魂に影響を与えずにはいらなかったであろう。東仁が一生芸術至上主義と芸術家絶対視観を信奉しつづけたことを想起する時、彼が人生の再創造作業にたずさわる芸術家としての自身を、偉大な人間であり詩人でもあったイエスの分身とみなすようになったことは自然な帰趨でもありえた。ここで看過されてならないことは東仁が植民地朝鮮の作家であったことである。日本に於て大正文学が不完全ではあるがブルジョアジー・デモクラシーの上昇期に便乗した芸術至上主義、自我主義の風潮の中で育成されたのとはその置かれた状況は全く異なるものであった。にもかかわらず、東仁が芸術至上主義に透徹したことはその歴史的、社会的意識の限界を見せている事実として批判されるべきものであろう。作家は意識的であろうが無意識的であろうが外国文学、思潮、文化一般にわたって影響を受けるものである。だが内在している原初的な気質と要求によって取捨選択された外国文学の受容とすべての影響を濾過した後に発顕される作品世界は独自のなものであることは贅言を要さない。

与えられた紙面が迫っているので東仁の作品に見られる日本文学との比較考察による相違点を指摘できないのは残念であるが、概していえば、より社会性の強いことと日本的な意味に於いての私小説が見当らないことを挙げられる。一般論的に言って、これは韓国の小説全般に該当するものと言える。韓国の歴史的、社会的状況は作家をして自己の世界への没入に限定することを許すべく甘いものではなかった点も考慮すべきであろう。

追記：なお、明治学院在学中の東仁に関する何らかのエピソードを入手したく、二宮 順、堀秀彦、前川正輔諸氏（大正8年度卒業生）に問い合わせたところご懇切な御返信をいただきました。紙面を借りてここに深謝を表するものです。

大事なんだ。”十戒を固く守っていた田主事が破綻を来すのは母が毛祿した後である。田主事は毛祿した母が下男、下女からさへ嘲笑の対象とされるのを見てその生は生きる価値のない哀れな物と断定する。母が一日でも生きながらえるのは自己侮辱につながるものと考えた田主事は母の為に母を殺すことにする。母親殺害の決心をした時の田主事の祈禱を見よう。\*今私は母を憎むという罪を犯しています。これも皆母が原因です。家族は皆、母一人のためにいつも気が気ではありません。母もまた苦しむだけです。このような人は神様に返すのが御心に叶うことと私は考えます。”(傍点一筆者) これは神の考えではない。田主事の考えであり判断である。田主事が\*殺してはならない” \*父と母を敬え”という戒律を知らなかったのではない。これは信仰という名を借りた田主事のエゴイズムの表白にすぎない。この作品を単に誤導された信仰心への揶揄劇としてかたづけしてしまえないのは、人間の法廷でも神の審判の席でも有罪判決を受けた田主事が\*神の御心に添うように親に孝行を尽しただけ”である自己暗示の呪縛に捕われたまま作品が終わる点にある。「信仰へ」は〈Eun-Hee〉という女主人公の信仰の推移を描いた作品である。作品はあくまでも虚構である(少なくとも韓国文学の観点からはそうである。)だがすべての作品は同時に作家から完全に独立したものではない。こういう観点から〈Eun-Hee〉の信仰の変貌の推移を考察してみよう。〈Eun-Hee〉は基督教家庭に生まれ幼児期から純粋な信仰を維持する。その信仰に最初の動揺がくるのは弟の死に直面した時である。与え、そして奪う神の摂理に〈Eun-Hee〉は\*求めよ、さらば得ん”を以て抗議する。だが、弟は死ぬ。この時から芽生えた懐疑心はそのまま反抗心につながり、それは\*科学的知識が増すにつれ感情的というよりは理知的に育つようになった”〈Eun-Hee〉をして\*科学的解剖力と批判力を具えるにいたって、基督教の欠点を発見するように”させる。結婚後、息子〈Philip〉を得た〈Eun-Hee〉は神の座に息子をすわらせた。だがPhilipの突然の発病と死は彼女をして自分の背教にたいする恐怖心をおぼえさせる。そして\*あの世でも子供と一緒に暮したい”と希う原初的な親の心は彼女の信仰を復活させる。一人息子の死という代償を払った信仰の復活を描いた作品が東仁の純文学活動の末期にあたる1930年代に書かれたということは示唆するところ大きい。晩年の東仁は聖書を愛読し、夫人が教会に出ることに異議をはさまなかった。<sup>89</sup> 東仁の宗教作品に表われた基督教観は正統的な福音主義に照らしてみる時異端的といえる側面を持つことは争えない事実である。だがそれがそのままAnti-Christianismにつながるものと結論を出すのは早急であろう。幼児期に培われた信



「信仰につらぬかれない聖書の理解が、聖書のさし示す真理からいかに遠いかを芥川のキリスト論は私たちに徹底的に露呈したのである」と佐古純一郎氏は指摘しているが、氏はこうも附言している。「もちろんキリスト信徒でない芥川のキリスト論が厳密な意味での教義的批判に耐えるはずはない……私自身けっして芥川のキリスト論を教義的な立場から肯定的に弁護する気持ちを持っているわけではない。しかしあの芥川のキリスト論こそ、私たちの精神史における「近代」から「現代」への内面的な移行のくさびではなかったろうか。」<sup>(9)</sup> 厳密な意味での教義的批判に耐えうる明治大正作家はどれ程存在するだろうか、懐疑的である。しかし日本では彼等は非キリスト的であったと評されても反キリスト的であったとの批判からは自由である。こういう context から言えば東仁こそ基督教の痕跡を生涯留めた作家であると言って然かるべきであろう。彼は Straus, Renan などに流れている自由主義神学の系譜をひくイエス観の持主であった点で異端視されているがそれがそのまま Anti-Christianism につながるものとみるのは早急であろう。彼の反基督教的な言辞が似而非信徒、誤導された信仰の形態に向けられていることは彼が反基督教ではなかったことを裏書するものである。東仁の代表作の一つである「明文」は伝統的な儒教の価値観を守りつつ生を全うしようとする父、田判書<sup>(\*)1</sup>と外来の価値観である基督教の倫理によって生を革新しようとする息子、田主事<sup>(\*)2</sup>との間に発生する葛藤を描いた作品である。この葛藤は当時の社会において充分ありえたことであり問題点でもあった。「明文」もやはり皮相的に受容された盲信の実態と教義を我田引水式に利用する教徒に対する暴露と揶揄がその基調をなしている。曲解された外来思想にかぶれて皮相的な模倣に終始する人間の悲喜劇を揶揄と嘲笑の対象とする作家的姿勢を東仁は堅持した作家であった。まちがった信仰の形態はその実態をよりよく知っていた東仁によってより鮮やかにリリーフされ、彼を反キリスト教的とする評価を誘導している。田判書は自分が選択した規範の枠を一步も譲らずその生を終える。一方耶蘇教にかぶれたトガで家を追い出された田主事は小さな食料小売店を営みながらささやかな慈善事業に明け暮れる。クリスチャンになった田主事の変貌はまずその妻に対する呼称が「お前」から「貴方」に変わったことにうかがえる。改心しない親の罪滅しのため田主事はささやかな慈善に没頭する。だが父の死によって小売店の空間程度の限られた世界認識の持主である田主事は、より豊かで拡大された大家の相続者になる。田判書は臨終の床にかけつけた一人息子にこう言いながら息をひきとった。「祈れ、無駄なことだが祈りたければ祈れ。だが僕はお前の神様よりお前がずっと

仁は正統的な福音主義に基づく基督教者の家庭の出身である。明治学院在学中にも教会に必ず出ており、教徒としての己れの行動にも細心の注意を怠っていない。だが、その一連の宗教作品「이 盞을」(1923, 「この盞を」), 「明文」(1925), 「信仰으로」(1930, 「信仰へ」)などは彼の信仰が正統的な教義から逸脱して新神学へ傾いていった過程を自証している。「이 盞을」(「この盞」)はゲッセマンの丘で人間的な弱さと懐疑に悩みつつ祈るイエスを描いた作品である。それはまさにルナンの「イエス伝」に見える「最後の幾日かのあいだ、ひどくイエスを壓へたということである。恐怖、躊躇は、彼をとらえて、死よりも悪い失神の中に投じた。大いなる観念のために、自己の休息も生の正当な報酬も犠牲に供した人間というもの、死が、はじめてその姿を眼前に現し、万事の空なることを説伏せようと努めるとき、いつも悲しく自己自身の上に立ち戻るものである。」<sup>㉔</sup>と同じ観点に立つものである。しかしイエスは克己し「万人を救うためにその一身を捧げようと決心した……いままでの苦悩と疲労は失せ、その心は新しい勇氣に満ち溢れた。」(「이 盞을」全集7, pp. 255-256)「盞の、滓まで飲み干すことを引受けたイエスは……受難の比類ない英雄であり、自由な信仰の権利の創造者であり、すべて悩める者が自分を強め慰めるために瞑想する完全な模範」(ルナン「イエス伝」)になったのである。ルナンにとってイエスはあくまでも偉大な人間である。<sup>㉕</sup>芥川龍之介はイエスをトルストイ、洗者ヨハネ、ゲーテ、そして自分自身を含める偉大な存在として捕えている。しかし、ルナンも芥川も反基督教教ではない。むしろ親基督教教なのである。それは佐古純一郎氏が指摘する如く「典型的知識人」としての基督教受容の一面であると言える。<sup>㉖</sup>東仁が表出した偉大な人間としてのイエス観、教徒と教会に対する嘲笑は彼を反基督教作家とみなす評価につながる。<sup>㉗</sup>だがその作品に表白されている基督教批判は祈福信仰と混同された信仰形態、腐敗した教会の在り方に向けられたものであったことを見逃してはならないだろう。<sup>㉘</sup>

東仁を反基督教教とみなす正統的な評価基準を適用する時「徳富蘆花がキリスト教から離れないで信仰を終りまで全うし、福音主義の正統的な信仰に回帰する転機をつかんだ」<sup>㉙</sup>との横山春一氏の言や「奇異な形であっても蘆花は最後までキリストにかじりつき……一生涯を通じて聖書から離れ去らず、いつもキリストを負うていた」<sup>㉚</sup>との阿部光子氏の肯定的な評価、正宗白鳥を「広義のクリスチャン」とみなす大岩欽氏の見解<sup>㉛</sup>には論争の余地があろう。上記のような脈絡から見て芥川龍之介に示している東仁の関心は示唆的である。「典型的な近代的知識人」としての芥川は「聖書を知性を通して理解」しており、

学史上初の純文学誌「創造」は翌年2月8日刊行され、東仁は創刊号に「我国の文学史上最も近代的な作品と言える」<sup>(9)</sup>「弱冠 者の 슬픔」(弱者の悲哀)を、朱耀翰は前記「Bul on ri」を著わした。「20歳の血気、そして先覚者という自負心と蛮勇」に支えられて刊行された「創造」は近代韓国文学の揺籃となった。早熟な天才作家東仁は、明治学院中等部三年中退の学歴と聖書から得た知識を基礎にして春園李光洙を継ぐ韓国文壇の第一人者としての地位を確立していった。

東仁が文学へ目覚めた時期は大正4、5年頃であり、これはその作品世界に看過できない痕跡を残している。東仁自身は当時の日本文壇をこう捕えている。「当時は有島武郎、菊池寛、芥川龍之介もまだ出世する前であって芥川たちの先生にあたる夏目漱石等の時代であった。」ここでの「当時」は、東仁が文学を志し明治学院中等部の回覧雑誌に日本語で始めての小説を発表した1916年前後を指すものである。(なお、この處女作は未発見であり内容もさだかでない。)この年の文壇状況を見ると谷崎潤一郎の「神童」(1月)、荷風の「腕くらべ」(8月)が発表されている。耽美主義文学批判論である\*赤木柎平の「遊蕩文学の撲滅」(8月)、白樺派のオ坊チャン性に対する生田長江の批判論「自然主義前派の跳梁」が発表されたのもこの年である。(11月)田山花袋、正宗白鳥等自然主義作家も力作を出している。(花袋「貧乏物語」「時は過ぎ行く」(9月)、白鳥「牛部屋の臭ひ」(5月)等)すなわち東仁が文学に目覚めた時、その雰囲気は様々な流派が混存していた大正文学期にあっていた。「社会思想の上で、前半期にはブルジョア的デモクラシー思想の昂揚を招き、後半期には早激に労農解放運動の擡頭をもたらした」<sup>(10)</sup>「国家の存在を無視して個人を世界と直結させようとする考え方——コスモポリタニズム」<sup>(11)</sup>に立脚した大正期に東仁が文学的覚醒をなすに至ったことはその作品に投影されずにはいられなかった。「芸術至上主義的信条を、疑いもないものとして抱きながら仕事のできたという点で極めて幸福であった」<sup>(12)</sup>「白樺派の文学が、明治大正初頭において文壇にもたらした……文学におけるエゴティスム」<sup>(13)</sup>を前提にする大正文学は東仁の信仰の変貌と密接な関係をもつ。芸術家は神と同等の位置にまで高められたのである。イエスは三位一体の神子性を持つ存在としてでなく、人生を再創造する芸術家と同等の偉大な人間、天才として受け止められるようになったといえる。これは大正期文人の天才崇拜思想と無関係ではない。武者小路実篤の「幸福者」、長与善郎の「青銅の基督」、芥川龍之介の「西方の人」など、大正期に一時流行した宗教文学に見えるのは偉大な人間イエスへの自己投影である。前述したように、東

た。”<sup>(4)</sup>

東仁は1900年10月2日、平安南道平壤市で屈指の富豪であり、平壤教会の長老であった金大潤の次男として生まれた。東仁の言葉を借りればその成長環境は下記のようなものであった。

「韓国が亡国の悲運に遭遇し、日本帝国の一植民地と化したのは余が十一歳の時であった。所謂〈不純鮮人〉の地である平壤、〈不純鮮人〉の集合所である基督教、これが余の成長環境であった。」<sup>(5)</sup>

東仁の父もまた憂国心に燃える青年志士の一人であった。「神の忠実な僕であると同時に国のために尽す人に育つように」いつも祈る東仁の父はまた「幼ない僕たち兄弟に袁世凱、孫逸仙たちの中国革命史や越南亡国史、伊太利建国三傑伝を読みきかせてくれ……衰運一路にある大韓国を憂え、志士安昌浩、李昇勲諸氏を家へ招いては兄と交遊させた」<sup>(6)</sup>りした。東仁はその家庭の雰囲気や「思想的」なものであったと述懐している。

14歳の少年東仁は崇徳小学校（1894年、Methodist Episcopal Church in the U.S.A. North 設立）、崇実中学校（1889年、Presbyterian Church in the U. S. A. North 創立）を経て、1914年父の希望通り「医者か司法官」への夢を託して日本留学の途についた。はじめは明治学院に入学しようとしたが彼にはその概念さえ把握できない文学論を云々する朱耀翰の下級生になるのが嫌で東京学院へ入学する。だが1915年東京学院は閉鎖され、東仁はその生涯の進路を変えるのに決定的な役割を果たした明治学院中等部二年に編入されるようになった。1917年3月父の死によって帰国するまでの明治学院ですごした三年の歳月は、東仁が文学に目覚め、文学者としてその一生を送ろうと決心した主動因をなしている。「島崎藤村らを輩出し、文学的雰囲気が伝統的に流れている」<sup>(7)</sup> 明治学院で東仁はゲーテの「若きヴェルテルの悩み」、スコットの「アイバンホー」、ダントンの「エイルウィン」（戸川秋骨訳）等を読みながら「実利的な効用はないが人の魂に直接訴える 尊い芸術の存在」<sup>(8)</sup> に惹かれていった。文芸部員として活躍していた朱耀翰の影響があったことは推測に難くない。1917年一時帰国した東仁は翌年「美学の基礎知識を得るのを感じて」再渡日し、川端美術学校に入学している。1918年12月25日は韓国民族史上特筆すべき日である。東京青年会館で開催されたクリスマス祝賀会で、1919年3月1日の己未独立運動の引き金となった「独立宣言書」の起草が決定されたことがその一つであり、いま一つは集会からの帰り道、東仁と朱耀翰が「創造」誌の刊行を決めたことである。韓国近代文

韓国に於いては国語守護の任務もまたその役目の一つであった。『聖書及び讃美歌の普及は少なくとも韓国にあっては神の救いの事業にも劣らない影響を言語生活と文化面に及ぼした。』<sup>(4)</sup>との趙演鉉氏の見解は韓国が置かれていた特殊な状況に鑑みる時初めて納得しうるものであろう。基督教が当時の社会的、政治的な閉塞状態からの一つの脱出の方法として受け止められた状況は一面明治初期の自由民権運動と基督教との接近に相似した点もあると言えるが、基督教が一種のエキゾティシズム、或いは西欧文明を学ぶための開化主義に便乗したハイカラ趣味として受容された側面をも持つ日本基督教受容史と韓国のそれとは岐路を異にせざるを得ないものであった。『精神的革命は時代の陰より出づ』との山路愛山（『現代日本教会史論』）の言葉は韓国でのより拡大された基督教受容の理由の一つになっている。

李光洙、金東仁ら韓国近代文学の幕を開けた青年たちは「文学界」同人のような浪漫主義的ヒューマニズムへの移行が許されない状況にあった。李光洙、金東仁、朱耀翰は等しく進取的な気質に富む、新思想なかんずく基督教が最も盛んだった平安道出身である。しかし金東仁の信仰は日本留学を通して大きな変貌を見せている。限られた紙数で明治学院とかかわりのある韓国作家を全部とりあげることはできないので、ここでは金東仁を中心に初期韓国文学と明治学院の関係について述べたい。また、東仁文学の全貌に照明をあてることは無理なので本稿ではその宗教作品に見える基督教信仰の推移に焦点を絞ることにする。

金東仁（1900—1951）は韓国近代文学の成立期に重要な役割を果たした作家である。1920年代の韓国文学の成果は東仁文学の水準で評価されて然かるべきだとの李康彦氏の見解は<sup>(5)</sup>東仁が近代文学史上占めている比重からいって妥当なものである。その重要性に照応して東仁文学は多岐、多量に渡って研究されているが、その文学史上の位置づけは次のように纏められる。(1)純文芸同人誌「創造」を創刊し、(2)同誌を通じて文学の専門化ないしは純粋化を図った。(3)近代的リアリズム小説を定着させ、(4)短篇小説のジャンルを確立させた。東仁は多様な創作様式を試みた作家でもあった。歴史小説、翻訳なども試みており、（日本人作家のものとしては有島武郎の「死と其の前後」を翻訳している。）韓国初の本格的な文学評論であると同時に卓抜した水準を堅持している「春園研究」（李光洙研究）を著わしている。『文学それ自体を意欲した東仁が新文学の初期に前人未踏の多様な創作様式の創出に傾注したことは芸術至上主義者としての東仁には自然なことであっ

基督教家庭の出身である。明治維新後、日本に於いて基督教伝道の主流がプロテスタンティズムにあったと等しく近代韓国に於いての宣教活動もまたプロテスタンティズムがその主潮をなしていた。日本と同じく韓国でも初期の伝道活動は新教育と医療事業並びに社会事業の形で展開された(1884年H. N. Allen の廣恵院の開院。現在の延世大学校の前身。1885年の Methodist Episcopal Church in the U. S. A. North による私立学校培材学堂, 1886年女子教育のための梨花学堂の設置など。) 外勢の圧力の下で亡国の危機意識が高潮しつつあった当時の韓国で colonial mission (植民的宣教) の類型から脱皮した Nevins method による self-propagation, self-government, self-support の精神を鼓吹するプロテスタンティズムは「政治, 経済, 倫理すべてが麻酔状態に陥り塗炭の苦しみを味わっていた」<sup>(5)</sup> 一般大衆, 中でも進歩的な青年層, 知識階級に新時代の新倫理として受容された。のみならず外国の侵略意図が露骨化するにつれ李王室もまた基督教の宣教活動に好意を寄せるに至ってその受容史は明治初期の日本での受容史とは自ずから異なる様相を呈するようになった。教会は憂国志士の一種の依り所となっていくたのである。「依頼無拠の庶民がその無力感からの脱却を図って」<sup>(6)</sup> 頼りようになった教会は「彼等の生命と財産を保護する」<sup>(7)</sup> 機関でもありえたのである。一方憂国の志に富む青年知識層には基督教は次の記事に収斂されるものでもあった。「今日, 文明開化とか自主独立とかいう言葉はこれ皆耶蘇教から出たものであって」<sup>(8)</sup>、万物を創造された神は人間には自由である権利を賦與された。……神を敬う人は自由権を剝奪されず……人みなその自由権を全うする時, 国の自主権もまた保存されるものである。」<sup>(9)</sup>

昨今の韓国に於いての基督教の隆昌はその歴史的役割に負うところ多大である。大衆を伝道の対象とする宣教方針に基づいて聖書は Han-kul (韓国文字) で翻訳され, いまだ漢字尊重の気風が強く残っていた当時の韓国に新しい Han-kul 尊重の価値観を形成したことも看過できない功績である。「純粋に Han-kul を使用して……Han-kul 蔑視の念を打破し……教徒はすべて Han-kul を解読できるようになったことは基督教の甚大な功績である。」<sup>(10)</sup> しかも日本植民地時代の末期に日本当局が朝鮮語抹殺政策を強行した時「基督教教会だけは Han-kul 聖書を用い, 牧師は流暢な韓国語を以て説教をし, 讚美歌は韓国民族の情緒を直截に伝えたのであった。……韓国語守護の功績は基督教にあったものと認めざるをえない。」<sup>(11)</sup> 聖書の翻訳は James Version が英語に与えた影響の如く, 伝道のみならずその国語にも多大な影響を及ぼし, 言語の再創造につながると言われているが,

## 資料 2

# 韓国近代文学史上にみる明治学院

— 金 東 仁 —  
Kim Dong-In

高麗大学校教授

金 春 美

明治学院に一時籍をおいたことのある、或るいは卒業した韓国留学生の中には韓国近代文学史上重要な幾人かの人物がいる。そのひとりとは韓国近代文学史上初の本格的な近代小説の上梓と評価されている<sup>(1)</sup>「無情」の作家李光洙（1907年、明治学院中等部三年編入、1910年普通学部卒業。なお、卒業生名簿には香山光郎として記載されている。）である。さらに金東仁（1915年東京学院より明治学院中等部二年へ編入。大正4年度「白金学報」36号転校、新入生欄参照、1917年春中退）があり、韓国初の西欧的な形態の近代詩「<sup>BuLNO</sup>을 놀<sup>Ri</sup>이」(火遊び)の作家朱耀翰（1918年中学部卒業）もそのひとりである。

李光洙の「無情」にその端を発する、韓国近代文学の系譜は金東仁へとひきつがれ、その確立を見、1919年3月1日の己未独立運動以降展開された多様な形式の近代詩の基礎づけは朱耀翰の「<sup>BuL No Ri</sup>」にあると言い過ぎではないとの指摘は<sup>(2)</sup>明治学院と韓国近代文学との関わりの大きさを物語る事実である。李光洙の作品に流れている理想主義の中心をなす思想を人道主義とみなす時、それはまさに基督教と聖書にその源をおくものであり、<sup>(3)</sup> 朱耀翰の作品に漂う理想主義的な傾向はいずれも明治学院ではぐくまれた基督教思想と無関係ではない。

＊明治学院の同窓生名簿には朴泳孝、金玉均をはじめ白南薰、文一平、金親鎭、畫伯の名があり……今日わが国で活躍しているあまたの人材には明治学院を経た人が少なくない。<sup>(4)</sup>

との金東仁の回顧談もあるが、明治学院と韓国留学生の緊密なつながりは明治学院がミッション・スクールであった点にもある。朱耀翰は牧師の息子であり、東仁は信仰心の篤い

昭和六十年十月三十一日 印刷  
昭和六十年十一月一日 発行

明治学院史資料集 【第十二集】

東京都港区白金台一ノ二ノ三七  
編集代表 高 田 章

東京都港区白金台一ノ二ノ三七  
発行者 森 井 眞

東京都港区白金台一ノ二ノ三七  
発行所 明治学院大学図書館  
電話(〇三) 四四八―五一八八

東京都世田谷区経堂五ノ三七ノ四  
印刷所 株式会社 三五 堂  
電話(〇三) 四二七―三五一〇